
ガーディアン～守護霊～

弥七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーディアン〜守護霊〜

【Nコード】

N9354F

【作者名】

弥七

【あらすじ】

幽霊なんて存在しない。そんなものはファンタジーの世界のものだ。そんな常識はある日突然崩れ去った。日常に潜む悪夢に俺は引きずり込まれていくことになる。

プロローグ

俺は一人街を歩いてきた。街は駅の付近にあるということもあり、それなりに人があふれかえっている。雪が靴のそこに張り付き歩き辛いが、足取りは確かだった。

行く当ては決まっている。ただ、時間をつぶしていた。

今は雪の降る高校二年の冬。思い出せばもう1年も前になる。そのときも俺はこの街を歩いていた。

〈1年前〉

「あゝ、ヒマ……」

平日の放課後、することもなく一人で街の散策に来ていた。健全な高校生であったが、さすがに街を独りで歩いているのは俺ぐらいだ。たった今、コンビニから出てきた中学生ぐらいのカップル。仕事終わりに寄り道をしていく会社員。たいていは友人、恋人とかと楽しげに歩いている。

街は、駅前の近くということもあり、それなりに。という感じににぎわっている。その中を一人、行く当てもなく漂っていた俺は、まるで自分は違う世界を歩いている。そんな錯覚を覚えた。ちらつく雪が拍車をかけている。

一人でいるのは別に人が嫌いというわけではない。

ただ、人とつるまないのだ。

誰かを思いやる。それが苦手なのだ。

そんないつもと変わらぬ日常

「おっと、」

普通どりの目線で歩いていたが俺の足元、膝あたりになんかぶ

つかった。見ると、小学校低学年ぐらいの少女が俺を見上げていた。少女は、真っ白なコートに艶のある長い髪が人形のような印象を与える、しかし妙に希薄な気配に違和感を覚えた。

「大丈夫か？」

俺は少女を怯えさせないようになるべく優しくしたつもりだった。でも少女はそのまま何も言わず、俺には目もくれず脇を抜けて走って行ってしまった。

俺は特に何も思わなかった。ただ何気なく、少女の走る先をしていると……

「おい！あぶないぞ！」

叫んだ瞬間、それまで少女がいたところにトラックがあった。つまり少女は車道に飛び出していたのだ。

少女が走ったとたんトラックが突っ込んだ。

しかし、赤信号だから当然といえば当然だ。トラックのほうも何か轢いたと思ったたらしく車を止め、降りて確認しに来た。

もちろん俺も駆け寄った。

「おい！あなたなにやってんだよ！」

感情のままに怒鳴りつける俺をトラックの男がビクツツとして俺を見た。しかしそこで俺は彼の顔には見覚えがあった。

「あつ、あんたは……」

知ってるオッサンだった。オッサンも俺を知っていた。

「ああ君は、金城君か、びっくりしたよ。」

このオッサンは俺の家の近所に住んでいるトラック運転手（輸送会社勤務）だった。白髪交じりの気が利くオッサンで特に悪い印象もない。俺の一家がこの街に引っ越してきた時からの知り合いであった。

ちなみに俺の名前は「金城 京平」っていうんだが。

「いやあ。私も子供を轢いたかと思っただけだね。誰も轢いてな

「いみたいだよ。」

その言葉を聞いた瞬間、何か違和感をオッサンから感じた。しかしそれはすぐに気のせいだったかのように感じなくなった。

俺はトラックに下を確認したが誰もいなかった。

どうやら、何とか回避したようだ。それにしても少女がどこにも居ないのが気になるが、俺の反対側に行けば確かに見失ってしまう。

「じゃあね。私は急ぐから……」

話は終わり、私は急いでいるから、といった風情でオッサンはトラックに戻り、

トラックは行ってしまった。

俺はどうにも腑に落ちなかったが、しばらく交差点を眺めた後、帰ることにした。悩んでいたところでどうしようもないからだ。

翌日、俺は学校が終わってから、街には行かず、家でゆっくり過ごすつもりだった。俺の家の今には大きなコタツがある。雪の降る寒い地方だが、冬はこのコタツだけで何とかしのぐのだ。

テレビの前でコタツに入りながら、雑誌を見ていた。

「京平、あんた学校でもうテストの結果出たんだって？」

だんだん睡魔が近づいてきたころ、母が聞いてきた。

我が親愛なる母、金城由紀は、訳あっていない父の分も働き、女手ひとつで俺を育てていた。

「ああ、かばんに入ってるよ……」

俺は、遠まわしに自分で確かめてくれ。といってテレビの電源をつけた。

するとテレビのニュースが目に入った。

「えー、今日の午後5時28分。トラックが暴走運転をし、電柱に

激突。運転手は病院に運ばれたがまもなく死亡しました。運転手の身元はわかっており、市内在住の……」

間違いなく、近所のオッサンだった。

プロローグ（後書き）

不思議系ファンタジー的な何かを予定しています。

バトルシーンや恋愛などもどうにか入れたいと思います。どうかよろしくお願いします。

第一話 第一章「少女」（前書き）

俺は街を歩いていると、少女とぶつかった。そのまま何もいわず走り出すと、トラックに轢かれてしまう。

しかし、トラックに駆け寄ると少女はいなかった。

トラック運転手は知り合いのオッサンだった。

翌日のニュースでオッサンが事故で死んだと報道された・・・

第一話 第一章「少女」

「母さん、悪い、ちょっと出かけてくるから……」
有無を言わず俺は家を飛び出した。目指す場所はもちろんあの交差点。俺とオッサンが最後に会った場所だ。

「嘘だ……絶対に」

別にそこまで親しいわけではなかった。だが、昨日まで普通に話していた人間が、死ぬというのは、誰であれ嫌だった。

現場までは走ってきたからか、すぐであった。そこには人だかりと無残な姿になったトラックが横たわっていた。

俺は一瞬、その光景が理解できなかつた。

どれくらいの時間が経っただろうか。人々が話しが聞こえてきた。
『運転手の暴走運転だったらしいよ』

『まあ、怪我人が運転手以外に居なかつたらしいからいいじゃん』
『でも、死んだんでしょ？ 運転手』

トラックは事件後そのままの状態で、道は渋滞していたため撤去はたぶん明日になるだろう。

すると人だかりの中から聞きなれた声が聞こえた。

「おう 金城じゃん。お前も野次馬しに来たのかあ？」

クラスメートの秋元がいた。ついでに山下と川上もいた。

こいつらは中学からの仲だったが、最近俺ではなく女子と遊んでおり、今会ったのも偶然だった。そして今日は珍しく男だけだった。

「どうした？ そんなにあせて」

川上ののんきな問いには答えず、俺は三人に迫るように訪ねる。
俺がここまで来たのは、ただ単に無残なトラックを見に来たわけではない。ずっと気になっていたのだ、昨日の少女。トラックに轢かれたはずの希薄な少女。

「このへんで小学生ぐらいの女の子を見なかったか？」

少女は死なず、おっさんが死んだ。となれば、どこかに少女がいるのではないか。そして少女は何者だったのか。

「うへえ、まさかのロリコン発言？」

山下が冷やかす。俺はそれを無視してさらに叫ぶ。

「ちがう！ そんなんじゃない！！」

俺の真剣さに圧倒されたかこいつらも真剣に考え始めた。

金城つて妹いたっけ？とか意味のないことだったが……やがて

「もしかしてあの子のこと？」

川上が指差した先には、間違いなく昨日の少女。

人だからから離れたところ、裏路地へ通じている通りのちょうど手前に、独りぼつんと立っている。

いわれなければ気付かないような感じだ。

俺は急いで駆け寄った。3人も後から付いてきた。

「なあ、君、昨日ここにいたよな？」

「……………」

俺を完全に無視。

すると秋山が、怒ったように言った。

「おい、きいてんのかよ！ なんとか言えよ！！」

まあまあ、と他2名がなだめる。

不意に少女が口を動かす。何か小声で何か囁いているようだ。
「ん？なんだ聞こえない。もっと大きく……」

俺は必死にその声を聞こうと顔を近づける。

秋元たちはあきれて帰ろうとして、俺たちに背を向けた。

少女の口はパクパクするだけで、声が聞こえない。

やがて秋元たちが遠ざかってから、笑いを含んでこういった。

「アブナイヨ アナタノ ト モ ダ チ」

「え？」

俺は一瞬凍りついた。何のことか理解できなかった。だから少女が背を向けた秋元たちのほうに走りだしたのにも気づかなかった。

「あつ、こいつ俺の財布とりやがった！」

という秋元の怒り声と他二人の笑い声で我に帰った。

秋元は自分の財布取った少女を追いかけていった。

他二人はただ見ていた。

少女は路地に入った。

秋元は追いかけた。

俺も追いかけた。

そして。

秋元が路地に入り、見えなくなった。

見えなくなった。

見失った。

失った。

俺の頭の中であの少女の言葉。トラック運転手のオッサン。見失った秋元。

それらが順番に思い浮かんだ。
そして俺。

「秋元……？」

俺は恐る恐る路地に入った。
しかしそこには誰もいなかった。
いない。ただそれだけ

「秋元お！」

叫んだ。路地の奥まで走っていった。
振り向けば、川上、山下がない。
俺の不安は絶頂に達した。
次は不安ではなく恐怖が来るような気がして……
そして俺は……

第二話 「悪夢」

俺は見つけた。

少女を。

響く。少女の笑いが。

「アハハハハハハハツ、面白いのね」

あの少女が笑っている。すべての元凶、俺の日常にヒビを入れた少女は俺を見下ろしている。

少女は浮かんでいた。フワフワと、何の力も無く、気ままに風に乗って。それはまるで、幽霊。

その顔には、絶対の悪意。そのくせ笑っているのが余計な恐怖を掻き立てた。

「アハハハハハハハツ、あなたの大事な”オトモダチ”が消えちゃった！アハツ」

「秋元はどこだ！」

恐怖で声が上がっていた。戦っても絶対に勝てないと確信しながら、逃げることもできないでいた。足がすくんでいるのか、それとも少女が空を浮いているように不思議な力が働いているのか……それすらもわからない。

「次わあ、アハツ あ・な・た」

少女が宣告した。

俺は死ぬのか……？ 思わず身構えた、何が来ても耐えられるように。

その刹那

「うっ、あああああああああああああああああああ

ああっああああ！！」

突如俺を襲った激しい頭痛。視界がぐらぐらする。立ちくらみの比じゃない気持ち悪さが全身を駆けぬける。

なんとか目を開け、かすむ視界で焦点を合わせると少女の手が青白く光る触手のように伸びて、俺の口の中に流れ込んでいた。

俺の口に感触はなかったが、何か挟まっているようで閉じることはできなかつた。

耳鳴りも激しく立っていらなくなり壁によしかかるように倒れこんだ。

目がかすむ……頭がぼーっとして、でも気持ち悪かった。

もう限界だった。少女に対する怒りや憎しみはどうでも良くなり、もう終わってほしかった。

自分がもし、死んだとしても。

突然少女が炎に包まれた。

真っ赤な炎は激しく、少女を包み込む。しかし、俺にとってはそれが不思議と暖かく感じた。

それと同時にこの気持ち悪さも消えていった。

「クソッ、何だ貴様ア！」

ふと見れば、俺を苦しめていた少女と対峙する女の人がいた。彼女の手には炎が灯っていた。決して熱そうではなくしていたが、その炎に包まれた少女は熱そうだった。

どうやらこの人が俺を助けてくれたらしい。

「まさか……こいつの守護霊か？」

守護霊。そう言われた女の方は美しかった。

俺はまだ立つことができなかつたが、女の人に見とれていた。そ

の人は和服を着て（普通の着物ではなく巫女服に近いと思った。）髪を後ろでポニーテールのようにしていた（正しい名称があるんだろうが、俺のボキヤブラリーにはなかった。）整った顔立ちには、まだどこか幼さが残る、俺と同じか少し上ぐらいだろう。その人が口を開いてこういった。

「そう。私はこの、金城京平の守護霊。真だ。今すぐ立ち去るのであれば、今なら逃がしてやっても良いぞ?」

「ちっ、ふざけるなあ!」

少女がまったく似つかない声で叫び、真と名乗る自称俺の守護霊は、一言。

「仕方ない」

とだけ言った。

第三話 「真」

真の一言から戦闘が始まった。それと同時に真の手に炎が灯る。突如、飛び掛った少女の髪が異常に伸びていた、それらはどんどん鋭くなり、針のようになった。そしてそれがすべて真を狙う。

刹那。

一瞬だった。針が真めがけて発射、が、真は、動じず（といっても動いたところでかわせそうになかったが）その手に灯る炎を針の雨に思いつきり投げていた。

投げられた炎が火の粉を飛ばし衝突。と思ったら、火の粉は幾本の包丁になり、針の雨を蹴散らす。そのまま少女のほうへ。

少女は包丁に顔を切り裂かれるすんでのところかわし、路地にあるビルの壁を蹴って素早く真の間合いに入ってくる。

が、真の方が反応が早く、少女は頭に回し蹴りを食らう。しかし少女の髪が真の足に絡まり、真は体勢を崩す。

「くっ、」

真がこぼしたが、すぐに反撃に移る。手に炎を灯し、髪を焼き尽くそうとする。少女は、後ろに下がり距離をとろうと髪を真の足から解いてバックステップを踏んだ。

しかし少女が前を見た瞬間、目の前に真がいた。

少女がバックステップを踏むと同時に真も前に飛んだわけだ。

「ちい、」

少女は身をよじり、真の正面から外れる。
しかし真はその場から、炎弾を放ち、少女の動きを阻める。

「そろそろ諦めたらどうだ？」

真はまだまだ余裕、という感じで言った。

その言葉に反応したのか、少女は叫び声を張り上げる、と同時に髪を槍のように1つに束ね、またそれが鋭く尖っていく。

それがまっすぐ伸び、真を狙う。

「……甘いぞ？」

一直線に飛んでくるものだから、真が真上に飛ぶ。そのまま空中で反転

少女が気付いた時にはもう真が後ろにいた。

少女が後ろを振り向くと真は少女の額に指先を向けていた。

「印」

言っと、少女の額に烙印が押される。

漢字で何か書いてあったが読めなかった。

……。

「破裂」

少し間をおき、一言。

次の瞬間少女の頭が破裂していた。破裂した頭は紫色の煙となって消えた。体も同様に消えていった。

路地に夕日が差し込み、俺は寒さがほんの少し、和らいだ。
静けさ。

真……と名乗った自称俺の守護霊。
彼女が近づいてきた。

「あんたは誰だ？」
俺は反射的に聞く。

「私は貴方の守護霊だ。」
彼女の端正な顔が夕日に照らされ美しかった。
そして、うすく消えていった。

第四話 「守護霊・・・？」

俺は目が覚めた。

自宅、ベッドの上、時間は・・・午前1時。

「夢・・・かあ。」

と肩から力が抜けた。

正直夢でよかった。それがもし、現実だったとしても。

「腹減った・・・」

夕食を食った記憶がない・・・というかどこまでが夢だ？

起きてなんか食いにいこう・・・

！

発見。隊長、少女を約一名発見しました。

と、ふざけてる場合じゃない。

ここは俺の部屋だ。当然妹はいないし、母はもう寝てるはず、では・・・

「お前は誰だ！？」

少女は俺に背を向けて、テーブルの上でなにやら食っているようだった。

「ふぐつ！？」

なにやら詰まらせたらしい。

テーブルの上に水があった。隣に母の置手紙と風邪薬のビン。

少女は水を飲み、俺は置手紙を見る。

『熱があるようなので、夕食はここにおいておきます。薬も飲んでね。母より』
と言うわけで風邪薬か。
熱は風邪ではないだろう。
そんなことより

「お前は誰だ!？」
また聞く。

今度は落ち着いて
「私はあなたの守護霊だ。」
と返してきた。

とりあえず沈黙。

さて、整理しよう。

俺が夢(と思っている)であった守護霊はもっと大人っぽかった。
でも目の前にいる守護霊は、中学生かどうか怪しい感じだ。
でも、服装や髪型、顔立ちもなんとなく似ていた。

「ふざけんな、それは俺の飯だ。」
とりあえず飯を食われたことにキレる。

「それに、守護霊なんかいるわけないだろ。」
と、常識で言い返す。しかし

「でも、夕方に会ったこと覚えているでしょ？」
夕方の一件は夢だったんだ。そう思いたい。でも……

「ああ、おぼえてるよ。」
一応覚えてるし、こういわないと話が進まない。

「うん。その時、少女と守護霊にあったでしょ？」

「ああ、会ったな。」

会ったのではなく襲われて助けられたのだが・・・

「その守護霊が私。」

そうなのか・・・？

「ああそうかよ。でもあの少女はなんだったんだ？」

「少し長くなるよ。まずこの世には、人間のほかに、悪夢と守護霊
がいます。」

真（と思われる）が先生ぶった感じで説明を始めた。

「せんせー。質問です。」

「はい。金城君！」

「悪夢って何ですかー？」

俺はアホの子っぽく聞いた。いや、だめな子っぽいか？

「はい。あなたが夕方に会ったのがそうよ、普通は人間には見えな
いんだけど、

あなたが会ったのみたいに、人間に悪戯をして喜んでるやつとかも
いるの。」

そーゆーやつらから人間を守るのが守護霊ね。」

「はい。だいたいわかりました。」

俺はふざけて答えていたが、話の内容は理解していた。

「で、次は守護霊です。守護霊は普通人間には見えません。そして

一人に付き一人守護霊が憑きます。」

「せんせー。また質問です。どうして僕は守護霊が見えるようになったんですか？」

守護霊・・・つまり真は、夕方見た姿とは少し違っが見えている。

「はい。それはですね、あなたは、守護霊に悪夢から守ってもらいました。」

普通は夢だったということにするそうですが、霊感が強いあなたは、私の存在に気づき、

つながりができて見えるようになったと言っわけです。」

「へーって俺は霊感が強かったのか!？」

驚きだ。そんなこと一度も言われたことなんかなかったから。

「そうだけど・・・」

「あゝまあいい。つまりこつこつと。」

悪夢から守ってもらつと、霊感が強かったら守護霊が見えるようになるんだな?」

「うん。まあ見える人は、あんまりいないけどね。それに悪夢から守ってもらつのはきっかけに過ぎないけどね。」

「その辺はわかった。でも俺の守護霊はもっと大人だった。」
こんなチビではない。

「それはね・・・また今度ね。」

「はあ?なんで」

「長くなるし・・・あっ、でもね。ひとつだけ教えてあげる。私はね。悪夢や守護霊から絶対的な悪意を向けられると、本来の力が使えるようになるの。」

本来の力・・・つまり大きくなるということが。

「ああ、わかった。じゃひとつだけ・・・他の人からは見えないんだな？」

「もちろん今までもいたんだから。」

「ああ。もう寝るよ。明日も学校だし。」

そういつて俺は、真が食ってたおにぎりのあまったひとつを食って水を飲んで寝た。

第四話 「守護霊・・・？」（後書き）

次回からやっと学校が出ます。この話の設定がわかりにくいかもしれませんが、だいたいわかってくれるとうれしいです。

第五話 第二章「学校」

俺は、かるゝい朝食をとりながら新聞のテレビ欄だけ見ていた。母はもう食事を済まして、テレビを見ている。その隣に真がちょこんと座っているが、気づく様子はない。

(ほんとに見えないんだな・・・)
すこしほっとした。

「あんたもう学校行く時間じゃない？」
現在午前8時5分。

家から学校まで20分はかかる。
余裕を持って入りたいので、朝食のトーストを諦めて家を出た。

「いつてきまゝす」
ついでに真が肩に飛び乗る。重さは感じなかった。
だから歩き始めてから小声で聞いた

「どうして重さがないんだ？」
少し失礼だったか？

「うん。えーつとね、この状態が憑くってこと。」

「もっと詳しく言ってくれ」

「だから、守護霊は人間には触れないけど、物には触れるの。でもこうして主の肩あしに乗る・・・つまり憑くと物にも触れなくなるの。」

「ふーん。」

とか言ってるうちに学校に着いた。
校門から俺の教室に行く途中に秋元に会った。

「よお、金城じゃん。なあ聞いてくれよ。」

「ああ教室に入ってからな。」

そういえばこいつ昨日行方不明になったな。

教室に入るなり自分の席に向けて思いつきりかばんを投げる秋元。
しかし失敗。床に落ちた。

とりあえずそのかばんを蹴っ飛ばして俺は窓際の自分の席に着いた。

「人のかばん蹴ってんじゃねえ！」
まあ。いつものことだ。

「そんなことより聞いてくれよ。俺昨日さ、お前と会ったろ？その後気づいたら隣のプールに居たんだけ？不思議だろ今冬なのに。」

「」愁傷様。」

とだけ言っ窓の下の棚に腰掛けていた真を見た。

「あのね。その人は悪夢に悪戯されただけだから大丈夫。」
と真が説明してくれた。
今思うと間抜けな話だった。

「ほら予鈴が鳴るぞ」

秋元を追い返し、HRが始まる。

退屈に時間が過ぎていく……

今日は真を見てるだけで暇をつぶしていた。

三時限目が終わり次は数学。陰湿な男教師の授業だ。正直だるい。

すると教室がざわめく

「次の数学、テストだってよ……」

「おいおい、前回の終わりにいつてただろ。ワークから問題出るらしいぜ」

「まじかよ……やっときゃ良かった……」

俺には関係なかった。テストなんかどうでもいい。

それでも赤点を取らないことにすこし誇りに思ってた。
が……

「ねえ金城君。ワーク貸してくれる？」

女の子の声。声の主は同じクラスの桜井優希だった。

秋元曰くかわいいが他の女子から守られていて手を出せない人物だ
と言うことだ。

まあどうでも良いが……

「いいけど、何で俺？」

「い、いや……迷惑だった？他の人みんな勉強に使ってるから……」

俺が使っていないからだそうだ。

「ほれ」

「ありがとう。次の時間まで借りるね。」

「問題といてもいいぞ」

白紙だから。

彼女は微笑んで自分の席に戻った。

それから数学教師の榎本が来た。

そしてテストが始まった。

.....?

わかんねえ。

最後の文章題なんか読む気もおきねえ。

諦めて窓の外でも眺めていようと思った時見つけた。

真を。

真は誰にも見られない。

カンニング。

俺は机に真へのメッセ ジを書いた

『たのむ、前のやつ答案を見てきてくれ』
真は顔をしかめた。

「ダメ。」

ケチ。と思つたが、真に頼むしかない。

『なんか食わせてやるから』

守護霊に飲食がいるのかどうかも知らなかったが、とりあえずそう書いた。

「うーん、じゃ今日だけ特別ね。」

と言って前のやつ机に回りこんだ。

扱いやすいのかそうじゃないのか……

「そこはね……」

真の言う答えを書き写していると榎本と目が合った。

にやり。と笑った気がする。
キモい。

「ほうほう・・・」
榎本が近づいてくる。

俺はとっさに真へのメッセージを消した。

「カンニングはいけませんなあ」

「なに？」

「前の人の回答を見たらいけませんよ？」

「見てねえ」

ばれてたのか？こいつに守護霊が見えるのか？

「後で職員室に来なさい。もうテストは終わりだ前に回せ」
イライラした。何でこんなやつに・・・。

授業が終わり、教室を出て行くこうとする。が桜井に止められた。

「あの・・・いかなくてもいいんじゃない？」

「え？お前もあいつが来いっていったの聞いたろ」

「でも金城君はカンニングしてないよね？」

そう聞かれるとなんともいえない。
実際していたから。

「ああ、おれはな」

といてごまかした。

「何をしているのだ。早く来い」
榎本にせかさね俺は教室と桜井を後にした。

第六話 「職員室にて。」

職員室。暖房とコーヒーのにおいでムンムンしているこの部屋には今、榎本を入れて2人しか教師はいなかった。

もう一人は、若女教頭で、年齢もまだ20代後半から30代前半に見える。

（一部の生徒からは、コネで入ったのではないかと評判が悪いんだよなあ……）

「まあこつちに着たまえ」

教頭がいる前でさすがに守護霊の話はないだろう、いや、もしくは教頭も霊関係なのだろうか？

ちなみに教頭は「藤崎 恭子」と言う名前だ。

「カンニングの件だが……単刀直入に言おう。守護霊をつかうなズバツ。つときた。当然ここで認めるわけにはいかない。」

「何のことですか？」

いかにも、頭が逝ってるんすか？と言いたげな顔で言った。ここで認めれば俺は何かされるだろう。

「隠さなくてもいい。そのオチビさんを使っただろうが」

「なんのこつやら……」

「ロリコンか？」

「違います」

「そうか」

「変態ですか」

「馬鹿にするな」

「すみません」

意味不明だ。やはり真に関係あるのだろうか。

「いや、とすると守護霊が変わったのか」

榎本は、自分の考えを堪能するかのようにはいた。

「えっ？」

初耳だ。守護霊が変わる？

もしか……榎本は知ってるのか？

「教えてくれ」

これは守護霊を認めると言うこと。つまりカンニングを認めた。ということ。

でも俺にはそんなことどうでも良かった、つまり守護霊についてもっと知りたかった。

真は教えてくれないし……

「ほう……まあいいだろう教えてやる。

守護霊はな、人間のように成長する、つまり生まれた時は赤ん坊。幼年期、少年、青年、大人と言うように成長していく。成長スピードは人間より速いが……その中で途中なんらかの影響で守護霊が死んでしまうことがある。当然人間は取り残される。

そこに悪夢などが漬け込むと危ないため、新しい守護霊を宿すわけだ、その新しい守護霊は、主を変えたことにより、本来の力が使えなくなり、子供の姿になる。それがお前の今の状態だ」

一気にいいきった。えーっと

「そう。そのとうりよ」

真がやっとしやべった。

「私は今から二年前くらいにあなたの守護霊となった。つまり前の守護霊は死んでしまったのよ」

「そう……か」

実際前のやつなんか知らなかった。だからどうでも良かった。

そんなことより

「何で先生は僕の守護霊が見えるんですか？」

榎本の守護霊は俺には見えない。なのにやつは俺のが見えている。劣等感と言っちゃつだ。

「ははっ、私ぐらいになれば『つながり』がなくても見えるようになる」

乾いた笑をしながらそういった。

「『つながり』ってなんだよ」

自分にわからないことがあるすぎる。

それでも必死に榎本との差を埋めようとする。

「そんなにいうのなら、その守護霊に聞けばいいんじゃないか？」

真を指差す。

「なっ、！」

指された真は、怒り、いや驚きで固まっている。

そうか。

「じゃ、詳しい話は、こいつから聞きますので、それでは」

と言って俺は職員室の出口を目指す、あと十歩！

だが……

「まで、本題はこれからだ。カンニング、したんだろっ?」
ゲームオーバー。バッドエンドだ……。

それから予鈴がなるまでみっちり絞られた。教室に戻ろうとして、足を止める。

教室も前にシヨートヘアが揺れている。
桜井だ。

俺を見つけて、小走りでやってきた。

「あ、金城君、これ」

数学のワーク、貸してたやつだ。特に問題を解いた様子は見られない。

「もう予鈴なったぞ、昼休み、終わるだろ。」

つまりおれは昼メシを食い損ねたというわけだ。

いつ食おうか……。

「ああ、うん。そうなんだけど……ちよつと、えと……」

桜井はうまく口が回らないようだった。

いつもは俺と話すことがないからかな?

自然と俺は真を見る。真は俺に守護霊について詳しく教えてくれるはずだ。

今は桜井を観察しているが。

「なんだ? いいたいことでもあるのか?」

俺はそう直球でいく。うまいこと言えるようなやつでは俺はない。

「あゝっ、あのね。明日、暇?」

「ええ、ああ、暇だけど……」

「遊びに行かない？」

思わず真を見た。自分でも不思議だったが、女の子に囲まれて（桜井は二人つきりだと思っっているようだ）言われるのは少しばかり恥ずかしいというやつだ。

それに桜井の守護霊だっているだろうし、

「もちろん、友達も一緒に」

桜井が思わず妥協した。

第七話 「國酔」

放課後――。

俺は少しにやけながら校門を後にした。

まさか女の子から遊びの誘いを受けるとは……

とりあえず一緒に行く友達。は秋元を誘い（飛びついてきたからうざかったが……）

桜井も友達を誘うとのことだった。

俺は通いなれた通学路をかえる途中、真に聞くことがあったの思いついた。

「そういえば、つながりってなんだ？」

「顔。」

「え？」

つながりと顔？

「にやついでる」

「ああすまん。いいだるべつに……」

「で、つながりだけど、つながりって言うのは守護霊とその主の関係を表すの。」

たとえばほら、今すれ違った男、あいつの守護霊は見えなかったでしょ？

でも私ははっきり見えるでしょ？そのこと。

で、つながりが強ければ主の霊力を守護霊に分けられるの。つまり信頼関係が強いほど守護霊も強くなるの。わかった!？」

「あゝなんとなく・・・」

真は説明する時は気分が良いらしい。

「いつか俺と話してる時か？」

「まあいいか。」

「今日も街に行くの?」

真が聞いてきた。

真と帰るのは初めてだが、真はずっといたから知ってて当然か。

「いくよ。今日は漫画の発売日だしな。」

「・・・まで、嫌な予感・・・」

「今日もラブコメ?」

「やっぱり。」

「いいか!あれは俺が自分から進んでみたわけではなく、秋元から面白いつて聞いたからしかたなく見てやっただけだ。つくかお前も聞いてたんだろ?どうせ」

「大丈夫だって、ちゃんとわかってるから」

少し笑いを含みながらいわれてもな・・・

そうしている間に街についた。

今日も本屋で漫画を読む。

真がいるからなんか落ち着かないな・・・

そうして本屋を出た。

交差点・・・結局トラックのオッサンは死んでしまっていた。

榎本？

交差点の脇に榎本がいた。

目が合った。キメエ

こっちみんな。

こっちみんな。

こえかけんな。

「ほほう、奇遇だな」

なんかうれしそうにいうな。

「さてさて・・・」

絶対なんかたくらんでるよ・・・

！

「あなたの守護霊、敵意を向けてるよ。」

真が大人になっていた。

ということは、榎本の守護霊が敵意を向けているというわけだ。

いったいどんな奴が榎本の守護霊なんだろうか。

「これはすまんなあ。國酔こくすい・・・やれ。」

その刹那、真が見えない何かを受け止める形になり、やがて霞が晴れるように榎本の守護霊、國酔が見えた。

國酔は全身黒づくめで、体は黒のコート。黒のジーンズに顔まで真っ黒で目と口だけが色があり、バラクラバをかぶっているような感じになっていた。

腕には（皮膚が真っ黒なので）白で刺青が入れられている。

手には長い刀が握られていて刀にも趣味の悪いゴタゴタがついている。

「ふん、．．斬撃は正面から突込んでも意味がないぞ」

真の手には炎が灯り戦闘開始。

「上だ。」

國酔が初めてしゃべり、上に跳んだ。

ビルの窓のふちを器用に飛んでいった。

守護霊は、人には見えないが、攻撃（たとえば真の炎）は人には影響がある。

悪夢に殺されかけた俺が言うんだから間違いない。

「その程度の高さ．．」

真がそういつて跳躍の構えになり．．飛んだ。

一っ飛びでビルの屋上まで飛んでしまった。

その着地の隙を狙って國酔が斬撃を食らわそうとする。

が、真は手の炎から包丁（特大）で受け流し、背後を取りビルから突き落とす。

しかし ビルのふちに手を掛け、また登ってくる。そして思いつきり突進。

それに突きを加えて真を狙う。

真はそれをひらりとかわし、反撃の準備をするが．．

「なに！」

國酔が、反射したかのようにもう次の突きをはじめていた。

反撃の構えをしていたため、かわすことができない。

包丁（特大）で受け止めようとするが．．

「甘い」

「ぐっ……！」

國酔の刀は真の腹部を貫いていた。

第七話 「國酔」 (後書き)

今回はとても間が空いてしまいました。

とうか他作品を書いてました(え

これからはこっちもマジでがんばります。

第八話 「烙印」

ビルの上で守護霊たちが戦闘しているころ・・・

地上。

「さてさて・・・守護霊の戦闘中は、人間は暇ですなあ」
榎本が含み笑いをしながらそういった。

「だいたいなんだよ！いきなり戦闘を始めて！守護霊同士だろ？意味ないだろ。」

いきなり現れ、守護霊をけしかけ、戦闘に持ち込む。
榎本の行動の意味がわからなかった。

「まあ、落ち着け。守護霊でも人間のように喧嘩はする。」

「答えになってねえよ。」

「そうだな・・・強いて言うのであれば制裁だな。守護霊の力を知り調子に乗っている小僧へのな。」
いちいちイラつく野郎だ。

「暇だな・・・ここで特別授業と行くか。お前には知らないことが多すぎるからな。」
「いったいどうしたいんだこの人は・・・」

「まず、守護霊がしてはいけないことが二つある。
一つ目は人間を殺すこと。

人を守るための存在なのに殺しては意味がないからな。」

「殺したら・・・何かあるのか？」
守護霊は目には見えなくとも、影響を及ぼすことがある。
そのため、今も戦闘はビルの上で行われていた。

「守護霊ではなくなる。」

そして二つ目だが、死神に魂を売ることだ。」

守護霊ではなくなるとどうなるのか。それは教えてもらえなかった。

「死神？魂を売るって？」

知らない単語。いや、死神は漫画とかでも良く出てくるが、実際に存在しているとなると、話は別だ。

「ああ、まあ実在するかどうかは知らんが、死神に魂を売ると、守護霊は人間になれるらしい。」

「えっ・・・」

「人間とは、生まれた瞬間から、死を持っている。いつくるかもしれない死を。だが守護霊は持っていない。時間がたつても、寿命で死は訪れない。他人から殺されることはあるが・・・それが守護霊と人間の大きな差だ。そこに死をつかさどる神、死神が守護霊に死を与える。」

そうすれば、人と霊の差はなくなり、人間になれる。という逸話がある。」

「・・・。」

「まあ、関係ないがな。」

そして榎本の話は終わった。
真はどうしているだろうか。
あの國酔とかいうやつに負けてはいないか。
見上げると、國酔の一撃が真の腹部を貫いていた。

「真！」

守護霊の戦闘に人間は参加するすべはない。
そう思い知らされていた。

・
・
・
・
・

真は不覚だった。

大切なことを忘れていた。

というのも彼女自身、守護霊との戦闘はじめてだったからである。
守護霊はそれぞれ独自の個性を持っている。

性別や技、容姿などもそうだが、戦闘に大きく影響があること。
烙印。

「ふん。その程度か」

國酔が空で素早く方向転換する。

空中では足場はないため、普通ならそんなことできない、しかし國酔ならできた。

烙印。方向転換の際に彼の足元に空中で烙印が押される。

それは空に直径二メートルぐらいの円形で、それを足場にして、空中での方向転換、などを行っていた。

そして彼はまた突進に突きを加えて真を狙う。

「同じ手が・・・」
國酔を真はひらりとかわす。

「二度も通用しない！」
方向転換してきた國酔をめがけて、手にと持った炎から包丁のなだれのように放つ。

が、包丁の雨が来る前に、また足元に烙印を押し、上に逃げる。また上に烙印を押し、今度は上から切り下ろしてくる。

(くそっ・・・これじゃあ意味がない・・・)

攻撃をかわすにも、威力を増すにも使える國酔の烙印は厄介だった。

(それなら・・・)

真はビルを飛び移り、コンクリートがあちこちひび割れている廃ビルに飛び移る。

「逃げるのか いや もう終わりにしようか」

真は腹部の傷を引きずっている。

守護霊は流血こそしないが、怪我は戦闘力や体力を大きく消耗する。明らかに不利だった。

そして國酔には、烙印によって、突きの速度を異常に上げ、一撃必殺にすることもできる。

「いくぞ」

國酔が、烙印を踏み台にして、空を翔ける。

真っ黒な体が速度を上げて廃ビルの真を目指す。

國酔の体が、廃ビルの上に来た刹那。

「展開！ 捕捉。」

真の短い二言で、廃ビルが変形する。

ビルの上二階ほどが砕け散り、原型をなくす、がしかしすぐにまた新しい形を形成する。
ビデオの巻き戻しのようにコンクリートの巨大な腕が完成しその腕が國酔をつかむ。

「むっ これは」

「そっだ。」

巨大な腕にはびっしりと烙印が施されていた。

「私の烙印は、絶対服従。生物でも物体でも烙印を押せば私の思うがままにできる。」
不意に真が笑う。

「この腕でどうするつもりだ」

巨大な腕に握られる形の國酔は身動きが取れない。

「暴発」

國酔をつかむ腕が音と立てて爆発した。

・
・
・

その様子を地上で見っていた二人。

「むっ・・・」

榎本が苦しそっになつた。

「どうした！お前の守護霊。」

今の状況、確実に真が勝っていた。

だからかもしれない。
油断していた。

ガラッ。

後ろで白のワゴン車が扉を開けていた。

「え？」

呆然とした俺を・・・

「ふん！」

榎本が押し込める。

ワゴン車に・・・

「なっ何しやがる・・・くっ、」

睡眠薬をしみこませたハンカチだろう、を押し付けられ、意識が朦朧とする。

つまり俺は榎本に誘拐されたのか！？

第九話 「誘拐？」

「京平・・・？」

真はビルの上にいる。

守護霊と主のつながりが遠のいているのを感じていた。

そのままビルから跳躍で京平のいると思われる方向に行こうとするが・・・

「待て」

國酔が正面に立ちはだかっていた。

「ちっ・・・まだ動けるのか。」

だがその彼はかなりのダメージを受けていた。

「ああ 危ないところだった 危く消えてしまうところだったぞ」
真の烙印による爆発は一瞬の間があった。

コンクリートの腕は、そのままでは爆発できないため、発火物質へと変化してから爆発する。

つまり変化の瞬間は、國酔は拘束がなくなるためその隙を突き脱出したというわけだ。

しかし爆風は受けるためダメージは受けてしまっていた。

「退いてくれ。主が遠のいてるんだ。」

これはお互いにいえることだ。

確率は低いけど、守護霊が離れている隙に悪夢が襲ってくる時もある。また、真は敵意を向けられないと戦えないため、前の時のように京平を助けるのが遅れる場合もある。どのみち主から離れるのはよくない。

「安心しろ 他にも人がいる」
つまり誰かの守護霊が守ってくれるということだ。

「・・・私はその車を追う。」

「通さん」

お互い傷ついた体で戦闘は避けたほうがいい。
相打ちになり、守る守護霊がいなくなつては、ただの喧嘩の被害が
大きすぎる。

そんなこんやで膠着してしまった。

・
・
・
・

(ん・・・?)

京平は目が覚めると、事務所のような一室にいた。
体は椅子に縛り付けられて、手には手錠がはめられていた。
部屋はコンクリートがむき出しになっていて家具のひとつもない。
窓があり、景色からすると一階ではないようだった。

「気がついたのか」

榎本が視界に入ってきた。

椅子に体が縛り付けられているので視界が限られている。

「意外だったぜ・・・あんたがこんな趣味の持ち主だったんだな。」

「何の話だ。」

「街で学生をさらってきて拘束し、遊ぶんだろ?とつとつこつちに
手を出しちまったか。」

「……言っておくが、ここにお前を連れてくるように仕向けたのは私ではない。あと私にそんな趣味はない。」
真顔で言ってきた。

「……って誰がこんなことしたんだ？」
俺はこんなことされるような覚えはない。

「黙れ。」

当然の反応だった。ここでベラベラ喋って、後からやばくなるのはもう定番だ。

俺だって自分から榎本に話しかけたくない。

・
・
・

しかし暇だった！

「真は？」

それから榎本の守護霊も見えなかった。

「まだビルの上であろう。それぐらいつながりがあればわかると思うが？」

いちいち癪に障る奴だ。

「俺をここに連れてきてどうするんだ。」

「黙れ。」

やっぱり答えてくれなかった。

「いいじゃない、それぐらい教えても」

急に後ろから声がかかった。
はて、どっかで聞いた声だったが・

「しかし・・・もしものことがあると・・・」
榎本が焦っていた。
なんか愉快だ。

「こんにちは、坊や」
そこにいきなり三十過ぎの学校で見慣れた顔があった。
教頭、藤崎であった。

「そうか・・・確かに先生の中では若くともね・・・こういつ趣味はよ
くないですよ。」
さすがに三十過ぎのおばさんはねえ・・・

「言うておくけどそんな生易しいもんじゃないわよ。」
OH！爆弾発言。俺はいつたいどうなってしまうのか・・・

「あなたから霊力を吸い取るのよ。」

「は？・・・ああ、そうか・・・くそ!」

「なんか棒読みだな」
榎本が突っ込んだが関係ない。
霊力を吸い取るだって？
「そんなことができるのか？」

「そうよ、まああなたはそのため機材待ちの被害者第一号ね。」
機材は届けられるのか。
それにしてもこの教頭の豹変振りには驚いた。いつもは気弱そうな

笑みを浮かべているだけであつた。
その背後に守護霊が見えた。

「こんにちは、金城君。」

なんとやさしそうな天使のような格好の優しそうな男であつた。

「もうすぐだな」

榎本が声を上げた。

「後五分だ」

第九話 「誘拐？」（後書き）

これでやっとプロローグ含め第十部です。

二桁になったということまでこれまでよりもすっかりやって行きたいですねえ。

ですが次は遅れるかもしれません（え

ですが必死にがんばりたいです。

最後にこんな作品に目を通していただきありがとうございます！

第十話 「闖入者」

ビルの上。

戦闘が硬直してしまつた真と國酔であつたが、

「……しかたない、いくぞ！」

真の手に炎が灯り、戦闘が開始される。

手の炎から雨のように火の粉を飛ばす。それは空中で何本もの包丁に変わり、國酔を襲う。

國酔はそれを避けるため真横にとんだ。その隙を真が前方に跳躍して主のもとへいこうとするが……
バシッ

先ほどまで國酔がいた場所に烙印が縦に空中に発生して真がぶつかった。

「止めなど刺したくないが 貴様がそう望むなら 仕方ない」

國酔得意の突きで真を狙う。

だが真は、國酔に向き合い、両手を前に突き出す形をとる。

(まさか まずい)

國酔の予想は的中した。

真の両手から炎が噴射した。

炎は両者の間で膨れ爆発した。当然真にはあまり効かないが國酔は本日二回目の爆発に巻き込まれ、ダメージも確実に蓄積していた。だが、真も腹部に傷があり、その状態で靈力を使いすぎたため、疲労がたまっていた。

「悪いな……先を行かせてもらつぞ。」

「甘いな 見落としているぞ」
そんな大口をたたける状況でもない國酔であったが、彼には秘策があるようだった。

「あわよくば消してしまいたかったのだが まあいい その怪我では素早く跳躍も難しいだろう」

最後の一言で彼が何をしようとしているのか理解した。つまり逃げるのである。

しかし國酔は烙印を使えば素早く移動できる。真は敵意を向けられないと無力である。

「くそっ・・・待て！」
國酔は逃げ出していた。

・
・
・
・

「もう五分経つたんですけど・・・」
壁にかかっている時計を見ながら俺はそういった。

「・・・そうね。輸送に時間がかかっているかもしれないわね。」
かなり苦しいいいわけだ。
すると榎本が、

「?どうした、國酔。」
窓からだろうか。俺の見えない位置から榎本の守護霊。國酔が現れた。

「あいつ 強行突破を試みた」

あいつ。というのは真であろう。
とすれば、彼は逃げ出してきたというわけか。

「君も怪我をしているね。どれ、癒してあげよう。」
藤崎の守護霊。天使男（名前を知らない）が國酔に言った。

「セーレ すまないな」
セーレ。それが彼の名前か。
その彼の手のひらから、光がさし、それが國酔の傷に当たり、傷を癒していく。

「では、私が彼女の見張りをしてきましょうか。」
セーレはそういって俺の視界から消えた。

「それにしても遅い。」
いったい何をしているんだろう。藤崎の文句に俺も同意していた。
でも俺は一生来なくていいと思っていた。

「?・・・これは・・・ふむ、まあ当然。なのか・・・?」
榎本がそわそわしていた。
実際榎本が靈力を吸い取るわけではないので、彼は使われるだけ使われて、それで終わりであろう。愉快だ。そんな榎本など気にせず
に藤崎が紅茶を飲んでいた。

ピンポン

来てしまったのか。

「あつ、ハイ」

藤崎はいつもであろう、女性ならみんなそうだ。

声を高くして、配達の人を迎えに行った。
ちなみにドアは俺の視界にない。

「ちわーっす。郵便でーす。」
おそらく女の声でそういった。

「これが配達のものね。」

「ああはい、軽いですね。」
会話しか聞こえない。

「・・・ああはい、そうですね。だって・・・」

「？」

「あんなものありませんから」

「・・・それどういう意味かな？」

「嘘。」

「なにが？」

「だから、人から霊力を吸い取る注射器なんてないって言ってんの。
物分りの悪いおばさんだな。」

「な・・・なにいつてんのかな？お嬢ちゃん？」

「気を付ける！守護霊がいるぞ！」

榎本が叫んだ瞬間、藤崎が激しい破裂音とともに吹っ飛んできた。

「・・・守護霊に人間を攻撃させるとは・・・國酔！いけるか？」
榎本が本気であせっている。藤崎はノックアウトされている。

「もちろん」

國酔が俺の視界から消え、金属のすれる音、破裂音、男の悲鳴。
國酔が俺の視界に戻ってきた。藤崎のようにノックアウトされていた。

カチャン。

俺の手錠が斬られた。

ジャララン。

椅子からも開放された。

ここでやっと闖入者の顔を見ることができた。

俺と同じくらいの女。茶髪の髪を長く後ろに流して、今は業者の服を着ているが、おそらく普段は派手な服を着ているのだろう。そんな感じがした。

「リリース、この男も倒しちゃおう？」

榎本死亡フラグか？

そしてこの業者女の守護霊。リリースが見えた。女性であるが、真とは雰囲気の違い、長髪で黒を基本とした格好で、夜の女性。がピツタリだった。

そのリリースの手のひらをさしだし、その手に烙印が押される。
するとそれが激しい破裂音とともに、衝撃が榎本を襲う。

Bannon

その衝撃を片手で打ち消してリリースと榎本の間立っていたのは、セーレだった。

片手に子供の真を抱えて。

「主を傷つけたのは、あなたですか？」
怒りを含んでそういった。

第十話 「闇入者」 (後書き)

意外と早く書けました。

これでやっとこさ十話です。

サー大変だ(何

第十一話 「天使の怒り」

「いったい何が目的なのですか？」

セーレは子供の真を降ろして、業者の格好の女とその守護霊に言った。

「そうよ、藍那あいな、この哀れな被害者にもわかるように説明してやりなさい。もともとあんたが悪いんだから。」

女の守護霊、リリースが言った。哀れって・・・

「わかったわかった、」

業者女改め藍那がだるそうに返事をした。

ところで、

「どうして真はセーレにつれて来てもらったんだ？」

今は俺の後ろに隠れている。セーレの敵意は藍那たちに向いているため、真は戦闘に参加できない。

「頼んだらつれてきてくれた。」

単純なものだ。まあ子供状態では脅威ではないか。

「いい？説明するけど・・・」

藍那が説明を始めようとする。

さっさと始めてくれ、というかセーレはちゃんと聞いてるんだろ
うな。いまにも襲い掛かりそうだが・・・

「私はね、インターネットで守護霊に関する情報を集めてるの。関係者専用サイトでね。」

まあ、ネット上なら知らない人を見るとゲームなんかの話だと思う

だろうな。知ってる人には伝わるってことか。

「そこでブログを作ってるんだけど、アクセス数が少なかったのね。」
「うん。よくあることだ。」

「で、なんかみんなが食いつくように話があるかな？って考えたら・・・」

「人から霊力を吸い取れる機械があるってか？」
「なんということ・・・ただの釣りじゃないか。」

「そういうこと。でもリリースがさ、こういうことがあるかもしれないから、注文を受けた分は謝罪しに行けって。」
「ガセ情報に加えて通販までやってたのか。なんていう奴だよ。まったく・・・」

「ね、言ったとおりでしょ？悪用されるって」
「リリースが説教するかのようだった。」
「だいたい理解した。つまり藍那とかいうこの女が流したガセ情報に藤崎が引っかかり、その巻き添えとして俺が誘拐され拘束されたわけだ。」

「ちなみに説明中のセーレは國酔にしたように藤崎を回復させていた。」
「事情はどうであれ、守護霊で主を傷つけるとは論外だ。」
「セーレの怒りは収まらない。」

「いい？アタシが時間を稼ぐからその間に逃げなさい。」
「リリースがそう言うと、セーレに向き合い、どこからか鞭を取り出した。彼女に鞭はびったりであった。」

「時間を稼ぐ・・・？そうですか。」
セーレは口調は落ち着いているものの、内心から滲み出す怒りが逆に恐ろしさを助長していた。

「私は守護霊相手に容赦はしませんよ？」
セーレはそういうと、彼の腕から閃光が走った。一直線の光となり、リリースを狙うが、彼女は身を翻しそれを避ける、そのまま距離を縮め、鞭による打撃を放つ。
そしてセーレは

「ほら、解説なんかしてないで早く逃げるよ！」
腕を引かれ部屋の出口へと向かう。

そして俺はドアノブに手を掛けひねる。
ドアを開けて外へ出ようとするが・・・

「なに!？」

思わずノーマルなりアクションをしてしまうほど驚いた。
ドアの先は真っ黒。

真っ暗ではなく真っ黒。
黒い壁のようなもので出口がふさがれている。

「・・・空間操作ね。」
真がそう小声で言った。

「空間操作？あの天使男の力は治療じゃないの？」
藍那が真に聞く。というか見えてたのか。

「そう、セーレは治療能力もあるけどそれはただの特性、この空間操作は烙印による物よ。」

烙印……？

「京平の説明は後！それより今はどうすればここから出られるのか・
」
後って……

「ここからは出られないよ。オチビさん。」
セーレが静かに言った。

「リリース！」
見るとリリースが腹を押さえてうずくまっている。

「だ、大丈夫……」
苦しそうにそういうと、藍那の後ろに戻ってきた。

「……ふうん。次は私ってわけね。」
真が大人になっている。
とうとう敵意を向けたか。

「ははっ貴様ごときで何ができる？國酔と相打ちだっただろっに。」
確かに真は國酔に勝てなかったし、その國酔はリリースに軽くやられ、
リリースは今セーレに負けたところだった。
勝機はあるのか？

「京平、つながりが強くなればなるほど守護霊は強くなれる。私を
信じる。」
そう、俺は真を信じるしかない。

「では、いくぞ？」
その刹那、セーレの雰囲気は劇的に変わった。

今までは静かに怒っている様子であったが、今は全身から冷機が滲み出し、床を烙印が張り巡らされている。窓は真っ黒。部屋も薄暗くなり、セーレは青白くひかっている。

セーレの前髪が逆立ち、温かみがあった瞳は真っ青になった。

一言で言うなら、悪魔。

天使の男が悪の魔人に変貌を遂げていた。主のために。

次の瞬間、セーレの周りの空気が凝結し、氷柱が鋭くとがった。そのまま幾本もの氷柱が真をめぐり降り注ぐ。真は軽く氷柱に飛び乗りやりすくす。

空気中の水分を凍らせ敵を攻撃する。まさに空間操作のなせる業だった。

真は、手に灯した炎で氷柱を打ち消しつつ、間合いを狭める。

そのまま体術でセーレに攻撃するが、彼も真の攻撃をすべて受け止め、また反撃を入れる。

真のガードをくずし、懐に打撃が入る。國酔との戦闘で受けた傷は消えていたが（おそらく戦闘が始まる前、つまりここにくる前にセーレに治してもらったのだと思う）

体力、霊力は消耗しているので一撃でもかなりきつそうだ。

「くそっ、このままじゃ・・・」

負ける。

だめだ。

信じる。

勝てる。

絶対に。

信じる。

真が勝つことを・・・

「リリース・・・？」
隅でうずくまっていたリリースと藍那だが、急にリリースが立ち上がった。

「アタシはまだ戦えるよ、それよりあいつらがいないんだが・・・
あいつら。という・・・」

「榎本・・・」

逃げたか。まあこのままいてもあいつにプラスはないか。

「リリース、大丈夫なの？」

藍那が心配そうに聞く。

「アタシをなめるんじゃないよ！」
そういうと、鞭を構え、氷柱の雨をかくぐり、真と体術戦をしているセーレの目の前に行く。

リリースが構えた鞭に烙印が張り巡らされ、その鞭を思いっきり振る。セーレは腕に氷柱を発生させ、盾のようにする。が、鞭が当たった瞬間烙印がはじけ、鞭が爆発、セーレの氷の盾がはじけとび、思わすひるむ。

「今だ、真！」

俺が叫ぶまもなく、真が手に灯した炎から包丁を構え、ひるんだ一瞬を突く。

「くっ！」

銀が一閃。

セーレを切り裂いていた。

「私たちの勝ちのようね。」

真が勝ち誇って言う。

セーレは言葉もなく崩れ落ちた。

腹部から血液のように霊力が流れている。

ピクリとも動かない。

勝った・・・のか。

良かった。

安堵。

それもつかの間であった・・・

「動くな！動いたらこいつの血の海ができるわよ？」

叫んだのは藤崎。

その藤崎は藍那を羽交い絞めにして首元に包丁を構えている。

「リリース・・・た、助けて・・・」

藍那がそうささやいた。

第十一話 「天使の怒り」 (後書き)

意外と長い学校編。

というかもう学校関係ないですね (汗)

第十二話 「あなたのために」

「動かないで！」

藤崎が叫んだ。おそらくは気が動転しているのだろう。自分が信じていた守護霊が負けたのだ。しかたないが・・・今は藍那を助けることを最優先だ。

「（リリスさん、いいですか？）」「
俺は小声で呼び掛けた。

「（なんだ？ 打開策でもあるって言うの？）」「
リリスと直接話したのは初めてかもしれない。まあどうでもいい。
そんなことより・・・

「（はい、打開できるかわかりませんが一応、）」「
自分でも自身がない。その場で簡単に思いつくような作戦だからだ。

「（早くして、じゃないとあの女、藍那の首をへし折るつもりなの？）」「
たしかに、藤崎の首を絞める手に必要以上に力がかかってる。
藍那が危ない。

「（よく聞いてくださいね、まずリリスさんと真は囷になってもらいます。）」「
つまり、この作戦で俺がやるべきことは・・・

「（囷？ 動いたら殺すって言うてるのよ？）」「
リリスも藍那を傷つけないのは当たり前だ。もちろん俺だって

そつだ。

「（大丈夫です。藤崎だつて一般人です、首を切るのにためらいがあります。そして彼女は守護霊を警戒しています。先ほどリリースさんに突き飛ばされてましたしね。真も今は大丈夫みたいですが、セーレが倒れてる今となつては、いつ子供の姿になるかわかりません」ということで俺が向かえばきつと驚くでしょう。普通の人間ですしね。」

すべて可能性でしかないが、それでもやるしかない、一刻も早く。

「（真、聞いてたか？）」

この作戦では、真も囷をやることになる。

「（大丈夫、それより京平が・・・）」

藤崎自体に脅威がないが万が一、あいつが持つてる包丁（真が戦闘中に出したものと思われる）で俺を攻撃しないと限らない。俺も危険だつた。

それでも、やるしかないだろ。

「いくぞ！」

俺の掛け声とともに、リリースが鞭を出し、真が手に炎を灯す、しかし二人はバラバラの方向にとび、藤崎は驚き、呆然とする、その正面から俺が飛び込む。

あと数センチ・・・その瞬間藤崎と目が合う。

憎悪、似た雰囲気だつた。俺がいったい何をした。

いける！、もう手が触れそつだ・・・

刹那。

氷柱が俺の前に立ちふさがつた。

バシイン

藤崎が持っていた包丁が吹き飛んでいた。
氷柱によって。

「……なに！セーレ！邪魔しないで！」

セーレが半身を起こして何とか立ち上がろうとしている。

つらそうだが、表情は天使に戻っており、目からやさしさがこぼれている。

「……あなたには人でいて欲しい。どうか人が人を殺すようなことはしないでください。」

「どうして？また私はこうやって負けて、地に落とされ、底から這い上がるうとする。でもまた落とされるのよ？もういや！」

「それでも、私には、あなたが幸せになれるよう、勤めます。あなたの、人としての幸せのために。」

「どうして……」

「約束したではありませんか。遠い昔のあの日に。」

藤崎は黙って、思い出すような遠い目をして、膝から崩れ落ちた。
俺たちの回りにあった氷柱も崩れ落ちた。

それから……

「……だめよ、せつかく力が使えるんだもの、壊したい。」

途端、部屋全体が凍りつき、氷柱があちこちから飛び出した。

「すべてを、壊したいのおおおお！」

「主！この空間を・・・すべて凍らせるつもりですか！？」
セーレも操作できないほど、この空間が凝結していく。
すべてが凍る。

「そんなこと・・・させねえよ！」
もはや勢いだけで突っ込む。真とリリースは氷柱に阻まれている。俺は偶然藤崎までの道が開けていた。

今度こそ、藤崎を止めるために。

藤崎の顔面に俺の拳が入る。
人生で一番本気で殴っただろう。
女を殴ったのも初めてだ。
殴った衝撃で、藍那を離す。
俺が抱きとめる形なり、藤崎は倒れた。
氷結は止まった。

「主！」

セーレが空間操作の烙印を解き、藤崎に駆け寄る。
氷はなくなり、部屋が元に戻る。
終わった。
今度こそ。

「終わったのね？」
俺はまだ藍那を抱いていた。

「た、立てるか？」
これは・・・いったい俺にどうしろと？
もう少し・・・このままで。なんていわれたら俺はほんと困るが・・・

「うん。あの程度でやられないよ、私は。後、カツコ良かったよ。最後のパンチ」

ああ、とか、うう、とか言ったような気がするが、まあいい。

「京平！」

ずっと後ろにいた真。なぜか気まずい。俺は悪くないぞ。

「帰ろうか。」

俺はごまかそうとする。別にごまかすほどのことでもないって、うるせえ

セーレは、藤崎を治療していた。今はそっとしておいてやるぞ。

「藍那、今日は後三件あるわよ?」

リリースが安心顔で言っていた。

「え、まだ働くの?」

藍那が悪い。もともとはな。

「京平、早く帰ろうよ」

すっかり子供になった真、ああ、俺もつかれたよ。

「ところでどこなんだ?」

部屋から出てオフィスビルみたいなところから出た俺が言った。

結局、家に帰るまでもう1時間歩くはめになった。

第十二話 「あなたのために」 (後書き)

一応、学校編完結です。

次回は、少し番外編に入ります。(予定)

もしよろしければこれからも読んでくださいね。

第十三話 断章「過去」

「主、お目覚めください。」

「ん……、セーレ？」

……なんだろう。懐かしい気がする。

夢？いや、違う。

記憶。

・
・
・
「ん……、おはよう。セーレ」

広い和室。敷布団の中で目をこすっている私を覗き込んでいるのは、私の守護霊、セーレ。毎朝私を起こしてくれる。強くて優しい天使のような人。

「……今日は大事な日ですね。」

セーレは複雑な顔で言った。

そう、今日は大事な日。

私の十歳の誕生日。

そして

儀式がある日。

私、藤咲恭子は今日で十歳になった。

藤咲家というのは、なんでも昔から続く家系で、霊力に関わる歴史がある。

そのうちのひとつ、強力な守護霊を先祖代々引き継いでいる。セーレもその一人。でも私には生まれた時からセーレはいたし、それが当たり前であった。

そしてもうひとつ、藤咲家の人間は個人の霊力が強く、また兄弟の中で一番霊力が強い人間が本家の名を継ぐ。それを決める儀式。

その儀式が今日ある。

今まで本家を継いでいたのは母。

しかしその母も一週間前に死んでしまった。

特に問題はない。病死であった。

儀式は私の兄弟、姉と弟がいる。

弟は霊力が弱い（それでも一般人よりはるかに強い）ので外の社会に働き口が決まっている。

藤咲家では英才教育が施されているため、職場には困らない。

姉は霊力が強い。基本女子は霊力が強いのだ。

そして現在分家である叔母の娘、そこに私も含め三人で行われる。

問題は私に霊力のかけらもないことだった。

セーレが付いているから、悪夢に襲われることはないし、つながりもあるから問題はないが、本家が継げず、母がいないと身寄りが姉しかいなくなる。（おそらく、姉が本家を継ぐであろう）

姉と血のつながりがあるため、この屋敷にいても良いだろうが、どちらにしても霊力がない私にとって霊関係の由緒正しい屋敷は居辛かった。

「ねえセーレ、いい方法はないかな？」

「霊力は生まれた時に決まるものではなく、成長の過程で目覚めることもある。」

「いけませんよ、無理やり目覚めさせたり、儀式でズルをしたりし

ては。」

セーレは優しく諭しているようだった。確かにテストの時はズルをしたこともあった。

「それに分家でもあなたはあなた。何も変わりません。悲観することはないのです」

「・・・別にまだ決まったわけじゃないじゃない」
セーレのほうがズルい、実際私に儀式で選ばれることはないであろう。

しかし姉が正式に本家を継いだとしても、私は変わらないだろう。すべてお見通しみたいた。

私は悩みながら歩いてきた。
無駄に広い庭。庭園というらしい。

この屋敷の中でずっと暮らしてきたため、外については良く知らない。でも先生には社会について教えてもらってるし、その中で生きていける自身がある。でも・・・

「はあ。」

庭園の中心に花壇がある。

花壇には色とりどりの花があり、これは・・・福寿草という黄色い花だ。毒草なので注意して。といわれた。

することもないので眺めながら物思いにふけていると、人が来る気配がした。

「あら、こんなところで何しているの？」

来たのは叔母さんだった。分家のこの人はきつと霊力もないくせに本家である私にいい印象はないだろう。でもこの人は私によくしてくれる。娘さんもいい子なので、儀式で選ばれても不服ではない。

「うん・・・儀式は午後からだよね？」

とりあえず話題を出して話を終わらして一人になりたかった。

「そうそう、儀式の事で恭子ちゃんに話があるの。」

良くしてくれた叔母さんだ。きっと気を使ってくれてるに違いない。

セーレが私の肩に手を置いた。

「なあに？」

「恭子ちゃん、靈力に自信ないでしょ？」

いきなりグサツとくる。

「心配しないで、機会がないから目覚めてないだけかもしれない。」

「まて、それは・・・」

セーレが口を挟む。

「君には関係ないだろう？入らないでくれ。」

反論したのは叔母の守護霊シトリー。

セーレはシトリーに反論しない。いつもそうだった。

「で、何なの、話って」

私は早く聞きたかった。もしかしたら靈力に目覚めるかもしれない。本家にならなくとも屋敷で暮らしていける。

「疑似悪夢にあつの」

知らない言葉だ。

「ぎじあくむ？」

「そうよ、シトリーの力を使えばね。本物に会わなくとも見ることが出来るのよ。」
「叔母が言うと少しは安心できる。それに本物に会うわけではないのだ。」

「うん。会うだけでいいのね？」

セーレが何か言いたげだが、彼は少し過保護になるところがある。それに、叔母が何かするとしたら私ではなく姉だろう。屋敷には他にも人がいっぱいいるし、本物に会うわけでもないから安全だろう。

「やらせて」

承諾した。

「じゃ、屋敷の封霊室に来てね。」

封霊室。屋敷の真ん中であって、小さい物置のような所だ。

「主・・・良いのですか？」

セーレが心配そうに聞く。

「いいのよ。」

その一言で、私は屋敷の中に駆け出し封霊室に行く。部屋の前に叔母が立ってる。

「セーレは入らないで！」

シトリーが叫ぶと、私は部屋の中に入れられ、扉が硬く閉ざされた。

「どうして？、セーレもいないと・・・」

不安。初めてセーレと離れ離れになった。

「悪夢を見るだけ、セーレがいると安心してあなたの力が眠ったままよ?」

そういつつ、部屋の中心にろうそくを立て、火をつけた。

「では……ゆきますよ?」

シトリーが私の目を見ながら言った。

えぐられるような視線の奥に、暗い霧のようなものがたちこめていた。

「上を見てください。」

そういわれ、見上げると霧にかかった何かがつごめいている。

よく見ようと目を凝らすと、それは急に形を作り私が怖い物二つ

蛇と蜘蛛だが　　が合わさった巨大な化け物になった。蛇の胴体から、蜘蛛の足が生えている。屋敷によく出て怖がっていた二つの生き物。

「いやあああああああ」

その化け物が私に向かって直進してくる。

シトリーは目を閉じて祈りを捧げているようだった。

「さあ!しっかり見なさい!目覚めの時よ!」

叔母が叫ぶ。といってもこんな化け物直視できない。

おまけにちかよってくるので落ち着けない。

「……助けて……」

耳を突き刺すような叫び声を上げる化け物。

噛み付くすので、右に飛び交わす。もし飛んでいなかったら……

本当に無事なのだろうか。

怪物の足が私を捉えた。
毛がびつしり生えた黒い柱のような足。
蛇の頭にある裂け目のような口。
滴り落ちる蛇のよだれ。
赤に染まった瞳。
近づくと毒牙。
襲い来る。

「セーレ！！助けてえええええ！！」
私は叫んだ。
彼なら助けてくれるだろう。
きつと。

「シトリー！」
叔母がそういうと、怪物がとまった。
とまっただけで、私を捉える足は退かないし、蛇の口から吹きかかる熱い吐息は留まらない。

バサツ、バシツ、バアン

立て続けにドアに三本の氷柱が突き刺さる。
と同時に部屋が今まではろうそくの明かりで照らされていたが、薄暗くなり、足元に烙印が張り巡らされた。
ドアを突き破って入ってきたのはセーレ。
しかし彼の姿は私が知るものとは異なっていた、悪魔。
それがびつたりであった。

ズブウ、ブシャ、
化け物にも二本の氷柱が突き刺さる。
化け物は紫の煙になって消えてしまった。

「セーレ、どうして邪魔をするのだ。」
シトリーが静かに言った。

「退け」

もう一言、付け足した。

「黙れ、今の私に指図をするな」
セーレが言った、そして氷柱を刀のように発生させるとそのままシトリーに切りかかる。

「・・・ふん、私は知っているぞ？セーレ、貴様の恐怖の対象が・・・
そういえば聞いたことがある。

シトリーの力、心想事成。

これは対象の心の中にある感情を引き出し、再現する。
私は蜘蛛と蛇、ではセーレの恐怖の対象とは？

シトリーの姿が変わり、女性の姿に成る。
どこかで見たとような、どこか懐かしい女の人であった。

「私を切れるのか？セーレ私はお前のことを・・・」

ズバァ、

何のためらいもなくセーレは切り裂いた。

「・・・くっ、なぜ、貴様の最愛の人間であったらう・・・？」
シトリーの姿が元に戻る。どうやら力がもうないようだ。
ダメージが大きいのだろう。

「私の最愛の人間は今の主だ。それ以外の何者でもない」
セーレは感情のない真つ青な目に光る一筋のカケラを浮かべ、

「泣いて許しを請え」

「それができないのなら」

「ここで今」

「死んで見せてくれ」

セーレが最後の一撃を構え・・・

「待ちな！」

ドタドタドタ、セーレが破ってきたドアのあたりに、屋敷の人間が
たくさんいる。

姉もいた。

「なにをやっているの？」

姉が泣きそうな目で言った。

「この叔母が私たちを・・・」

私が真実を言う。

叔母が私をはめようとした。

この時はわからなかったが、私の霊力はその片鱗を見せていた。
叔母はそれが恐ろしく、また彼女の娘は姉にも勝るほどであったら
しい。

十年間ため続けた霊力が発揮される恐れがあると判断した叔母は、
私を怖がらせ、霊に関わりたくないようにしようとした。

「しかし！現場を見るとそうでもないようですが？」
声を張り上げたのは叔父、そしてセーレが止めを刺す寸前でみんなが入ってきた。

「セーレ！説明しろ！」

セーレはシトリーを切り裂いたし、もともと私の守護霊だから信頼が薄い。

そんなことを理解していた彼は、シトリーを治療し、私だけにこういった。

「行きましょう。主、そして、ごめんなさい」

彼はいつもの優しい彼に戻っていた。

「うん。……」

そうして堂々と野次馬の脇を抜け、中庭に出た。
花壇の真ん中に座る。

手元には、福寿草。

「ねえ、セーレ。この福寿草には毒があるんだよ。」

「そうですね」

「この毒で……みんな殺せるかな？」

「ダメです。」

「どうして？」

「その花は……あなたのお母さんが好きな花だったでしょう？毒があるって教えてくれたのも彼女ではありませんか。」

「うん・・・でも・・・」

「それに私はあなたに人間でいて欲しい。どうか人が人を殺すようなことはしないでください。」

「・・・。」

「私は、あなたが幸せになれるよう、勤めます。あなたの、人としての幸せのために。」

「セーレ・・・」

「行きましょう。おそらくは外の世界で職場を用意されてるはずですよ。」

「セーレ」

「？」

最後の一言が・・・

・・・
・・・
・・・
・・・
「ありがとう」

重なった。

セーレが微笑む顔。

私を優しく包み込むただ一人だけの存在。

いきましよう。

そうして私はまた、地の底から這い上がるのね。

第十三話 断章「過去」(後書き)

福寿草の花言葉 「永久の幸福、思い出、幸福を招く、祝福」です。

番外編、藤崎恭子、セーレ編です。

もつとつめて書きたいような内容ですが、それでは濃すぎるかと思いい、このように仕上がりになってしまいました。内容を少しはぐらかした部分があります。うまくはぐらかせたかなあ・・・

次回は前に立てたフラグを回収できます。

「もちろん友達も一緒に」ね。

第十四話 第三章「デート？」

ブブブブブブ、ブブブブブブ、……

誰だ？

こんな時間に携帯に掛けてくる奴は……？

「真、出てくれ」

おそらく俺の部屋にいるだろう。しかし返事はない。

んだよ、まったく、しかも電話かよ。そろそろ切れてもいいころなんだが、よほど大事なようなのかさっきからずっとマナーモードのバイブ音が鳴っている。

しかたない。

「はいもしもし……」

電話に出た。というか誰からかかってきたのかわかった時点で出たくなかったが……

「よお〜きよ〜へ〜元気かあ〜？俺はげんk・・・ピッ。」
切る。

秋元だ。しかも絶対どうでもいい話なのだ。とりあえず電源を切つて電話を放り出し、身を起こす。部屋には朝日が差し込み、真の姿はなかった。とりあえず寝る時は部屋にいたが（といっても同じベットで寝てるわけじゃないぞ）朝はたいいていいないのだ。まあ俺が起きるのが遅いためか。

「あ〜あ、今日は約束があったか……」

昨日はいろいろありすぎたため、忘れていたが今日は桜井含め数名と遊ぶらしい。

何をすることも知らないが、とりあえず待ち合わせは駅前の喫茶店に12時なので、まだ時間はある。

俺の部屋は二階なので、下の部屋に下りて朝食をとることにする。

「あ、母さん、今日出かけるわ。」

リビングにテレビを見ている母がいた。

金城智子(母)は年の割りに若く見え、俺の母らしく適当なところがあるが、一応信頼できる人だ。

「あ、そう。ふうん、最近友達でもできたの？」

いつもはフラフラと出かけるだけなので珍しいといえば珍しい。

「どうだか・・・」

ちなみに父はいない。

離婚したわけでもない。が、いろいろあっていないのだ。

真はいた。ソファに座って、テレビを見ていた。

昨日は大変だったが、何事もなく終わったのでよかった。それに俺は結局何も悪いことをしていないのに被害にあったわけか。

「(真、少し出かけるぞ)」

俺は昨日新しいスキルを身につけた。

こそこそ話す。内緒話だ。

まあどうでもいいが。

俺は朝食を口に放り込んで片付け、着替えて外室の準備をした。

待ち合わせまでは時間があるが、家にいてもすることがないので外に出ることにする。

家を飛び出すと、すぐそこに秋元がいた。暇な奴。

「よお京平、奇遇じゃん。」

明らかに奇遇じゃない、待ってただろ。つーかこいつ俺が出てこなかったらどうするつもりだったんだよ。

「なんか用か？」

秋元はニヤアッと笑って絡んでくる。

俺は家の前でなにやってんだか。

「おいおい、京平、そんな態度じゃもてないぞ」
うるせえ、とりあえず肩に手を回すな。

「で、どうすんだよ、まだ2時間は余裕あるぞ。」

秋元は俺を放し向き合う。

意外とつぶらな目の奴だ。

「・・・とりあえず、歩こうぜ」

そうして秋元と一時間歩き続けたのは言うまでもない。

2時間後・・・

「い・・・いよう・・・」

桜井を含め三人の女子が待ち合わせの喫茶店に来た。

当然俺と秋元は、一時間この喫茶店でコーヒーいっぱい飲んで粘って、もうすでにだるくなっていたところだ。

「だ、大丈夫かー！」

桜井の友人だろう、体育会系のショートヘアの子と、こちらは文科系のロングの女子。わかりやすいね。とりあえず女子三人も席についてオーダーをし、早速本題に入る。

「で、どうすんだよ、これから」

秋元が早く行きたい！的なニュアンスを含め言った。

「まず自己紹介しようよ。」

・・・そういえばお互いよく知らないのに遊びに行くなんて不思議な関係だよな。

体育会系のほうは、大竹さやか。

文科系のほうは、谷木実理^{やきみのり}

そこに桜井優希と俺と秋元。秋元のフルネーム？どうでもいいだろ。

とまあ自己紹介を終えた俺たちはようやく本題に入る。

「ねえ知ってる？この辺にショッピングモールって言うの？その新しい奴ができたんだって。」

そこに行こう。という話だ。ショッピングなんて普段しないからなあ・・・

などとぼんやり考え、司会進行は大竹、男子会話担当は秋元で俺は暇してた。

店の雰囲気は薄暗いため、外が明るく見える。忙しそうにかけまくサラリーマン。友達と楽しそうに会話する女子高生。部活帰りの男子学生。ゴミの山のような悪夢。どれも何気ない生活のいち・・・
っつておい。

悪夢がうるうるしてるじゃねえか！

やはり空気になっていた真の方を見る。

目が合った、

「大丈夫、こっちには気にしてないし・・・まあ悪夢はよくあること。」

確かに、みんな守護霊がついてるわけだから危険というわけではな

いが・・・
やっぱり気になる。

ゴミの山のような悪夢、棍棒を重たそうに引きずっている。ちょうど俺たちがいる喫茶店の前で止まる。ちょうど男が喫茶店に入ってくる。それと一緒に悪夢も店の中に入ってくる。やめろ、コーヒーがまずくなる・・・

！、悪夢が桜井に向かって棍棒を振りかぶる。
当然桜井は気づくはずがない。

「あぶねえ！」
思わず叫んだ。・・・俺はバカか・・・

「え？」
もちろんみんななんだかよくわからない顔をする。
悪夢のほうは、というと棍棒が途中で受け止められ、・・・それと同時に俺には桜井の守護霊が霧が晴れるように見えた。守護霊は棍棒をはじき返し、手に持っていた細身の剣で思いっきり切り上げる。一撃だった。一発で守護霊は悪夢を消してしまった。

仕方なさげに真が桜井のコーヒーカップを落とす。

「ああ、カップが落ちちゃった・・・ごめんね、金城君」
真には状況的に助けられ、桜井を助けた（というか守った）守護霊はこちらに向き合いハンサムスマイルをくれる。彼を一言で表すのであれば、白馬にまたがった騎士（馬はいないが）。ナイトらしく薄手の鎧とマントをつけ、きらきら後光がひかっているイメージがある。実際光が反射しているように見える。

「我が名はヴァリエ。以後、見知り置きを。」

キザなナイト君は俺に向かって自己紹介してきた。
なんか馬鹿にされてる気がする・・・

「まあまあ、この辺でこの店を後にして目的地へいこうじゃないですか！」

大竹が仕切つて、みんな会計を済ませ店を後にする。

桜井がぺこぺこ謝っていたが、俺がズバツとカップの弁償代として札を手渡し（店側はいらなそうですよといていたが押し付けた）店を出る。

なんか今日も波乱の一日になりそうだ・・・

第十四話 第三章「デート？」（後書き）

・・・さて、今回悪夢「ゴミの山」が登場しましたが、最初に出てきた悪夢「少女」と決定的に違う部分があります。それは一般人に見えるかどうかです。

悪夢にも感情があり、それがこじれて悪さをします。

ちなみにこじれなければ普通の霊として成仏します。

少女のほうは、誰かに気づいて欲しい、かまって欲しいという感情から一般人には見えますが、ゴミの山さんは、その姿がコンプレックスですから、見ないで欲しいという感情から、それぞれ特性が異なるわけですね。

第十五話 「襲撃者」

「で、ここがそのシヨップिंगモールか・・・」
いきなり話が飛んだが、ここに来るまでには特に何もなかった。

強いて言うのであれば、桜井の守護霊、ヴァリエがずっとハンサムスマイルをくれること、秋元が駅の改札口で挟まったことぐらいだ。

「っーかこんでね？」

秋元がだるそうに言う。確かにこの人ごみの中を5人で歩き回るのは大変というか困難だ。

まだオープンして間もないから混んでるのは仕方ないが・・・

「うん。それでね！いい事考えたの！」
大竹が叫ぶ。

「なあに？」

谷木がゆっくり聞く。

「グループわけをするの！」

また大竹が叫ぶ。

「いいねえ。それ」

まるで（と）いか確実に（）打ち合わせをしたように谷木が答える。

「まって・・・そしたらみんなで来た意味が・・・」

桜井の反対、どうやら桜井は打ち合わせをしていなかったらしい。

「まあまあ、いいからいいから！はい！これくじね！赤丸が書いてる人と書いてない人に分かれるから！」

そう宣言すると大竹はみんなにくじを押し付ける。

「まつ、まてよ……ちゃんとシャツフルしないと……」
俺は反射的に言う。というか絶対仕組まれてた……

「あ、赤丸だ。」
桜井が無邪気に言った。

「なんもねえか、まあこれで俺は両手に花だなあ」
秋元がのんきに言う。
「……もう見るまでもないだろうな……」

「……赤丸。」
やっぱり俺は赤丸だった。

「よし！決定ね！じゃ四時にここ集合で！ほら、二人とも行くぞい！」
大竹が二人を引っつかみ颯爽と人ごみに突っ込んでいく。
残された俺と桜井。

「……んじゃ、俺らも行きますか。」
正直どうしていいのやら……

「は、はい……。」
桜井は桜井でなんか照れてる（だがそれがいい）し、ヴァリエと真が後ろからまるで保護者のような視線を送ってくるのもなんか落ち着かん。
「……つてこついつときどうすればいいのか……秋元に聞いとくべきだったか？」

「なんか見たい店とかある？」

普通ならウインドウショッピングみたいなことをしたいが、混ん
るため、のんびりまったり・・・というわけにも行かず、行きたい
ところを絞って行動すべきだろうな。

「えと・・・じゃあこのファッションショップに・・・」

そうして俺たちは人ごみに突っ込むことに・・・

「あ！あの・・・離れないように・・・手・・・い、いや、何でも・・・
ないです。」

桜井が顔を真っ赤にしながら言った。

「というか本当に二人つきりなら、自分から積極的になったかもしれ
ない。」

でも・・・しかたないか。

「いいよ、ほら」

と行って桜井の手を取る。

若干俺の手汗が気になるが、桜井が安心した顔を見せた時、俺もな
んかうれしかった・・・恥ずかしかったけど。なぜか真に目をあわ
せられなかった。

「・・・ふうん。」

リアクションしたのは真ではなくヴァリエだった。

嫉妬してるのかな・・・（怖ええ

「ところで知っているかな？守護霊さん。」

ヴァリエは真と世間話を始めた。

守護霊同士の会話は俺にとっては珍しかった。

「最近、頭脳を持った悪夢がいるとか・・・」

頭脳？

「・・・それは厄介ね。普通悪夢は感情だけで動くから、戦闘がワ
ンパターン・・・戦略なんてないけど、頭脳があると・・・」
真が俺にもわかるように解説してくれた。

「そうそう、それから集団・・・部下や手下を持つようになるもの
もいるようだ。」
さらに恐ろしいことをヴァリエは言った。

「どうして・・・最近になって悪夢が強くなっているのかしら？」
真が俺の肩に乗りながらいった。

「さあ、しかしどこかで強力な霊力でも発生しているのだろうか。」
そうこういつている間に、桜井が行きたいと言っていたファッショ
ンショップに着いた。

そこからはいたって普通の・・・デートだった。

仕組みたとはいえ、楽しかったのは言うまでもない。

そこからまたフラフラ店を見て周り、アイスを買って食べていると
・
・

ブブブブ、ブブブブ、

携帯がなった。

「ってやべえ、もう四時半だ！」
うっかり、時間を忘れた。
何たる不覚・・・

「もしもし、？」

とりあえず電話に出る。

桜井は少し恥ずかしそうにうつむいていた。

「あ、金城君？」

大竹だった。どうせ電話番号は秋元が教えたのだろう。

「いや、楽しいのはわかるけどさ、時間だからそろそろ帰ってきてね！」

なんかすごく恥ずかしい。

俺と桜井をくつつけたのは間違いなくこいつだが、待ち合わせに遅れるぐらい遊んだのは俺たちだからな。

「わかった。すまん」

さつさと話を終えて桜井を見る。

早く行こう！てきな顔をしていた。

「よし、早くいかねえと・・・」

また桜井の手を引いて人ごみを掻き分ける。

「むう・・・」

ヴァリエが少しうなった。

もう少しで出口。といったあたりだろうか。

それでもこの人ごみなので、うまく進めない。つないだ手だけは、離さなかった。

「・・・？」

真が何かを気にしている。

ドスン、

何かが落ちる音がした。

その途端、人ごみが騒ぎ出した。

「何だ？」

このショッピングモールの出口は、大きなガラス張りになっていて、またそこにシャッターが下りるようになっていて。どうやらそのシャッターが勝手に降りてしまったらしい。

人がうごめいている。出口がふさがり混乱が広がっている。

「あの・・・どうしたのでしょうか？」

まだ五時前だぞ？閉店には早すぎるし、シャッターはでかすぎるから、おそらく機械で管理しているのだろう、それならば、いったいどうして・・・

「仕方ない、他の出口から・・・」

ピンポンパンポーン

「ただいま、お客様に大変な迷惑をおかけしています。プログラムの故障と見られますので、しばし、店内にて待機お願いします。また現在どの出口も封鎖されております。大変ご迷惑をおかけいたします・・・」

アナウンスが状況を告げてくれた。とすると。

「とりあえず外に連絡しようよ。」

桜井が携帯を出す・・・

「え・・・？圏外って、どうして？」

さっきまで電話ができていたのに、シャッターが下りた途端圏外に・・・

少し心当たりがあった。

守護霊セーレの力、空間操作。

烙印を発生させ、その中の空間を自在に操る方法。

しかし、ここには烙印がない。それにセーレがこんなことをする意味がない。(あの後どうなったが知らないが・・・)

「(真・・・どうなってるんだ)」

やはりこんな事態には霊が絡んでるはず。

「おかしい・・・あのシャッターには特別何もないの。何か錯乱電波か何かが出てるんじゃない？」

「とりあえず、あのシャッターが元に戻るか、ぶっ壊せばいいんだ。外の連中もこっちがどんな状況かわかるだろ。少し待とうぜ。」
そういつて桜井を安心させた。

ヴァリエはなにやら思考中だった。

俺は楽観していた。時間がたてば誰か外から助けしてくれると・・・

ダァン。バァン。

二回の爆破音。

その衝撃は人たちの混乱へと変わり、波のように広がってゆく。

「なんだ!？」

ピンポンパンポーン

「安心しろ、まだ誰もいない駐車場を爆破しただけだ、大人しくしていれば死者は出ない。」

アナウンスから聞こえてきた声、それは明らかな脅迫だった。

第十五話 「襲撃者」 (後書き)

十五話突破記念。

全話にサブタイ付けました。

第十六話 「虹のナイト」

「え、・・・何これ・・・」

桜井が恐怖を声色に出していた。

アナウンスから聞こえた言葉は、明らかな脅迫。駐車を爆発した・と。

そしておとなしくしていれば死人は出ない。

「（真、こんなことするのは・・・）」

さっきの真とヴァリエの会話。

頭脳を持った悪夢。

「うん。たぶんそう、二回の爆発から霊力を感じた。」
霊力を感じたということは、もう犯人は悪夢で決定か？

人々は先ほどのアナウンスにより、混乱、その中で若い男の集団が店員の首元をつかんで騒いでいる。

「おいおいおい！これはどういうことなんだよ！こっちは急いでるんだ。さっさとここから出せよ！」

さらに店員はオロオロしながら、他の客にも囲まれてゆく。

「す、すみません、シャッターとアナウンスは、三階の機械調整室で管理されていますので・・・私はどうとも・・・」
そういうと、店員は若い男の集団にドツキまわされ、ばったり倒れてしまった。

「おい、おめえら！三階だってよ。いくぞー！」
そういうと若い集団は階段を駆け上がった。

「京平！あの男たちの守護霊、そんなに霊力が強くない。危険だよ、相手は頭脳を持った悪夢かもしれない・・・」
たしかに、犯人もアナウンスで動くな！おとなしくしろ。的なことを言っていた。

彼らだけが被害を受けるならまだしも、他の人にも被害が出るのはよくない。

「桜井、少しここで待ってる、すぐ戻るから・・・」
そういつて俺も男の集団を追っていこうとするが・・・

「ダメ！・・・私も行く。」
そういつて俺の袖口をつかんだ。

「ダメだ。危険だ。」
当然俺は許さない。しかしつかんだ手を振りほどかなかった。

「大丈夫だよ・・・よくお兄ちゃんについて回って遊んでたからね。」
それとこれとは別だが、兄がいたのか。

「それに、敵がもし、頭脳を持った悪夢であれば君たちだけで行くのも危険だろう？」
ヴァリエも同意する。というかあんたの主が危険な目にあうかもしれないんだぞ？

「安心しろ。必ず私が主を守る。」
ヴァリエが保障する。
もう仕方ないか・・・

「・・・遅れるなよ？」
そういつて俺も階段めがけて走り出す。

後ろから桜井が付いてくるのを感じながら。

エスカレーターは止まっていたので、三階まで階段を駆け上がりつつ、周りの状況を把握する。もちろん二、三階にも人がいるが、さっきの爆発事件と脅迫のアナウンスがあったから、動き回るようなまねをする奴はいない。

「京平、あれ！上見て。」

真が俺の肩から声を上げる。

俺も言われたとおり上を見上げる。

するとそこに、骸骨の首だけが空を飛び、マントのようにぼろ布が後を引いている、悪夢がいた。

「ケケケケケケケケ、ウゴキマワルナトイツタダロ。」

その悪夢は俺たちではなく、先に行った若い男の集団に語りかけていた。

当然桜井は気づかない。

「（真、あいつ、消せるか？）」

聞いてから思った。

できない。真は子供のまま、つまりあの悪夢は真に敵意を向けていないのだ。

ついでに、他の人には見えていないらしい。

・・・ということは俺の霊力も強くなってるのか？

それともただ霊に関わりすぎて、俗に言う「見える人」の仲間入りか。心霊特番にでも出るか。

「ケケツケケケケ」

悪夢のほうは、首から上だけだとおもっていたが、急に体のあるべ

き場所に紫の炎が上がり、骨の体が浮かび上がってきた。その手には、骨でできた刀が握られている。

ズバア

「キヤーツー!!」

桜井が悲鳴を上げる。

若者集団の先頭を走っていた金髪男が胸を斜めに斬られている。

悪夢が人間を斬った。

金髪男の体からは、俺が今までに見たこともないようなぐらゐの血が流れている。

たちまちそれは水溜りを作る。真っ赤な・・・

「桜井、こつちだ。」

俺は桜井の肩を抱き、三階にあつた服屋の商品の影に連れて行く。そして俺は更なる犠牲者が出ないように、骸骨悪夢を消すために振り向く。

「ここでじつとしているよ。」

ヴァリエもいるし。と思っていると彼が俺に声をかけてきた。

「君もここにいたまえ。私があれを退治してこよう。」

そういうと彼は細身の剣を抜き出し、まっすぐ駆けていった。

大丈夫か・・・？ヴァリエの実力は一応見たことはあるが、あの悪夢も相当の速さで斬りを繰り返されていた。霊力も相当に違う。

「ケケケ？アンダオマエ・・・？ウラツ」

悪夢がキーキー声で話し終える前にヴァリエは斬撃を繰り返す。しかし威力はさほどなく、あっさり防がれる。

「・・・さあ、悪夢と踊ろうか。」

誰に言うでもなく、ヴァリエは囁く。

そして、まるで踊るように。軽やかに細身の剣を振る。

骸骨悪夢もその動きに合わせ、踊るように防御をする。

若者集団はいきなり仲間が斬られ、怯え、とにかく仲間を助けるため混乱している、

俺と桜井は、服の影から様子を伺う。

「ケケケケケ、！！！」

骸骨悪夢は、ヴァリエの踊りの隙を見つけ、流れを変えて、大きく斬撃を走らせる。

ヴァリエは何の構えもなく、防御するつもりもない。

「！！おい!？」

うごかねえと・・・

そう思ったのもつかの間。

斬撃の先端、刀の切先がヴァリエに触れる寸前、本当に触れたのではないか、と思うような距離で、彼の周りに虹、オーロラ、光の屈折と反射。すべてが起きた気がした。

光が、閃光が、煌いたかと思うと、一閃。

ヴァリエの細身の剣が虹の尾を引きながら悪夢を切り裂いていた。

一撃。まさにそれで悪夢をしとめてしまった。

カウンター。それが彼の戦闘スタイルだった。

「お分かりいただけたかな？僕の實力を。」

憎たらしいほどのハンサムスマイルで。

第十六話 「虹のナイト」 (後書き)

なんか遅れてしまいました。
これからもがんばります。

第十七話 「不覚。」

「ねえ……いったい何が起きているの？何である人は血が出てたの……？」

桜井が混乱したように言う。

ここは三階のフロアにある服屋。

このショッピングモールは、直方体で、細長い。つまり三階に来たからといっても、すぐに機械調整室にいけるわけでもなく、このバカみたいに長い建物から探し出さなければならぬ。

(さてよ……?)

仮に、犯人が頭脳を持った悪夢だとしよう。

もし、さっきの悪夢がその犯人の手下であれば、マズイ状況じゃないか？

先ほどのアナウンスで、次は被害者が出る(現に若者が一人切られている)と宣告していた。

しかしそんなこと解るのだろうか。この馬鹿でかい建物のすべてを把握するって言うのは困難……そのために悪夢が(さっきの骸骨とか)いるにしても、それを犯人が知るためには……

偵察が一定間隔で機械調整室に戻っているのか？

そうすれば、異常を見かけた偵察が報告できるし、時間がかかり過ぎて帰ってこなかったら、異常があると判断できる……

それならば。まだどこかに偵察の悪夢がいるはず。そしてそいつのあとを付けていけば、犯人のところへ……

よし！

「桜井、やっぱりお前はここにいたほうがいい。犯人は何をしてくるかもわからないし。」

そう告げると、桜井は不服そうに顔をしかめた。ヴァリエも確かに戦力になる。しかし、悪夢が飛び回り、犯人がまだなにものともいえない。

それにまだ犯人の要求。目的は何なのか。

まだじつとしている、の指示しかないのでは、下手に刺激すれば危険。

一人のほうが身軽という意味もある。

ともかくこれ以上桜井に関わって欲しくなかった。

「でも、私が・・もしも。」

さつき男が血まみれになって倒れたのを目撃しているからかもしれない

桜井は急に不安になってきていた。

大丈夫、ヴァリエが付いてるし。

「安心しろよ。すぐ帰ってくるから、とにかくうかつに動くなよ？」
そう告げた俺は、反論されないようにさっさと背を向けて服屋を後にする。

そのままショッピングモールを駆け抜ける。

このショッピングモールは、五階建てで、四階以降が駐車場、南北に伸びる直方体だ。

俺は今、南の端にいるため、必然的に北に行くことになる。

斬られた男の周りで混乱している集団を尻目に俺は先を急いだ。

「なあ真。悪夢の気配とかないのか？」

桜井がいないので、普通に会話できる。

今は子供の姿で俺の肩に乗っている。

「ない・・けどまあ近くに来ればわからないこともないかも。」
なんとまああいまいな答えである。

それはいいとして、あれから犯人が音沙汰なしなのはやはり気になる。

「どう思う？犯人はやっぱり頭脳を持った悪夢なのか？」

真は、あまり考えてるようには見えなかったが、今回は一回も戦闘してないので、考える余裕はあつたはずだが……

「うーん。私、その手の悪夢は初めてだから……」

なんかといか

やっぱりといか子供だと頼りない。

「あつ、何その顔！絶対頼りないとか思ったでしょ。もう……」

なんというか……

と和んでいる場合ではない。

悪夢を探さなければ。

「あれ！京平、あの悪夢。ほら全身タイツみたいなやつ。」

男性トイレから出てきたイイ体に真っ黒の全身タイツを見にまともな奇妙な男。

うほっ、いいおと「そんなこと言ってないで！ほら。」

「……そうだった。いかんいかん。で、あいつに気づかれないように尾行する」

尾行は普通気づかれないようにするもんだ。とかいうんじゃないぞ。イイ男悪夢は、堂々と歩き、こっちは気づかず、北に向かって歩き出す。

「（よし。そのまま機械調整室に戻るまでつけるぞ）」
そろそろ、こそこそ、ささっと

物陰に隠れたりなんたりしながら、尾行を続ける。

・ ・ ・ 結構歩いた。一向に機械調整室が見当たらないような・ ・ ・

ピンポンパンポーン

「 ・ ・ ・ 愚かな人間生物共よ。聞け。私の言うことを聞かぬものが現れた。約束どおり、犠牲者を出そう。 ・ ・ ・ 言うておく。私は生命なんぞ興味はない。」

・ ・ ・ ヤベー。

言うことを聞かぬものって ・ ・ ・ 俺？

でも、いい男悪夢は俺に気づいていないし、他の悪夢にも見られていない。

でも他にうるちよろしてるやつもないし。

約束どおり ・ ・ ・ って爆発か？

くそっ、 ・ ・ ・

・
・
・
・

あれ？

「何も起きないな ・ ・ ・」

建物内はざわめきが起こっているが、特に異常はなく、犯人が何をしたかったのかも解らなかった。

「いったい何なの ・ ・ ・ ? 金城君は ・ ・ ・ ?」

桜井は混乱していた。

すぐ戻るといつても、10分やそこらで帰ってくるはずもない。

こうやって取り残されるのが ・ ・ ・ 一人でいるのが嫌だから付いて

きたのに。

そんな桜井はさきほどのアナウンスで、犯人が、うろつろしているものがあるといったとき、気が気じゃなくなってきた。そして先ほどからずっと寒気を感じている。

「……………」

ヴァリエはその寒気の正体も知っている。

「これはこれは……まさか旧友、同志『ミラージュナイト』だったとはね。」

ヴァリエに対峙して立つ男。

人とは見えない容姿。

髪は長く、漆黒の雨が滴り落ちる。というかのような黒髪。

マントともコートともいえぬ上着には、鎖のようなアクセサリーがされ、右肩の部分だけ布地がない。顔は中性的だが、大人っぽく、恐ろしく目がキラキラしている。

そして人ともいえないのは、その露出した肩。

肩に大剣が刺さっている。

「……………あんだったとはね。驚きです。まさか破壊者アレスでしたとは。」

ヴァリエは丁寧な口調で、でも驚きを含み、襲撃者。おそらくこの件の主犯者に遭遇した。

「あなたは何年も前に、敗北し、姿を消したと聞いていますが……………すっかり桜井は蚊帳の外。」

「そう、私は本来負けるはずのない相手に敗北を喫した。その後、青銅の壺に封印され、私は守護霊ではなくなった。」
古い、昔話をするようにいった。

「では、あなたはもうただの悪夢ですね、どうしてこんなことを？」
ヴァリエは冷静に、できるだけ情報を引き出そうとする。

「・・・私は、人間の憎しみが見てみたい。」

アレスは落ち着いた声で、

そのくせ顔はにやけて、

そう答えた。

第十七話 「不覚。」（後書き）

次回は戦闘が始まります。
さーて、ぶっ壊そうかな？

第十八話 「破壊者アレス」

「アレス、君はこんな愚かなことをする奴だったとは思わなかったよ」

ヴァリエは心底がっかりした。というような感じで言った。

「ふふ、君こそ、まだ守護霊でいたとはね。」
アレスはニヤニヤしながら言う。

「どういう意味だ？」

「守護霊は無力だ。」
アレスは言い切った。

彼もまた、昔は守護霊であった、しかし今は主を失い、また守護霊としての使命も失い、実質悪夢のようにさまよっているだけだった。そんな彼が、いま。このような事件を起こし、旧友であったはずのヴァリエに刃を向けている。

「今から証明してやる・・・守護霊の無力さを・・・。」
そう一人つぶやくようにして言った。

刹那、ヴァリエを囲むように黒色の火柱があがる。

火柱は、他の人間にも見えるため、桜井には火柱だけが見えていた。

「な、なにこれ・・・」

彼女はその火柱の中につつすらと、人影を見た。

「アレス・・・技が変わらないとは感心しないな。」
ヴァリエは神速で足を動かし真上に飛ぶ。

天井までわずかの時間で到達し、また天井をけり、斜めに火柱を超える。

その間、アレスは動かなかった。

天井をけり、細身の剣をつきの構えでアレスを指す。

アレスは肩に刺さっていた大剣を引き抜き、ブーメランのようにヴアリエに投げる。

弧を描き、大剣はヴアリエの軌道に直撃・・・のように感じたが、はじかれ大剣の軌道が反れる。

「さすがはミラージュナイト。だが、守護霊ではできないこともある。」

アレスが、そうつぶやく間もヴアリエは接近してくる。

ヴアリエの突きは、まるで子供相手のように軽く上半身を曲げるだけで交わされてしまう。

「弱点の克服・・・ミラージュナイト、君はカウンターが最大の武器だ。」

交わされた後も、ヴアリエは至近距離から斬撃を繰り出す。

傍らに落ちていた大剣が糸に引かれたようにアレスの手の中に戻り、それを使って斬撃を防ぐ。

「しかし、君にはそれ以外の武器がない。」

ヴアリエが渾身の一撃を放ったが・・・

「ゆえに、君は弱い。」

アレスの大剣にふやけた烙印が走り、大剣が前方・・・ヴアリエのほうにだけ爆発する。

破片がヴアリエの体に直撃。その衝撃で細身の剣が吹き飛ぶ。

破片は付近にあった店を何件も吹き飛ばす威力だった。

「ミラージュナイト・・・いや、ヴァリエ。わかったか？君は弱い。」
アレスが見下ろしながら、勝ち誇ったように言った。

「あの時は・・・私の圧勝だったのに・・・皮肉ですね。」
ヴァリエはまだ落ち着いていった。

「しかし・・・烙印をなめないで欲しいですね。」
ヴァリエのしつかりとした烙印が、アレスの全身に張り巡らされる。
それが瞬時に収束そして・・・爆発。
内部に爆風が走り、アレスの体が吹き飛んだ。

「ふう・・・何とか・・・なったか。」
ヴァリエ渾身のカウンターは烙印の力を最大限に利用した時間差で
放たれた。
そのため油断したアレスは、それまでの自身が与えたダメージを一
度に食らった。

その安堵もつかの間　　- - - -

「守護霊にはない力。」
アレスの破片と思われるものが収束。
黒い影となり、人型を形成する。
人型はアレスとなり。
大剣をヴァリエに向ける。

「烙印を超える力。」
すでに力を使い果たし、地面に寝ていたヴァリエ。
立て続けにおきたなぞの爆発に混乱していた桜井。
二人が同時に、再生したアレスを見た。

「アレス!?、クソツ・・・実体化したのか・・・」
実体化。つまり霊力が弱い人間にも見えるようになる。

「あ・・・?」

桜井が理解する間もなく、黒い縄のような影に拘束される、と同時にアレスの肩に刺さっていた大剣が、ヴァリエを串刺しにする。

「グツ・・・貴様・・・?」

黒き縄で拘束された桜井は意識をなくし、彼女を担いだアレスはあたり一面にふやけた烙印を張り巡らせ・・・あたりは爆発した。また、彼は携帯に酷似したトランシーバーのようなものを出し、そのボタンを押し、こう告げた。

ピンポンパンポーン。

「愚かな人間よ、聞け。今、三階の服屋を爆発した。辺りにいた人間はすべて吹き飛んだであろう。繰り返し忠告だ。余計な動きはするな・・・」

その先を俺は覚えていない。

ただ覚えていたとすれば、真の忠告も聞かず、ただ今まで来た道を引き返し、桜井と分かれた服屋を目指して走り出したことだ。

「京平、止まって、まだ犯人がどこで何をしているかわからないから・・・」

真には、俺を止めるすべはない。

階段を駆け下り、三階の・・・元は服屋であった場所にたどり着いた。そこには剣で串刺しにされたヴァリエしかいなかった。

第十九話 「覚醒、そして殺戮」

「京平……。」

真は正直驚いていた。というのもヴァリエが串刺しになり……つまり敗北を喫していることだった。真とヴァリエは特に交友が深いわけではないが、お互いに実力は知っていた。

ヴァリエの実力は相当なものだった。

その彼が、致命傷を負い、主を見失っているのは信じられなかった。

「桜井は……？桜井はどこだ!？」

京平はかなり正気を失っていた。

自分が彼女のそばを離れたばかりに、ひどい目にあっているのではないかと。

その自責の念から呆然となり、しばしヴァリエと周囲を見回していた。

だが、まるで何かを悟ったように彼は勢い良くヴァリエに刺さっていた大剣を引き抜き、掲げた。

その見た目からは到底、生身の人間には持ち上げることができないような剣を肩に乗せ、静かに囁いた。

「犯人を殺す。」

真はその場に立ち尽くし、京平の霊力が増幅している事に気が付いた。

普通、人間の霊力が感情によって変化することはない。

彼にはいったい何が……

「……我が……主は……おそらくさらわれている。」

ヴァリエが何とか地面からうめき声を上げる。

腹部の傷から血液のように霊力が漏れ出している。

「そうか・・・それなら桜井のいるところに犯人もいるんだな。・・・
ヴアリエ、つながりで主がどこにいるのかわかるな？」
「いつもと違う京平。」
もう彼は別人に見えていた。

「ああ・・・私も連れて行ってくれ・・・その方がわかりやすい。」
「そう聞くなり、ヴアリエを担ぎ上げる。」
そして振り向きながら真に言った。

「真、君も僕と一緒に戦おう。」
「秀囲気・・・まるで別人の京平はそのまま歩き出す。」
真はある既視感を覚えた。

「いつか・・・いや、違う。」
「いつも・・・？」

その思考も途切れることになる。
不意に残骸の陰から、鎧を身にまとった悪夢が飛び出した。
その悪夢は思考していた真を狙う。

「くつ、！？」
真は急に自分に敵意を向けられ、力が漲るのを感じつつも回避する。
しかしバランスを崩し、敵の二回目の攻撃をかわすことができない

「大丈夫か？真。」
さつきまで悪夢がいた位置に大剣が振り下ろされている。
京平は神速の斬撃により悪夢を一撃で消滅させていた。
やはり、いつもの彼・・・いや、普通の人間では考えられない事態だ

った。

「あ・・うん、ねえ、京平？」

真は心強さよりも、京平がいなくなってしまう恐怖心があった。それを・・確かめたい。

「ん？どうした・・？」

反応はいつもと同じ・・？
いつも？

「桜井さんの事、好き？」

聞きたいことはそうではない。

しかし、真にとっては真実はまだ早い気がしていた。

「・・・さあ、助けに行くぞ。」

それはもうすでに答えだったのだろうか。

ヴァリエは終始無言でいた。

京平が歩みだす。

それに真が付いていく。

それにヴァリエが案内をする。

たどり着いたのは機械調整室ではなく、屋内駐車場であった。

しかしそこには本来あるはずの・・車がなく、一面柱がなく、その柱の中心・・そこに黒い縄のようなもので縛り付けられた桜井の姿があった。

「お待ちしていました、金城様。楽しいショーは・・」

アレスが悠々と構える。

肩には新しい大剣が刺さっている。

「これからですよ？」

アレスはいつたどこで京平の名前を知ったのだろう。

真は疑問に思いながらも警戒を怠らない。

すでに真は大人状態にあり、戦闘も避けられないことを悟っていた。

「黙れ。小汚い暴力者め。」

京平は吐き捨てた。

真はまた、既視感に襲われつつも、戦闘を開始した。

アレスはまず、真に攻撃を仕掛けた。

肩の大剣を引き抜き、至近距離から大振りを繰り出す。

真は受け止める気はなく、地面をけり、舞い上がるように空へ攻撃をかわす。

京平がヴァリエを放り捨て、手に持った大剣を直線軌道で放つ。

アレスは交わすことができず、直撃する。

アレスが吹き飛び地面に伏す。

「・・・雑魚め。」

京平がそう言い、桜井を助けに柱へと向かう。

「後ろだ!!」

ヴァリエが倒れたまま叫ぶ。

京平は動じず、振り向いただけでアレスの攻撃・・・ふやけた烙印が施された大剣を受け止める。

「馬鹿めえ!!」

アレスが歓喜の声をあげる。

「甘いんだよ。」
京平は投げ返す。

それ。はアレスの眼前で爆発する。

「破壊者如きで僕には勝てないんだよ。」
もう真は彼を京平と信じることができなかつた。

第二十話 「誓い。」

自身の攻撃である大剣に烙印を施したものが跳ね返され、その爆発により体が吹き飛んだアレス。それを尻目に桜井が拘束されている柱へ悠々と歩いていく京平。

「桜井・・・」

彼女の顔は蒼白だが、命は無事。

京平も少し悲しそうな顔をしてその頬に触れた。

「まだ・・・終わっていない・・・」

黒色の塊が収束し、1つの形を作る。

アレスは、その力で何度も再生する。

「これが…守護霊に無い力だ！」

再生したアレスは、棒立ちしている京平に突進する。

しかしそれは真の放つ炎弾で遮られる。

「邪魔をするなあ！」

憤怒の形相で叫ぶアレス。

いったいなぜ彼はそこまでして……

（奴は確か・・・人間の憎しみが見たいとぬかしていたな。）
ヴァリエは傷のため戦闘には参加せず、傍から見守っていた。
歩くこともままならない。しかし思考をめぐらせていた。

（奴の目的は・・・）

シヨッピングモールの征服。

桜井をさらう。

京平との戦闘。
人間の憎しみ。

・・・まさか、奴は京平を・・・？
そのための桜井か！

しかし、真の存在は誤算か？
いやそんなはずは無い、守護霊なら私だって・・・
だとすれば。早く主を助けなければ。

「もう諦める。破壊者。あと何回殺せば消滅するんだ？」
京平は回し蹴りでアレスの首を吹き飛ばしていた。
しかしアレスの体はすぐに再生を始める。
埒が明かない・・・

「まあまあ、落ち着け・・・ふふっ」
アレスはこの状況でも余裕の笑みを浮かべる。
真は霊力の流れを感じた。

途端、桜井を拘束していた縄がきつく締まりだした。
桜井は締め付けられうめき声を上げる。

「貴様・・・やめろ！」
京平がアレスと戦闘を始めてから初めて焦りだす。

「動くな・・・金城、…どうだ、私が憎いか？」
そうつぶやきつつもさらに縄をきつく締めていく。
アレスが右手を握ると桜井の縄もしまっていく仕組みになっているらしい。

「憎い・・・？笑わせるな。愚かだ」

京平は鼻で笑う。

この状況でも余裕でいられるのは自信があるのだろうか。

「なんだと・・・？貴様、この小娘の命を私が握っているのだぞ？」

アレスはそうつぶやきながらさらに縄を絞める。

桜井の肌に縄が食い込み、血液の循環が悪くなっていく。

さすがにこれ以上は危険だ。

「諦める。貴様に僕は吸収できない」

吸収。それは守護霊において禁忌である秘術。

その内容は人間を一人、丸ごと霊力に変換する。つまり人を殺して吸い取ること。これにより莫大な霊力を守護霊は得ることができる。しかし人間を守るための守護霊が人間を殺すのは意味が無い、ということでその方法は受け継がれることなく消滅した。はずである。

「なぜ・・・吸収だと？」

アレスはその方法を知っているのか、またこの事件の目的がそれなのか、不明である。

「簡単な理屈だ、僕・・・つまり人間は憎しみを得ることで霊力が一時的に向上する・・・その時に吸収したかったんだろう？」

京平は霊に関して詳しくすぎる・・・

「残念ながら貴様程度の霊力では僕は吸収できない」

こんなのは・・・京平じゃない。

「消してやるよ。あっさりだね」

嫌だ！

「京平！」

真が叫ぶ。

京平が真を見る。

守護霊には珍しい。

人間のある行為。

涙。

真は泣いていた。

一粒だけ、頬を伝う涙。

「真……僕の真……どうか泣かないでくれ」

京平はおぼつかない足取りで真に歩み寄る。

「させるかあああ！」

アレスが特攻をしかけるが……

「黙れ」

京平の手から霊力の塊が線状に奔り、アレスの両腕をはじけ飛ばし、胸を貫通して壁に串刺しにする。また、三本の霊線が奔り、アレスに刺さる。もう彼は行動不能状態になる。

「真、僕の真。泣かないで、僕が君を守るから」

京平が優しく真を抱き寄せキスをした。

（違う……）

(京平じゃない・・・)

(こんなの・・・京平じゃない！)

「離れて！」

真が京平を突き飛ばす。

不意に飛ばされたため、床に頭を打つ。

「いつててて・・・なんなんだ？ いったい・・・？」
京平がゆっくり起きる。

「俺はいつたい何してたんだ？」
京平は覚めた。

第二十一話 「抵抗」

ショッピングモールの周りでは人ごみができている。その中をリポーターが忙しく駆け回っている。

「現在、占拠されたショッピングモールの犯人は実態が不明、要求もなしという異常な事態ですが、中にはまだ人が残されており……」
リポーターと野次馬を掻き分ける長身の男がいた。
全身ロツクで固め、ケータイを掛けているが繋がらず途方にくれる。

「ネレイス、どうする？、彼女に危害がある前に……」
独り言をつぶやく。

「……そうだな」
また一人で納得する。

たった今。
中で三回目の爆発が起きたばかりだった。

「俺……何やってんだっけ？」
俺は、えーっと、そうだ、たしか桜井がさらわれたんじゃ……

「京平、なの？」
真がオドオドしながら聞いてくる。
そうだと、俺しか京平はいない。
……だが、少しばかり意識が飛んでいる。ぼんやりとなら覚えている

とも。

そう、ここは桜井が拘束されている駐車場。たしか俺が霊力を使えるようになり、アレスとやらを倒した…

「貴様あ…」

アレスは体中に穴が開いていたが、黒い煙が沸き、修復していく…
って何だこいつ、不死身なのか？

というよりどうして俺はアレスの名前を知ってるんだ？

「金城お！ 貴様…ふざけやがって、吸収してやる…」

待て待て待て、

何で俺の名前を知ってる！？

そもそも吸収って何だ？

確か俺はさっきまで知ってた…？

あの感覚が何なのか。どうして意識が飛び、勝手に体が動き、霊力を駆使して戦闘できたのか。

「真、と、とにかくあいつを頼む。そのうちに俺が桜井を救出する！」

今の俺には絶対に霊力で戦えない。それがはっきりわかる。

この状況で頼れるのはもはや真だけ。

「良かった…いつもの京平だ。これなら戦えるよ」

真はつぶやくように言った。

アレスはもう肩に大剣が発生し、それを引き抜き武装する。

真も手のひらに炎を灯し、その中から包丁を取り出す。

二人はほんの一瞬対峙し…すぐに刃を交える。

力ではアレスが上回っているため、真は身を引き、体勢を立て直す。

「甘い甘い甘い！」

アレスは興奮し、見境無く大剣を振り回す。

しかし、真は宙を、舞い落ちる木葉のように、ひらり、と交わす。宙を回転し、アレスの肩を目掛けて包丁を驟雨しゅううのように降らす。

全身を刻まれたアレスだが、倒れることは無かった、真の包丁で干切れた右腕がはじける。

それは断面から黒い煙を放出し、真を目掛け猛進する。

真は宙を飛んでいるため、身動きがとれず、首を、飛んできた右腕に掴まれる。

そのまま壁にたたきつけられ、首をギリギリと絞める。

「う、…ツク…、」

首が限界を訴える。

その真の視界に悠然と片腕をなくしたアレスが映る。

「どうだ…実は守護霊でも吸収しようとするればできないことも無い。

…まあ、自我が乱れる可能性があるがな」

アレスはニヤニヤ笑いながら左手に大剣を握りなおす。

真は意識が遠のき、手の炎が弱まる。

「靈力を吸い取るだけなら危険もあるまい。…フフツ、さあ、我が体内の靈力の一部になるがいい」

アレスの肩越しに、桜井が拘束されている柱が見える。

その拘束を解いた京平が映る。

壁から放たれた桜井はぐったりとしていて、意識も無いだろう。京平が抱きかかえるように彼女を保護する。

（嫌…）

自分だけが命の危険である。

(私だけ消えるのは…)
守護霊の役目は主を守ること。
もし、守護霊がいなくなっても、新しいのが憑く。

(嫌!)

京平ッ!

「真?...真!」

真がアレスに首を絞められ、危機に瀕している。
俺は桜井をヴァリエに任せ、真の元へと駆け出す。

何か策があるわけでもない。ただ、真を助ける。それだけのために。
助けられるかなんてわからない。
でも、

俺は走る。

真の元へと。

「さあ…いただくぞ」

アレスが何かを始めようとする。

させないぜ。

「コンチクシヨおおー!」

何の策も無いままアレスの顔をぶん殴る。

まったくの不意を突かれたらしく、右に吹っ飛ばす。
と同時に真の首をつかんでいた手も吹き飛ばす。

「真!」

ぐったりして、意識がないようにも見えたが、手には炎が灯っており、大丈夫みたいだった。
しかし、そんなにゆっくりもできない。ただの人間が殴った程度じや時間も稼げない。

「貴様ら…よくも…殺してやる。…!？」

起き上がったアレスの顔はひび割れていた。

まるで石膏像が風化したように、うっすらと、しかし確実にひび割れている。

アレスが指でなぞることにぼろぼろこぼれている。

「なんだ…？ 貴様いったい何をした!？」

アレスは不死身のように思ったが、実際そうでもないらしい。

俺は何かした覚えは無いが、アレスの身に異変が起きているのは間違いない。

「霊力が不足しているんだな？」

真が意識を取り戻し、俺に肩を借りているが、自力で立っている。

霊力の不足？

「バカな!？ 私はもはや守護霊ではない！ 貴様らのような惨めな力ではないのだよ！」

アレスは力ごもって叫ぶが、その間にも顔が割れていく。

もはや時間の問題だ。

「守護霊でないにしても、霊であることに変わりはない。そんだけ再生を繰り返せばどんなに吸収で得た霊力があるうとも持たないさ」
真は勝ち誇ったように言った。

アレスも事實はわかっているはずだ。しかしどうすることもできない。

「もう諦める」

真が宣告する。

「いや…まだだ。まだ吸収すれば…」

アレスは右腕をくっ付けようとして断面をくっつけたが、ほとりと落ちた。

「お前ではもう京平を取り込めない」

そう…俺は殴るだけでアレスを倒せそうな気がした。

「そうだな…たしかに、だが」

アレスはヴァリエの足元にふやけた烙印を施す。

その間にも自身の体の崩壊が進むが、気にせず飛びつく。桜井に。

「ま、まさか…やめろ！」

奴は意識が無く弱っている桜井を取り込もうとしている。

それだけはダメだ！

「クッ、」

真は反応が遅れ、ヴァリエは爆発する。

俺が走っても間に合わず。

アレスは桜井に到達、体がぼろぼろになりながらも、割れ目から黒色の煙を発し、桜井に覆いかぶさる。

それだけはダメだ！

俺の…無力な精神的抵抗も虚しく、桜井はアレスの煙の中に消えた。桜井は吸収された。

「ハハハハハッ、力が戻る！」
アレスは復活した。

第二十二話 「賭け。」

アレスが復活した。

全身をオーラのように黒い煙いを取り巻き、桜井を吸収する前よりもおそらく力を増しているだろう。

俺はどうすることもできなかった。ただ見ているだけ。それしかできなかった。女の子一人守れなかった、それだけではない。今も真がアレスと戦っている。俺はまだ守られているのだ。

「ハハハハッ、どうだ！？憎いか！私が憎いか！かねしろおお」
もはや興奮の絶頂に達しているアレスが、大剣を両手に構え、真に向けて乱暴に振り回している。真は回避が上手だが、流石に長引く戦闘で疲れているようだ。

「クソッ、！？」

一瞬の不意を突き、アレスの大剣は真の腕を大きく切り裂く。
切り裂かれた腕からはとめどなく霊力が滴り落ち、真は足を付き、体制を崩す、その間にもアレスは大剣を振り回し真に止めを刺そうとする。

「やめる！」

俺は叫ぶ。

アレスはもはや笑いが止まらず、ゆがんだ顔でこっちを見た。

憎い。奴が憎いとも。消せるのなら消してやりたい。
桜井は吸収された。それがどういうことを意味するかなんて俺は知らない。しかし、そこで悩む気は無かった、必ず助けれる。そうすがるように祈り、アレスに叫んだ。

「どうした！？ 金城お、素直に吸収される気になったか？ それ

ならこの愚かな守護霊は殺さないでやる」

守護霊は主を守るためのもの。

アレスの言っていることはおかしい。

しかし、このまま戦っても真が勝てそうも無い。

真が負けてしまえば、もう俺は吸収されるのを待つだけ。

なにか、桜井を救い、真も救い、アレスを倒す方法は残っていないのか。

守護霊にしかできないことをあのアレスにたたきつけてやりたい…
主語霊にしかできない？

烙印。

そうだ。真の烙印、絶対服従の能力さえあれば。

桜井とアレスを分離させ、奴を消滅できるかもしれない。

「時間をくれ、真と決める」

「ほほう…どっちが生贄になるか、決めるがいい。ククッ」

アレスは勝利を確信している。

ゆえに隙だらけ。

真は、傷ついた腕をかばいながら俺の元に来た。

真に先ほどの作戦（と言っても烙印を食らわすだけだが）を話す。
すると真ももうそれしか方法は無い、と思っていた。

「そういうと思って、さっき首を絞められたとき、奴の右腕に烙印を施した」

真はそうだったが、何か問題があるようだ。

「でも、生物…特にあんな化物みたいな奴を服従させるには私の霊力じゃ足りないの…」

確かに、真の能力は万能に見えるがそうでもない。

意識の無い物体なら、服従しやすいが、意識があると莫大な霊力が必要になる。それが元守護霊のそれも人間を吸収した奴ならなおさら。

しかし俺にはその対策が思いついている。

「安心しろ。つながりを信じるんだ。俺の霊力はなんだか知らんが今だけかもしれないけど、いつもより多い。莫大だ。つながりを通してお前に送り続ける」

これが守護霊にしかない力。つながり。

「いい加減にしろ、どっちが生贄になるんだ？ククッ」
アレスは自身の腕に烙印があるのは気づいていない。
もうそれに賭けるしかない。

「行くぞ！京平！」

真の声とともに、アレスの右手を中心に烙印が彼の全身に広がる。

それは締め付けるようにアレスを拘束する。

アレスは不意を突かれたような顔をしたが、それでもまだ余裕があるようだ。

真は烙印操作のため両手を前に差し出す。

「グッ、小癩なああ！」

無理やり引き剥がそうとする。

真の足がガクツ、と揺らいだ。支えるように俺は真を後ろから抱きしめ、二人のつながりを信じ、真に霊力を流す。

「もつと強く！」

真が叫ぶ。俺はもつと強く真を抱きしめ、霊力を流す。

アレスはのた打ち回り、地面を這う。ギーギー叫びながらどんどん

きつく締まってゆく烙印に支配される。
だが、アレスはまだ自我を保ち真の命令を受けない。

「嫌だ…、嫌だ…、消えたくないいいい！」
アレスは、訳のわからないことを騒ぎ続け、バタバタ動き回る。
腕が通常曲がらない方まで曲がり、もはや関節というものがない。

「京平…、もっと、もっと強く…！」
真もすでに限界だろう、烙印操作のために差し出された両手が下に
落ちてくる。

俺はそれを支えるように握り締め、さらに靈力を流す。

「私わ、破壊者だ…グオオオオオオオオ！？」
ビキビキビキ、と言う嫌な音がアレスから発せられ、全身が締めつ
けられ、体が細くなる。

それでもまだ、真の命令は聞かず、のた打ち回る。

「イヤダ…イヤダ…キキタクナイ、キキタクナイ、キキタクナイ
イイイ…！！！」
アレスはもはやただの塊のような姿になった。
それでも抵抗を続け、真の命令は聞かない。

「真、とにかく…桜井とアレスの分離を考えるぞ！」
アレスの力の源はもはや桜井しかない。
彼女さえ分離してしまえば…

「京平、奴の中に意識を集中して！」
奴…アレスの中に意識を集中する。
そうすると、真の烙印を通じて俺の意識は暗い煙の中に落ちていく
気がした。

恐怖……そして……桜井を助ける。
使命感に燃え、俺はアレスの中に意識を集中した。

俺の意識は暗い闇に落ちていった。

第二十三話 「破壊者の最期、」

暗い…

寒い…

ここはどこだ？

全身を満たす液体のようなもの。明かりも無く暗闇が広がり続ける空間。

そんな絶望を視覚化したような場所に俺はいた。

手には命綱のように握り締められた帯のような形のものに烙印が張り巡らされている。

この烙印の形：紛れも無い真の物。

そうか：ここがアレスの『内』か。ここどこかに吸収された桜井がいるはず、そしてその彼女を救出し、アレスを弱体化させ、消滅させる。

（桜井：どこだ？）

そもそも生きている保証も無い。ただ信じているだけ。

アレスに吸収されてから時間は経っていないが、奴は多大な霊力を桜井から吸収しただろう。…いや、まてよ？桜井はそこまで霊力は無いはず…

不意に俺の頭には誰かの声が思い出された。

人間を一人、丸ごと霊力に変換する。

つまりこの空間を満たす霊力は桜井そのもの？

もしそうなのであれば、桜井救出なんてできない…：どうする、こうしている間も真はアレスを押さえつけるため、霊力を消費しているだろう。

一刻も早く打開策を考えなければ…：しかし、桜井はもう…

そんな絶望的な意識の中、俺はもう手に握られた烙印を強く締めるしかなかった。

「京平…まだか？」

真は一人、アレスを服従させていた。

京平の体はあるが意識が無く、その意識はアレスの『内』にある。烙印を通じて送っているが、いつ途切れるかもわからない、危険な状態だった。

「ゴエア、キジャヴォア…」

そのアレスは、もはや人型だったとは思わせない姿をしている。無理やりボール型に丸めたような固まりとなり、縛り付けている烙印の中でビクン、と痙攣している。

「グオオオ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、キエタクナイ、」

アレスの塊からゾンビのような腕が飛び出し、地面を這いずり回る。やがて真のほうへ向かってくる。

「黙れ！」

真の命令はまだ受け付けない。

普通、烙印では体に変化は起きないはずだが、アレスの霊力が安定しないため、奇妙な形に変形してしまっている。

「ヤメロ、キエタクナイ、ヤメロ、キエタクナイ、…」

京平、早く、早く戻ってきてくれ…
一人じゃ…寂しい、心細い。

暗い、絶望しそうな空間の中、俺は意識を集中させていた。桜井に桜井を思い受けべろ…この空間を満たしているのは彼女の霊力、すなわちこれは彼女そのものだ。ここに真の烙印の力、絶対服従でこの霊力を操作する…桜井を再構成しなければならぬ。しかし人を記憶で一から百まで創るのは無理だ、それならば『思い出』を使う…俺の体、心が覚えている彼女を思い出せ…

桜井、

優しい瞳、

艶があり短い髪、

握っていると暖かい手、

俺を安心させてくれる透き通った声、

そして何より、俺や他の友人に向けていた気持ち、

俺が…俺のすべてが覚えている彼女の思いがとめどなくあふれてくる。

そうだ…彼女、桜井優希はそういう人間だ。

俺の手は、絶望のような…大事なものを失ってしまったような空間の中、自分自身の大事なものをその手で掴んだ。

「もう…限界か…？」

真はもう十分以上も一人でアレスを拘束していた。

命令はまだ受けない。アレスはそれでものた打ち回り、もう人型とは認められない体を振り回し、飛び出た一本の腕で真の足を掴んだ。

「離れる！」

真は烙印を通して命令するより、自身の足で蹴り飛ばした方が早い
が、それをすれば烙印の拘束が途切れる可能性があるので、アレス
を離す事ができなかった。

そんなアレスの体が、ブクブク沸騰する水のように膨張し始め、黒
い煙を上げ始めた。

彼の胴体であった場所から、人型が浮かび上がり、分離を始める。

浮かび上がったのは、子宮の中の胎児のように体を丸めた桜井の姿
であった、と同時に後ろにもたれていた京平にも意識が戻り、彼が
無事桜井を救出できたことを意味していた。

「京平！、」

無事に帰ってきた彼は、少し疲れたような、でも得意げに笑ってい
た。

俺はあの空間で、桜井の手を掴み必死で引っ張りあげた。

それだけだった、烙印を頼りに脱出し、意識が元の場所に戻ってす
ぐまた真に霊力を送り始める。桜井は、完全にアレスの胴体であっ
た場所から吐き出され、意識は無い様だが命は無事みいだった。

「消える」

真が一言。

それだけで、アレスは動きを止めた。

「オオオオオオオオオオオオ……」

最後に獣のような雄たけびを上げ、アレスは終わった。まるで石膏像のように固まった。

「終わった…のか？」

俺は真を離す、すると真はその場に倒れこんだ。

「大丈夫…すこし、力を使いすぎたようだ」

真は、敵を失い、元の…子供の姿に戻った。

終わった。

精神的に長かった戦いを終え、俺はもう気が抜けていた。その瞬間。

「オオオオオオ！！ コロス、クロス、クロス、クロス！！」

アレスが、動き出した。

まだ奴は完全に消えたわけではなかった。それなのに真と俺は烙印を解除し、終わったと思いついていた。そして真はもう力が使えない、それにアレスが動いているのに、真は子供のまま、アレスはもう敵意が無いのかもしれない。ただ本能のまま暴れるだけ。

「真、おい！ 真！！」

俺の叫びも虚しく真は起き上がることすらできない、そうしている間にもアレスはこちらに向かってくる。もう俺しかない。

俺は、先ほどアレスの顔を殴った。その時は効いていた、それならば今でも十分効くはずだ。

少しは喧嘩に自信があるんだ。もう殴り合いしかない。

「くらええええ!!!」

俺は序所に元の人型に戻りつつあるアレスの顔面らしき部分を殴った。

拳が壊れるぐらいに本気を出して。

「クロスクロスクロス!!!」

アレスは確かに顔が割れ、効いてるはずだが、体勢を変えず俺に殴りかかる。

彼の拳は重く強かった。

疲労感がある俺は耐え切れず、そのまま倒れこむ、その隙にアレスは俺に覆いかぶさり、そのまま殴り続ける。これほど重いパンチは初めてだ。体中を何度も殴られ、意識が無くなってゆく…

もう…ダメだ。

殴り返す力も…無い。

終わるのか…?

アレスが、顔のような部分を開き、黒い煙の中に俺を吸収しようとする…

その刹那。

黒い閃光がどこからか突き刺した。

それはアレスの胸元に、ちょうど俺に当たらず突き刺した。

喰らったアレスは真後ろに吹っ飛び、灰のような物になって消えた…と思う。

…俺の意識も闇に落ちていった。

第二十四話 「余韻」

俺は目が覚めた。
ハッ、と覚めた。

「え〜つと…ここはどこだ？」

そこは俺の知らない場所、どうやらどこかの家の一室らしい。かなり漠然としているが、俺の記憶にはここに来たことはない、しかし俺はその部屋の折りたたみ式で硬いベッドに寝かされていた。

部屋は、夏休みしか実家に帰らない大学生の部屋みたいな感じで、薄く埃かぶり必要最低限のものしか置かれていない。

「おーい、真？」

俺は必死に記憶を呼び覚ます、確か…アレスに最後の最後で殺される寸前だった、だが何者かの黒い閃光によってアレスは吹き飛び、そのまま俺の意識はブラックアウト。

部屋を見回しても真の気配は無いが…まさか真が消滅したわけではないだろう。

それに桜井が無事だったのかどうかも気になる…こんなところで寝ているわけにはいかないか。

「とりあえず…部屋を出てみるか」

誰もいないので、自分に断りを入れるようにつぶやく。そのまま部屋を出ようとドアに手を掛けた瞬間、ドアが開け放たれた。

ドアをくぐってきたのは、長身長髪で、服は全身をロックに固め、インディーズのバンドやってます、と言うかのような雰囲気だった。…って言うか誰？

「あの…」

なんだか状況が理解できない俺に、男は気軽に自己紹介を始めた。

「ああ、私は、桜井涼だ、よろしく」

桜井さん…？ということは。

「ええと…桜井のお兄様でよろしいでしょうか？」

なぜか俺は申し訳ない気持ちになった。

「ああ、そつだ。そんなことより今回の事件の話だが…破壊者は無事、消滅したようだ」

桜井兄改め、涼さんは、どうやら霊やらに詳しそつだ。

「あの…あれからどうなつたんですか？」

聞きたいことはごまんとある。全部今説明して欲しいぐらいだ。

「ん…？ とりあえず警察やらが来る前に君達は保護した。面倒はもう避けた。それで君達の守護霊は…真は無事だ、霊力を消費しすぎただけで疲れているだけだ。今は私の守護霊が面倒を見ている。」

涼はどうやら真のを知っているかのようだ。
それにしてもまたとんでもない事件に巻き込まれたものだ。われながらこの三日間でありえない密度があつた気がする。

「え…一応効きますけどヴァリ工は…？」

たしか散々傷だらけになつた拳句、アレスの烙印に吹き飛ばされ
たはず。

「安心しろ。奴は強い、今も修復中だ」

…どこか毒がある言い方だが、お兄様と守護霊の関係は良好ではないらしい。今は関係ないが。

「ここは桜井家ですよね？」

もし、「いや、ちがう」といったら少し驚くが…

「そうだ、優希は下で寝ている。…彼女はまだ霊は見えないらしい」
下、と言つのは下の階のことで、ここはおそらく二階。一軒家だ。

「それでいい機会だから君に言っておく…真のことだ」

そう聞いて俺は少し胸をなでおろす。もし、妹に手を出すな。と言われたら走って逃げ出すところだったぜ。

「真がどうかしたんですか？」

気が抜けていた俺に少し重い話だった。

「真はもともと別の人間の守護霊だったのは知っているな？ たまたま主をなくし、この世を彷徨うだけになった彼女を保護したのは私だ」

そう、真は今から2、3年ほど前に、同じく守護霊をなくした俺に憑く事になった。

「保護？」

「そうだ、仮の主…とでも言えば良いかな？ その時、たまたま守護霊がない少年…君の事だが、君に憑けた」

それは初耳だ。

「何か問題あるんですか？」

聞いたところそれほど深刻でもなさそうだが。

「いや…気をつける、以前の主がフラッシュバックする恐れもある…まあ、今の君には関係ないか」

なんとも齒切れが悪いが、仕方ないのだろう。そんなことより聞

きたいこともある。

「あの、俺、アレスと戦闘中に俺の意識が飛んで…勝手に体が戦ってたんですけど」

急に体に何かが憑依したような感覚。今思い出すと恐ろしい。

「うむ…真から聞いたが、あまり気にしない方がいい。もし頻繁に起きるのであればまた私に言ってくれ」

頼もしかった。真以上に霊に関して詳しくそうだし、桜井の兄と言うこともあつて信頼できた。

「じゃあ、俺もそろそろかえらねえと…」

時計を見ると、もう事件の日から翌日になっていた。というか親は知っているのだろうか。

「ああ、お母様には連絡を入れておいたよ。それと、真は明日まで私が預かる。もちろん回復のためだ」

この人がどのように親に連絡を入れたのか気になるが、真がいなえと言つのは、もし悪夢に襲われたらどうするのだろうか。

「そこで私の守護霊、ネイレスを貸してやろう」

守護霊は貸し借りして良いのか？と言つ俺の問いに「一日なら平気だ」と根拠も無く答えた。そして問題は涼の守護霊ネイレスさんは、妖精、が似つかわしい大人の女性だった。妖精の癖に魅力たっぷりな彼女は俺に変なプレッシャーを与えてきた。

「よろしくね、京平君」

その言葉だけで、もう俺は…

「は、はい、よろしく…」

家に帰ってからも落ち着くことはできなかった。

夜、俺の親はなんとも言ってこなかったが、明日からはまた学校がある。

なぜだかすぐくだるい…

「じああ、おおやすみ、京平君」

ネイレスさんが陽気に言った。

俺はふと思い出したことを聞いた。

「そういえば最後の最後、アレスに黒い閃光を放ったのはネイレスさんですよね？」

何気なく聞いた。黒の閃光は彼女に似合わないと思った。それだけだった。

「え？黒い閃光？ えーっと、私達が助けに行った時はもう全部終わっていたんだけど…」

なに？それはどういう…

「それに私の力は、精霊の歌っていう声を武器にするのよ。閃光は出せないわ」

いったい誰だろう。あの閃光を放ったのは。おそらく真は見ていないだろう。俺しか見ていない…まあいいか。と俺は睡魔に白旗を揚げ、あっさり眠りについた。

第二十五話 第四章 「冬の日からのレクイエム」

本日、二月十三日。

真と出会ってからの三日間は不思議なくらい充実していたが、それから約一ヶ月が経過した今日、いつも通りの平和な日常が俺には戻ってきていた。

いつも通りの肌寒い教室で、昼食を取っていた。

「そういえば秋元、明日何の日だか知ってるか？」

俺の前には、なぜか机をくっ付けてきた秋元がコンビニの即席な愛情が詰まった弁当をおいしそうに頬張っていた。

俺はそんな秋元の間隙について、となりの窓際に腰掛けている真の口にプチトマトを放り込んでいた。

「明日？ もしかしてお前の誕生日!？」

秋元は大げさなりアクションで、「いや、お前の母さんのか!？」とかほざいている。

正直、アホだろ...こいつ。

「バレンタインデーだよ」

俺は素っ気無くそういつてみたが、別にこれは秋元に変なフラグを立てようとかそんな気はまったくくない。

「あ!、そっかあ、いや俺マジで忘れてたわ。うん。完璧に存在が消えてたわ」

秋元も秋元で小学生みたいなことをほざいている。

「それでさ、春先ごろにさ、約束したよな？」

俺はこの日をずっと待っていた。

いや、別に春先に立てたフラグを今回収しようとかそういう意味ではない。

「え？…マジ？」

秋元はきつと覚えているだろう、いや絶対。

「賭けしただろ。どっちが多くチョコもらえるかって」
もちろん俺も最近思った。…少なくとも秋元よりはもらえそうだと。

破壊者アレスの一見の後、桜井は特に守護霊とつながりを持つことも無く、普通の生活に戻ってきている。ヴァリエの修復も完全に出来たので一安心だ。

「敗北者は…例の×ゲームだろ…？」

秋元に俺はうなずいた。

その放課後

「ねえ京平、ばれんたいんでーって何？」

真が俺の耳元に囁いた。

真は俺に出会う前からこの世には存在していたはずだが、人間の文化にはなじみが無いらしい。

しかし、男がバレンタインデーについて解説しているのも、なかなかものなので、どうにかごまかすことにしよう。

「なんだろうな…ローマ皇帝の迫害下で殉教した聖ウァレンティヌスに由来する記念日…かな？」

俺はなんとなくて答えた。合ってる保証は無い。

「ふーん」

真はそれでも納得したようなのでまあいいことにした。

その後、俺は家に帰り、特に何も無かったのでテレビを見ていた。おもに守護霊とは主と行動をともしなければならぬので、真も俺のとなりに座っている。

…この時期、どのテレビもバレンタイン特番だなー

ブブブブブ…

常にマナーを守るはずの俺の携帯が、うざったいバイブレーションと言う名の発作を引き起こした。

どうやら電話…しかも桜井から。

でないはずが無いぜ！

「はい、もしもし…」

さまざまな期待を込め電話に出た。

「お、金城か。俺だ、涼だ」

…正直、キれるかと思っただけ…だが俺もそこまで子供じゃないさ。

「で、なんか用っすか」

この人は用がないと連らくしてこない。

「うむ。実は先日の事件の話が…」

先日の事件、とはもちろんアレスがショッピングモールを占拠した。という事件だ。あの後、少し新聞に載ったが、犯人は不明。悪質なイタズラ！？ということとで自然消滅した、ここに何か陰謀を感じる俺だったが、これは良い意味で捉えるべき事柄なのだろう。

「とりあえず私に会いに来て欲しい……家は無理らしいから喫茶店

でどうだ？」

あれ以来、桜井家（涼の部屋のみ）を何度か訪ねた。彼は霊に関して詳しく、またそれ関係の調査のサークルに参加していて、何人かの仲間と情報交換しつつ記録をとっているらしい。俺は結構情報を引き出されたりしているが。

「わかりました」

冬の街を喫茶まで行くのは少し面倒だが仕方ない。

「真、行くぞ」

熱心にテレビを見ていた真の肩を軽く叩き、家を出ようとするが、玄関の手前辺りで母親に呼び止められた。

「またどこか行くの？ 早く帰ってきなさいよ」

この母親は女手一つでわが子を育て……云々。とにかく俺も感謝はしている、しかし父は中二のときまでは居た、そこからいろいろあって居なくなってしまった。

「ああ、気をつける」

シヨップングモールの時、必要以上に心配した彼女だった。当然、たった一人の家族なので心配しないはずが無い。俺も好きで事件に巻き込まれているわけではないからな。

そして家を飛び出した俺はさっそく後悔した。

「もっと暖かい格好してくりゃ良かった……」

せめてマフラーでも巻いて来ればよかった、と思いつつ、約束の喫茶を目指す。隣を歩く真は代わり映えしない格好で、寒さは関係ないらしい。霊だもんな。

「やあ、わざわざ悪いね」

喫茶店に入ると奥の席、四人掛けのところに一人で座っている桜井涼が居た。本当はその隣に守護霊のネイレスが居て、これから俺と真が掛けるのでちょうど言うわけだ。

「あー寒かった。暖かいものが飲みたいなあ」

「ははっ、じゃあコーヒーで良いかい？」

当然のように代金をコーヒーで済ます。俺としては話をするだけで楽だが、また寒い街を歩くのでプラマイゼロだった。涼は大学ノートを開き、ペンを構えて話を始める。

「事件の時、言ってたよね？ 意識が薄くなり勝手に体が動いたって」

確かに、あの時そういうことがあった。俺は何をしたのかよく覚えていなかったし、戦いに使った霊力がどこから湧いてきたのか見当もつかなかった。そのことなら真の方が、傍から見ていたのでよく覚えていると思うが。

「その状態はね。我々は憑心状態と呼ぶことにした」

「ひょうしん？」

我々というのは涼が参加している霊関係の調査のためのサークルだろう。

「つまり、守護霊以外の第三者の霊が人間に取り付き、心……精神を操作することだ。これは今までもある行動だった、霊媒師とか知ってるかい？」

霊媒師、とは簡単に言えば霊とお話ししたり出来る人だ。少なく

とも数ヶ月前までは胡散臭いなあと思っていたが、霊と関わって意見が変わった。セコイなあって。

「で、それが今回はそうしたんですか？」

「うむ、今回は霊媒とは違ったこと……つまり霊力を駆使した戦闘行為をした、ということだ。もともと霊を構成しているのは霊力だ。自身の体の維持に霊力のほとんどを費やしている、それから余った霊力を戦闘などに使っている。だが、人間に取り付いた場合、体の維持に霊力を使わなくてもいい」

「莫大な霊力を持つ人間になれるってことですか……」

「正確にはなった。だけどね、君の場合」

涼は真剣、というよりは推理小説のトリックを解説しているような楽しそうな顔で言った。たしかに俺は、アレスとは比べ物にならないほどの霊力を持っていた……気がする。

「そこで問題は、どうしてその状態が終わったのか、ということだ。そもそも体は人間なのだから精神的要因か、もしくはただ単純に時間制限があつたかもしれないということか。どうか？ 真、いったい何があつて元に戻った？」

俺は確か転んでいたような気がする。そんなことより……

「……………はい？、え？、」

真の顔がみるみる高揚していく。守護霊も赤くなったりするんだなー、でもなんでだろー。

なぜか一人修羅場な真であった。

第二十五話 第四章 「冬の日からのレクイエム」 (後書き)

大変遅れました。これからもたぶん遅れます(え

季節感もぶち壊していますが、・・・

とりあえず物語の中で第一話での時期は投稿日と同じくらいと考
えていただければいいかなと思います。

第二十六話 「vs秋元、勝負の日」

少年は見下ろしていた。

電柱に添えられた花束を。

彼は理解できていない。この車通りの少ない田舎道で、夜になると街灯もろくにつかないような場所で起きた事件、交通事故だった。高校生ぐらいの学ランを着た少年はじっと花束を見下ろす。

信号は青だった。被害者は音楽を聴いていたわけでもない。まして不注意なんてなかったはずだ。目撃者も居ない。犯人も……居ない。

「どうして……」

少年は涙を流すこともなくただ、見つめる。1つだけの、花束を。

「理解できないのですか？」

不意に後ろから声が掛かる。少年は振り向くとそこには、真っ黒のスーツを着た二十代ほどの男が立っていた。男は、まさに就職活動真っ最中です、とでも言いたげなフレッシュな感じだったが、映画のマフィアが着ているような黒いスーツが不自然だった。

「あなたは……？」

少年は胡散臭そうに男に聞く。

「死神です」

男はそう答えた。

「ははっ、サイコーだ、僕はとうとう魂をとられるんだね」

「ふふっ、どうでしょう」

誰も居ない田舎道の道路で、二人は不敵に笑いあう。

真の顔が赤い。

「どうした？　なんかあったのか？」

俺は今、喫茶店で涼と先日の事件について話している。俺の体に起きた異変、何者かが「憑心」と言うことをした。そしてそれはいつた何が原因で元に戻ったのか、という話だった。俺は当然意識が薄れていた、夢のようなぼやけた記憶しかない。そこで傍から見ている真に話を聞いているのだが……

「えっと……突き飛ばした、」

そういえば、俺の意識がはっきりすると転んでいたような気がする。するとそれがきっかけで俺の中に取り付いていた……憑心していた霊が出て行ったというのか？

「それだけの衝撃で？」

涼もやはりそのことが気になるようだ。俺も気になる。確か……よく覚えているわけではないが、激しく戦闘していたはずだ、それなら何故真に突き飛ばされた程度で霊が出て行ってしまったのだろうか。

薄暗い喫茶店の一番奥の席で四人席を二人で陣取っている俺と涼は二人で黙りこくる、真はまだ顔が赤く、ネイレスは何も言わない。店員が男二人で黙っている俺達を訝しげに見つめ、コーヒーがぬるくなり始めた。……涼はハッ、と気づいた。

「もう帰ってもいいぞ、うん。ありがとう、……あと気をつけておけ。靈力を増した悪夢……思考を持つような奴らが多くなってきた。まあお前と真なら負けることはないと思うが……アレスの事もある、用心は怠らないことだ」
そう忠告した涼は伝票を持って喫茶店を出て行った。

「俺らも行くのか」

独り言のように真に言っただけで俺も店を出た。店を出た途端、冷たい風が俺を襲った。肌が鳥肌が立ち、体がブルブル震えた。

翌日、目覚めた俺は夢を見ているらしい。

何故かって？ 朝っぱらから俺の目の前には涼の守護霊のはずのネイレスが居て、……（俺が勝手に）誘惑されている。

「あ、あの〜？」

恐る恐るネイレスに声を掛ける、

「ああ、目が覚めたのね。おはよう、真ちゃんは用事があるって涼のところにいるわ」

ネイレスはドギマギしている俺をほっとして余裕の表情で部屋から出て行ってしまった。俺は、いつか真もこうなるのだろうか。と、いっとうでもいいことをぼんやり考えながら布団から這い出し肌寒い廊下に出た。俺の部屋は二階建ての我が家の二階部分にある。二階建てと言えばお金持ちに聞こえるかもしれないが、築何年かもわからないぼろ屋だし、土地も狭い。

「あー、今日は14日か……」
少し期待が持てそうだ。そう信じたい。

登校途中、俺は肩を下ろして歩く秋元を見つけた、

「よお、どうした色男」

俺は陽気に秋元の肩を叩く。

「……ふっ、俺だって……」

虚しくなるような寒さの中、俺と秋元は男二人で学校に向かった。

……一応ネイレスも居たけどね。

「くあ……」

こうなると授業は退屈だ。真はいないし、秋元はブルーだし（何があったかは知らんが）しかも陰湿な数学教師、榎本の授業ときたもんだ。

学校の授業が半分ほど終わった昼休み、俺は購買に行く途中で大竹に出くわした。

「おっ、金城君はつけくん！！ ハイこれ、優希から」

俺が理解する前に大竹が押し付ける、紙袋。

「お、おう」

真がいなくてよかった、どうしてこう思ったのかな？ そう心中の混乱がある俺をほっといて大竹は行ってしまった。別に追いかける必要はない……っとその時、視界の端に秋元が映った。よし、さっそく戦果を報告し……

「あ、……秋元……」

あいつ、やりやがった。奴の手には手紙が三通ほど抱えられている。普通の手紙ではない、あれは……あの淡いピンクとコバルトブルーの封筒に包まれたあの手紙はまさか……！？

幸い、奴はまだ俺に気づいていない。後ろに居るネイレスの疑うような目を気にせず俺は奴の尾行……ストーキングを開始する。

学校で告白と言えば校舎裏なのだろうか。秋元はホイホイ呼び出しにつられていた。その後ろを俺が期待と不安に満ちた表情でつけている。実際、超美人だと俺は本気で嘆くかもしれない、が、その反対なら本気で笑い飛ばしてあげよう。それが俺と秋元の友情だ。

(いったい……どんな奴何だ、)

不安……でも愉快なことになりそうなことは気づいていた。

と、不意に秋元が立ち止まった。俺の位置からでは相手の顔が見えないし声も聞こえない。ちょうど校舎の角を利用した位置で見えないように俺はいる。

「(ネイレスさん、ちょっと見てきてくれます?)」

こういうときに守護霊は便利だ。特に断る理由もないネイレスは、そつと角を曲がった。そしてフツツと顔が曇った。

「(ど、どうしたんすか!?)」

俺は……もしかしたら……

「こっちにくるわよ」

ネイレスがそつと言っ。

「は!?!」

俺と秋元がちょうど角で鉢合わせになった。

「よ、よう」

秋元の手には手作りと思われるチョコが三つ。終わった。俺の人生、秋元に敗北で……

「ああ、今回の賭けは引き分けにしよう、な?」

秋元は俺の手に握られた桜井からの送りものを見ながら言った。

「え? な、なんでだよ……数ではお前の勝ち……?」

俺は悟った。それでも秋元は勝ちを認めたくないらしい。

なぜなら…… from boy だったからだ。

つまり男からもつらつたらしい。

あー、つまり『』な感じだ。

校舎裏の奥にはいい体つきの大男と、いかにもなよなよしている小柄な男が二人。

アツい感じだった。手作りタオルに『秋元様』と書いてる。

……正直、俺に笑い飛ばすことは出来なかった。

第二十六話 「vs秋元、勝負の日」(後書き)

えー、今回と次回ぐらいで余談編は終わり、さっそくこの物語の中心核に入っていきたいと思います。

それからしばらくガーディアン一本で行きたいと思います。どうもすみませんでした。

第二十七話 「その夜、三日月」

俺と秋元はげんなりしながら廊下を歩いていた。その理由は簡単、バレンタインデーの間抜けな賭けをしていたら予想外の結果だったからだ。まさか男から人気があるとは思わなかったぜ。

「このことは黙ってやるよ」

俺は肩を落として俺の隣を歩く秋元に言った。秋元は賭けでは勝利したが、それを認めると取り返しのつかない領域に片足を突っ込むことになりそうだった、……正しい判断だと思う。

「なあ……俺……」

「安心しろ、お前が両刀持ちだったと言うことは俺達だけの秘密だ」

「……なんか勘違いしてないか？ お前」

「おーい、真？ ネイレスさん？」

その夜、俺が風呂から上がった、大体午後10時くらい、俺の傍には守護霊さんたちは居なくなっていました。真は朝から、涼のところで『用事』があるらしい。今までも涼から真に用はあったが、その時は俺も一緒に行く。俺が居てはいけない理由があるのだろうか。

(となれば……あの事件の時のことか？)

何度もくどいようだが、アレスの戦闘時、覚醒的に力を発揮した俺は何か霊的に特別なことが起きていたらしい。それが何かかわかつ

たのだろうか、そして、俺が知ってはいけないような秘密があるのか。

(ちょっと待ってくれよ……)

これでもし、俺一人の問題で済むならまだいい。しかし俺が力を暴走させ、なにか破壊行動を繰り返すようなことになったら……これはもう個人の問題ではない。

急に不安になってきた。今すぐ真が帰ってきて欲しい。かといって今から桜井家を訪ねる勇気もない。

俺はどうしようかとうろろしていた時、部屋の奥、窓の方から物音がした。軽いものを置くような。

「真？」

俺はなんとなく焦り、そして開け放たれた窓辺には包装紙に包まれた平べったい箱が置かれていた。

(こ、これは……まさか……)

まさか……いつの間にか(？)真にフラグが立っていたのか？期待で胸が膨らみ、そうかそうかと納得する。これはいままで涼のところでがんばって作っていたんだな、そして面と向かって渡しづらからこんな回りくどく……ああもう。

俺は包装紙を綺麗にはがしながら、ときどきしながら、箱を開けた。

バツシイイン。

俺の顔には、烙印の張り巡らせたぬいぐるみがアッパーを決めて

いた。

「……………」

「あはははっ、京平、本気で引つかかった」

窓から真の愉快な笑い声が聞こえてくる。俺の手元にいた…よく見るとくまのぬいぐるみが、俺の胸板にパンチしている。

「…………真？」

「あははっ、ん？」

「このやるおおお……………」

俺は逆上して真に飛び掛るのではなく、部屋の隅にかがみこんでいじけた。

「あああれ？ ちょっと京平、冗談だつてばー！？」

…しかし、そこで『これが本当のチヨコだよ』ってこなかった。すこしガチで悲しい京平であった。

、一方

「どうしてお兄ちゃんはそんなに失敗作みたいなチヨコを食べているの？」

「さあ？ どうしてだろうな……………」

少し疲れた涼だった。

夜になると街灯もつかないような田舎道。電柱の足元には一束の花が添えられている。そんな夜の中、静寂に包まれた空間に二人の男が向かい合う。

「死神か……嫌いじゃないよ。そういうの。でもな、僕はもうそんなのはどうでもいい」

学ランを着た高校生ぐらいの少年。彼は死神と名乗る不気味な男にも、何の警戒もなく接する。もともと彼自身も相当怪しいからかもしれない。

「ふふっ、人間が想像したものと程遠いですけどね。そんなことより貴方、欲しいものがあるでしょう？」

顔は若く、髪も長い死神は、全身を黒いスーツで固めている。顔には不敵な笑みが張り付いていて、べったりとした空気を爽やかにするようにも見えた。

「君、……何が言いたい？」

少年は、自分が考えていた事とは違うことを言われ、少し戸惑った。しかしこの死神はそこまで悪人には見えなかった。かといって善人にはありえないが、善悪の天秤の均衡を保つ。そんな役割をしていそうな雰囲気だ。

「命を。よみがえらすことが出来るとしたら？ 貴方はどうしますか？」

「……ふふっ、面白い。聞かせてくれよ。その話」
死神がいつそう笑みを増し、少し歩く。

風が吹いた。田舎の木々や山を風が揺らし、音を鳴らす。空は雲が流され、その隙間から月が顔を出す。漆黒の夜にたたずむ二人は月明かりに照らされ、お互いの表情を伺う。
そこからは……何も読み取れない。

「今日は三日月だ……」
死神がつぶやいた。

第二十八話 「転入生」

時は流れ、春。俺は期待に胸をときめかせ……る事もなく、ダラダラと学校へ向かっていた。今日は四月の初め、始業式だった。無事、進学を遂げた俺は今年もう遊んでいられるのも少ないか、という部活にも所属しない俺がいうのもあれな事を思っていた。事実、この数ヶ月間でもんでもない体験をこなしてきた俺だが、最近はずっと日々が続く、頭のねじも緩んできていた。

始業式では学生なら誰でもときどきするイベントがある。

クラス替えだ。玄関に張り出されたでかい一覧を見ていた。

「よお、京平、今年も同じクラスだな」

秋元が俺の肩を叩く。なんというか、何者かの陰謀を感じる。ちなみに他の面子は、桜井と大竹が俺と同じクラス、谷木は隣のクラスで、……もうご存知の方もいないだろうが山下と川上と言う他二名も存在していたのだが、奴らはどっかのクラスだ。もう出てくることもないだろう。

「いいから早く教室行こうぜ」

俺は秋元にそう急かし、真を連れて三階上がった。一年は二階、二年は三階、三年は四階と言う風に決まっている。その中で、俺は二年二組だったので、三階の手前から二つ目の教室に入った。中にはまだ半分も来ていなく、桜井や大竹の姿も見えなかった。とりあえず自分の席を見つけ、おとなしく座る。

しばらくすると他の生徒に紛れ桜井たちが入ってきた。こっちを見つめ、目が合い少し微笑む。なんか……生きてて良かった。これが学園生活か……。もうすぐHRが始まるな……。？

皆さんはご存知だろうか。俺にとってはクラス替えでは担任が結構重要なポイントだと言うことを。

「あー、諸君。席に着きたまえ」

偉そう、それに陰湿な数学教師、榎本だった。最悪だ。今年は厄年か

真っ黒な守護霊、國酔は姿が見えなかった。俺は首をかしげていると、横から真が「ただ単にこの教室にいないだけだと思うよ」と教えてくれた。皆の前で真と話せないのが俺は唸るだけにした。

「あー、では諸君に少し紹介がある。転校生だ」

榎本はそういつて戸口に歩いていく。その瞬間、クラス中で「え！？ 男？ 女？」とか「超能力者か！？」とか異常にテンションが上がった声がある。流石榎本。皆のテンションがおかしくなっているぜ。

教室に入ってきたのは、学ランを着た男子生徒だった。この教室の前に立つても緊張している様子も見られない……まあ整った顔をしているな、うん。

「どうも、はじめまして。上谷竜那かみやりゅうなです。勉強や人間関係に早く慣れていきたいですのでよろしくお願いします」

まるで営業スマイルのように微笑んでクラスの喝采を受ける。どうやら転校する事に慣れているようにも見えた。それから、転校生が男とわかって肩を落としている秋元を見た。安心しろ、お前は男でも落せるぞ。

「あー、では金城の後ろに行け」

そう榎本に促されて俺の後ろの席に来る。「よろしくお願いします。金城君」とすれ違いざまに言われ、なんだかリズムを崩されたような気になった。ふと真を見ると、上谷をじっと睨んでいる。

「(どうした？ 真)」

そう俺に言われ、ハッと気が付いたようにこっちを見る。

「いや、なんでもないので。気にしないで」

そういつて話を終わらされてしまった。

後ろで上谷が笑った気がした。

その後、無難な始業式で藤崎が復活しているのを確認しつつ、特に内容もない式を適当にすごした。教室の帰れば、陰湿な榎本が待ち受けているだろう……ああ、いたい俺はどんな悪いことをしたらこうなるのだろうか。

教室に戻ると、十分ぐらいの休憩時間がある。そこで、学生達は始業式で凝り固まった体をほぐすことになる。するといきなり秋元が声を掛けてきた。

「なあ、京平、隣のクラスにも転入生がきたらしいぜ。しかもめっちゃかわいい女らしい」

秋元が妙に元気になっている。しかも俺の腕を引っ張りながら。

「ああ、わかったよ。一緒に見に行こうって話だろ？ 仕方ねえなあ……」

転入生の女子なんて、『転入してきた』という話題性で少し目だつて見えるだけだろう。そう油断していた。

隣のクラス、二年三組は、どうやら男子の人ばかりが、周りから

はばれないように出来ていた。どうやら学年中を騒がすような美人らしいな。いったいどんな奴なのか。

「制服が違うらしいからすぐわかるらしいぜ」

秋元はどこからかそんな情報を持っていた。目敏い奴め。

「えーっと、どれどれ？」

俺は身を乗り出して教室を眺める。本当だ、すぐにわかるな。ブレザーの中にセーラー服が混ざってりや嫌でもわかる。……ん？

「「あつ!?!」」

間抜けな叫び声を二人でシンクロさせる。それも当然だ、向こうもどうやら俺の顔に覚えがあるらしい。

「何であんたがここにいるんだよ!?!」

「それはこっちのセリフよ!?!」

何を隠そう美人転入生とは、茶髪を長く後ろに流した、以前は特急便の業者のような服を着ていた、そして俺がとばかりで巻き込まれたいぶん前の事件、藤崎暴走事件（命名俺）の時、出会った女。藍那だった。

「お前……またなんか問題起こしたのか？」

藍那、以前はインターネット上に迷惑情報を流し、その嘘情報に惑わされた藤崎がどうのこうので大変だった事件の主犯（？）だ。

「あんた、……ん、ちょっとこっち来なさい！」

そういつて俺の腕を掴み、すごい勢いで引つ張っていく。視界の端には、呆然とした顔の秋元が映る。嗚呼、そんな目をしないでおくれ。

第二十九話 「神の杜」

「で、こんなところに呼んで。何の話だ？」

俺は藍那に腕を引かれ、後者の屋上に来ていた。この学校は実は屋上は立ち入り禁止なのだが、何者かによつて無残な姿に変えられた屋上へのドアが現状を物語っている。そんな屋上のフェンスに寄りかかりながら俺は藍那と向き合っている。

「どうしてあんたがここにいんのよ？」

「愚問だな。俺は数年前からこの町に住んでるんだぞ？」

逆にこっちが聞きたいくらいだ。

「ふーん、じゃあ今回の件とは関係ないんだ」

藍那は退屈そうにつぶやいた。その言葉から嫌な気配を感じる俺であった。

「今回の件？」

俺は藍那に聞き返す。真も関心があるらしく、今までフェンスの外でふらふらしていたが、こつちによつてきた。

「ん、……まあいいか。あのね、最近悪夢が力を増してるのって知ってる？」

そういえば涼がそんなことを言っていた気がする。たしか思考を持つ悪夢？ だったかそんな感じの奴だ。以前、俺が出会ったのは守護霊堕ちの悪夢、だった。つまりその例の力を増したタイプの悪夢ではなかった。

「そいつがこの辺でうろうろしているらしいの。で、調査も兼ねて転入してきたのよ」

「それだけで転入したのか!? 別に出向いて退治すれば良かったんじゃない……」

「いーから! そんなこと。……そうだ! せっかくだから手伝つてよ」

「何で俺が!? またお前のとばっちりに巻きこまれたかねーよ!」
そう自然と口論な体勢に入ったところで八夕と気づく。

「調査?」

個人でそんなことをしているとは思えない、となれば確実に何かのサークルに所属しているのだろうか。

「そ、あたしもサークルに所属してんのよ。ね、協力して?」
なぜだか、そうやって上目使いされると、断るのもためられた。

「しかたねえなあ、まっ俺の街にへんなやつが居座るのも気分が悪いしな。いいだろ? 真」

実際、戦うのは俺ではなく真なのでなんともいえないが、俺の守護霊である以上は、主と行動をともしてもらわないと困る。

「うん。それで、場所はどこのの?」

真もやる気満々……というわけでもないようだが、やってくれるそうさ。

「この街の南端、奉山神社ってとこ」

藍那が言った場所は、この街に住んでる人でも半分は知らないよ
うなひっそりとした神社だった。元々この街では南に山が広がって
いて、昔からある神社だったが、近くの大きな神社でお祭りをやる
ようになってから知名度は一気に落ちてしまった。俺もあんまり行
ったことはない。そもそも俺はこの街で育ったわけではないしな。

「そんなところにわざわざ行くのか……物好きなオバケもいるもんだ」

時刻、午後八時。俺は相棒であるママチャリに跨り、街の南部を目指す。後ろには真が乗っているが、いかんせん霊であるため重さは感じない。乗っているかどうかさえ怪しいもんだ。

俺は何故、わざわざこんな事をしているかというと、当然昼間の約束があるからだ。母親には「外でダチと飯喰つてくらあ」といつてあるので遅くなっても安心だ。しかし、この作戦の唯一の欠点と言えば自費で夕食を買わなければいけないことか。そんなことを考えつつ、しだいに人気も少なくなり、こころなしか街灯も薄暗くなってきた山の尾根が張り出したコンクリートの道を曲がる。その辺りに神社への入り口がある。

「はー、まだ来てねえか……」

待ち合わせは八時半。学生にしてもまだそこまで遅い時間ではないかもしれないが、比較的開発の進んでいない街の南部では、大体の人間は家に引っ込み始める。まして神社になんて来る人間はいない。

神社の入り口には鳥居がある、その脇に自転車を止め、俺は藍那がやってくるのを待った。待ち合わせには五分前になるのが常識だろ……？

「ん、あれじゃない？」

真が指差す方向には、確かに藍那とリリースがいた。

「早かったのね。……なによ、その顔」

「い、いや……別に」

焦った、等とは言えない。増してその理由が、藍那の私服がとて
もかわいらしく見蕩れた、なんて。それもそのはず、俺は今までに
彼女の私服を見たことがなかった。一度は作業服のような（たぶん
宅配便の人をイメージしたと思われる）服で、昼には制服だった。
彼女の性格的にも、おとなしくなんてありえないだろうな。

「さあ、早く行こうかしら？」

リリースさんが一言つぶやき俺達は鳥居をくぐった。神社へと続く
山道は、砂利が敷かれているだけの簡素な造りだ。明かりなんても
のは当然なく、真が灯す手のひらの明かりを頼りに山道を進む。
…少し頼りない炎だが。道を抜けると、少し広がった場所に神社が
見えた。神社は、石畳の道の先に手を洗う手水舎があり、その先は
拝殿と本殿がある。大きさもさほどなく、周りの木々もあまり手入
れされていない。
風が吹き、木々がざわざわ揺れる。見たところ悪夢や、その他怪
しいものはいないようだった。真に異常がないから明らかだろうな
そうなるとこれからどうするべきか。

「どうすんだ？ 何もいないぜ」

「んー、ガセつて訳ではないんだけど……もつと奥かな？」

もつと奥。と言われてもこの先に道はない。一応本殿のほうも見
に行った方がいいが、ここ以外で、来た道を除くと後は社務所と住
宅が一体化したような建物が、少し下った別の道にある。駐車場が
あるため、そっちの方は夜でも明かりがついているみたいだ。

とりあえず、本殿、拝殿を見回したが、怪しい部分は見つからな
かった。本殿は人が入る為に造られていないため、外から眺めるだ
けだった。その質素な外装で、俺は少し地味な印象を受けた。実際、
霊に関係ありそうな場所だが、何もないと少し拍子抜けしてしまう

ものである。

そう呑気に構えていたときだった。フツ、つと音もなく真の弱い炎が消えてしまった。

「お、おい！？ どうした？」

真は確かに、普段は本来の力が使えない。これは真には特例の事情があり、真は元々別の人間の守護霊で、俺には別の守護霊が憑いていた。何かのきっかけでそれが壊れ、残った者たちを寄せ集めたのが俺と真。守護霊が主を変えるとつながりが不安定になるので、一度『転生』することで新たな主に憑く。そのせいで真は本来の力と、現在の力に差が生まれ、敵意を受けると言うきっかけを元に本来の力が使えるらしい。

「大丈夫……なにか別の霊がいるのかも」

「そいつが犯人ね？」

藍那と真が言葉を交わす。事実別の霊、と言うと悪夢とは限らない。真に敵意があれば本来の力が使えるはずだからだ。

「とりあえずここを移動しましょう」

リリスはいつでも冷静だ。そのおかげで安心できる。

しかし、その時、遠くから何者かの明かりが見えた。懐中電灯のように、一直線の光が人の動きとともに近づいてくる。当然、藍那やその仲間には思えない。

「しっ、静かにしろ……逃げろぞ」

「なんでよ！ あいつが悪夢かも知れないでしょ？」

「そんなことはない。悪夢なら懐中電灯はつかわねえし、それに真に反応がない。たぶん神社の管理人だ」

「それなら何で真ちゃんの炎が消えたの？」

「知らねえよ……強い守護霊でも連れてるんじゃないかねえのか？」

「はいはい、そんなことよりもお一人さん？ 例の明かりが消えたわよ」

リリスさんに言われてふと見ると、確かに明かりが消えている。しまった、と思ったその次の瞬間だった。いつの間にか背後にまわられていたのか、肩を叩かれ、明かりが向けられる。

「つて、お前……上谷？」

「おや？ あなたは……金城くんですか？」

神社にやってきた人物は、今日俺達の学校に転校してきた男。上谷竜那だった。

第二十九話 「神の杜」(後書き)

すいません、遅れました。

ついでですが、竜那と藍那の文字が似てますが関係ありません(汗
ただのミスです。ですがこのまま行きます

第三十話 「黒の交錯」

「どうして上谷がここにいるんだ？」

俺と藍那はここに悪夢……いわば悪霊退治のためにやってきた。理由もなくフラフラするにはちよつと良くない場所だ。

「それはこちらが聞きたいです。一応僕はこの神社の神主さんのところに下宿させてもらってるんです。怪しい人影が見えたので確認しに来たのですが……」

上谷は今日転校してきた、そこには何か複雑な事情が見え隠れしていた。それは俺にとってなんとも居心地が悪いように感じられて、話題を変えたくなくなった。

「それよりこちらの方は……？」

上谷が視線を送る先は藍那だった。一応彼らはクラスが違つので面識はないだろう。

「私は立花藍那。たちばなあいなよろしくね」

「ほお……お二人はどのような関係ですか？」

「関係つて、ただの知り合い？」

「ただの知り合いで夜中に二人で真つ暗な神社までやってくるのですか？ 仲がいいですね」

「おいおい、またなんか話題がずれてるぞ」

早く違つ話題に切り替えよう。真がそろそろ不機嫌になってきた。

「この辺でおかしなことはなかったか？」

俺達は悪霊を退治しに来た。ところが悪霊どころか悪夢一体すらいない。藍那の情報を疑っているわけではないが、これは少しおかしい。もし、本当に相手の悪夢が頭脳明晰な奴だしたらこれはも

しかしたら罫の一環なのではないか？ 周りを森で囲まれた暗い土地、こんなところで戦闘は難しいのではないか。

「あなた達を含まずにですか。そうですね……」

考え込む上谷、藍那は退屈そうに、俺は考えているようで実は何もいい案がなかった。そんな油断だらけだった俺達は、もう既に危機的状況だった。

気の木陰から何かが動いた。しかし辺りは真っ暗で、よく見えな
い。人のようにも見えたが、もしかしたらただの犬かもしれない。
ただ、一度何かがいるように感じると辺り一面に嫌な気配を感じて
しまう。ただ風で揺れているだけかもしれないのに。

「……どうやら、見つかったようですね」

上谷が静かに言った。

「お前……何か知ってるのか？」

「逃げてください。悪夢達に囲まれています」

その一言の後だった。あたり一面を覆うように生えていた木の陰から一斉に人が出てくる。静かに、ゆっくりと。しかし全員がただならぬ空気を出していた。上谷が懐中電灯を向けると、気づけば、半径五メートル辺りの円のるように、俺達を中心にして囲まれている。奴らは全員黒服にサングラスをかけ……手には銃のようなものが握られていた。

「包围されてる……リリース？ アレ全部悪夢ね？」

藍那も状況を把握した、つまり既に悪夢たちには囲まれていた。そして思考を持つ上級悪夢は大量の下級悪夢を手下のように従えて

いたのだ。

真が本来の力を取り戻す、姿が大人っぽくなり、手を覆うように炎が灯る。

「始めるよ……京平、走る準備はいい？」

「当たり前だろ？」

ジリジリと敵が作る輪が狭くなっていく、上谷にもそれがわかるらしい。それはつまり上谷も霊的事象に関係……つながりを持っていると言っていることだ。正直意外だったが、今になってみれば普通なのかもしれない。皆、自分が霊が見えるなどは口外しないからだ。もしかしたら馬鹿をやっている秋元も見えているのかもしれない……そんなはずはないか。

そんな油断していた俺の耳元を弾丸が突き抜けた。

見ると、敵の悪夢、黒スーツにサングラス。まるでマフィアをイメージしているかのような集団の一人が手に持った銃のような物の銃口を向けていた。『銃』といっても、一般的に人間が使うものは形が大きく異なっている。ただの鉄の筒に取っ手を無理やりくっ付けたような、普通は鉛球を放つことなど考えられない構造だ。おそらく、銃としての見た目だけが要るらしい。

「貴方達は何者ですか？」

上谷が前に一歩踏み出し、悪夢たちに声を掛ける。今までとは異なった空気を出している彼は、悪夢の銃口に射られても臆する事はない。俺にはまだ上谷の守護霊が見えてはいない、丸腰に見えるから怖い。

「立去れ。立去れ。私達の領域から」

悪夢は、口ごもりながらブツブツ呟いている。こっちに聞かせる意思がないかのように自分の口の中で言葉を発していた。

「(金城君、合図したら輪の欠けた方向に走ってください。僕が奴らをひきつけます)」

上谷が相手に聞こえないように囁いてきた。

「(ダメだ！ 一人じゃ危険すぎる！)」

「(安心してください、見たところ敵の悪夢は霊力が弱い。上手く喋れていないということは、上級悪夢に無理やり洗脳や服従させられているだけかと思います)」

上谷には根拠と勝算があるらしい。ここで口論する意味もないので、しぶしぶ俺も了承する。

「(立花さんも、合図をしたら走ってください。あと、守護霊さんに協力してもらいたいのですが……)」

藍那と上谷が作戦を決め、いよいよ悪夢たちと対峙する。奴らは俺達が話し合っている間も、輪を崩さないが、攻撃もしてこない。

「(3……2……1……) 今だ！」

上谷の合図とともに、リリスが鞭を振るう、その鞭に烙印が張り巡らされ、触れた敵を爆発させる。それと同時に包囲していた悪夢たちが一斉に手に持った無骨な銃を発砲する、弾丸は俺の目では確認できないほどの速度で、四方八方から襲い掛かる。真が一部を防いでくれて、俺はリリスが包囲を崩した方向に全力疾走する……が、何者かに足のくるぶし辺りを掴まれ、バランスを崩し倒れてしまった。見ればリリスの鞭を喰らった敵の悪夢が、その体の半身を焦がしながら俺の足にしがみ付いていた。

真は三人の悪夢に囲まれている。リリスと藍那は周りにはいない。そしてしがみ付いてきた悪夢が銃口を俺の顔面に目掛けて……

攻撃を覚悟して身構えた瞬間、何か硬いものではじくような音がした。

「大丈夫ですか!？」

上谷が焦った顔をして俺を起こしてくれた。その背後にそびえるものを見たとき、俺はもう一度転びそうになった。

「ああ、僕の守護霊、マリオネットです。外見は恐ろしいですが優しいやつですよ」

俺は一目見たとき、マリオネットが守護霊には見えなかった。いままで見てきたのは少なくとも人間らしい外見だった。しかし彼は肩に大きな黒いぼろ布をまとい、ニメートル近い長身で、体には肌が見えなくなるほどベルトが巻きつけられていた。まるでミイラの包帯のように巻きつくベルトは、多種多様の形をしていて、少し御洒落だった。その腕辺りから伸びているベルトには、俺の足を掴んでいた悪夢が締め付けられながらぶら下がっている。

「さあ、早く逃げて。増援が来てるみたいですよ」

言われてみれば、神社の周りを囲う森の中から、そろそろという感じに悪夢が出てきている。よく見れば全員同じ服装はもちろん顔まで一緒だった。

「ああ、こんなところに居たのね、ほら京平、走るわよ！」

藍那に手を引かれ、リリスが切り開いた道を疾走する。その背後からの弾丸を防ぐように真が最後尾に来て、視界の端では上谷とマリオネットが暴れていた。マリオネットは全身を覆うベルトの長さを自在に操れるらしく、リリスの鞭とはまた違った戦いを繰り広げていた。

俺と藍那は、森の中に入り、悪夢たちの追撃をかわしつつ逃げていた。しかしその時俺は気づいた。

「おい……俺達、山の奥に向かってないか？」

第三十話 「黒の交錯」(後書き)

ようやく三十話です。

始めはここまで出来るなんて思ってなかったですねー
まだ続きます。第四章は長くなりそうです

第三十一話 「いざ本殿へ」

森の中は、一切人間が手を加えていないような乱雑なところだった。そこをリリスが先頭に立ち鞭で立ちはだかる悪夢たちを薙倒す、その後ろを俺が藍那に手を引かれながら追いかけて、しんがりを真が勤めている。

敵の悪夢たちは、森の奥の暗闇から依然として湧き出てくるが、それでも最初と比べればましになってきた。

それよりも一番の問題は、神社のある山から降りる方向ではなく、さらに奥に向かっていていることだ。これは何者かに仕組まれていたわけではなく、ただ囲まれてから逃げ出す方向が山の奥でそちらにしか逃げ道がなかったからである。とにかく敵から逃げるためには、走るしかないのだが。

逃げ出す過程で上谷とはぐれたのが惜しい。山道は街灯などないので基本は真つ暗闇になるが、真の炎があるおかげで、進行方向の一メートル先までは見える。だが、足場の悪い森の中、どこに潜んでいるかもわからない敵に警戒しながら進むのは困難な状況だ。それに道なんてものは当然なく、自分達が今どこに居るかもわからない。

リリスが、いきなり木陰から飛び出した悪夢の顔面に鞭を食らわせたところで、真が叫んだ。

「待って、後ろから追手が来てない。撒いたのかな？」

言われて振り返ると、確かに敵の気配はない。少し安堵したのか、藍那が俺の手を離し木にもたれかかった。

「どうする？ 下手に動くのも危険だけど」

藍那はそういって携帯電話を取り出して画面を見た。が、すぐに

溜息とともに仕舞ってしまった。どうやら山の中で圏外になっているらしい。俺はというと、特に打開策も思いつかず、その場をぐるぐる歩き回っていた。

悪夢が大量にこの山に潜んでいたということは、必ず何かあるはずだ。少なくとも、藍那が所属しているサークルで言われている『思考を持つ悪夢』、いわば上級悪夢と言ったところか、そいつが潜んでいるだろう。ならばやはりその親玉を叩かなければ、意味がない。

「ボスを捜しに行こう。とにかく上谷と合流しないとな」

上谷には謎が多い。いや、まだ知らない事だ。それを聞きに行かないと……信用は出来ない。

その時、ぐるぐる歩いていた俺は何かを踏んだ。見てみるとそれは先ほどリリースが蹴散らした悪夢だった。よく見るとその顔は……

「うげっ……何だこれ……」

卵の殻のように割れていた。頭蓋骨の中身は空洞になっていて、内部からは滑らかな乳白色の陶器みたいな質感があった。その中心部に明かりのない炎が灯っていた。その炎はどことなく真の明かりに雰囲気が似ていた。

「それは靈力ね。おそらく……この悪夢の本来の形」

横合いからリリースが顔を近づけて囁いた。

「本来の形？」

「そう、この悪夢たち、皆同じ外見をしているでしょ？ それは本来ありえないのよ。人間の顔が皆違っているようにね。だからこの外見は何者かによって作られた人形みたいなものね。それで中に入れている炎は本来の形から無理やり姿を変えられ押し込まれた可哀想な悪夢よ」

「これが悪夢……すごく小さくないですか？」

「どうやら、切り刻まれてるみたいね。これだけ大量の悪夢を作り出すには、1つの人形につき一体じゃ悪夢が足りないわ。一体の悪夢を幾つにも分割して、人形に宿らせるのよ」

そう聞くと恐ろしくなってきた。たくさんの同じ顔をした軍団は、一体を切り刻んでたぐさんの人形に宿らせる。可哀想な悪夢だ。

「こんなところに居ましたか」

辺りの木々を押しつけて、横合いから上谷が登場した。その後ろをぬうつと憑いて来たのはマリオネットだ。どうやら無事、悪夢軍団から逃げ出すことが出来たみたいだが、着ている服にはあちこちに弾丸の傷跡がある。中には直撃したものもある。

「怪我は大丈夫か？」

「ええ、どうやら鉄の玉ではなく霊力を打ち出しているようです。しばらくすれば傷も収まるでしょう」

俺はその余裕な態度から、やはり上谷は霊について素人ではない。すくなくとも俺よりも慣れていることが伝わってきた。

「ねえ上谷君、これからどうするの？」

藍那が話しに入ってきたので俺は話をするタイミングを逃してしまった。まあいい、後で聞けるだろう。そんなことよりも重要なやはりこれからの行動についてだ。上谷にも考えがあるらしい。

「実は、この神社は昔、もっと山奥にあったようです。神主さんの話によりますと、現在の拝殿は人が訪れやすいように後からこの位置に作り直されたとか。」

「で、それが一体なんの関係があるんだ？」

「そもそも悪夢がこの神社に訪れた原因は何だと思えますか？」

「う……（なんで質問に質問で返すかなあ）なんか宝具でもあるとか」

「パワースポットとかかしら？」

「惜しいですね、両方の間と言ったところです。」

「どうということだ？」

「霊を惹きつける何かが、旧本殿にあります。そこからは微弱ながら霊力を放出しています」

つまりそれによつて悪夢はやってきたのか。それに上級悪夢に成り上がったのもその放出された霊力でパワーアップしたと考えればおもしろい話ではない。事実上ではあっているが、俺はどうしても腑に落ちないことがあった、それは得意げに説明している上谷について。

「どうしてそんなに知っているんだ？」

俺はそう一言だけ聞いた。その一言は静まり返った森の中、よく響いた。

上谷は、動揺しているようには見えないが、少し目を細めて表情を固めた。

「そうですね。実を言うと、僕は一度旧本殿に行ったことがあります。今朝朝早くに訪れました。その時は悪夢の大群は居ませんでしたが、一体の悪夢が貪る様に旧本殿の中を眺めていました。もちろんマリオネットに攻撃させましたが取り逃がしてしまいました」
「それで……夜にまた戻っていないか確かめに来たのか」

「必ず奴にはケリをつけたいと思います」

「……よし、じゃあ行くか！」

俺は少しでも上谷を疑った自分が嫌になった。人間である彼が、悪夢を従えるなんて馬鹿げている。そもそも俺達も彼に守ってもらったじゃないか。

俺達は上谷の案内で、暗闇の森に足を踏み入れた。

第三十二話 「破槍」

上谷についていくと、小さな獣道のような所に出た。そこからさらに辿って行けば旧本殿に行くことができるらしい。既にあたりは真っ暗になっていたため、真の明かりを頼りに進んでいった。

「さあ、もうすぐです。十分気をつけてくださいね」

「なあ上谷、その今朝見た悪夢ってどんな奴なんだ？」

「そうですね……容姿は現在、この神社に居る奴らと同じです。言葉は交わさなかったのですが、あまり強力な力を持っているように見えませんでした。しかし油断しないでくださいね」

そう言っ言葉を切った。そろそろ森が開け、旧本殿が見えてきた。敵に気づかれない様に真は炎を消していたが、その必要はなかったようだ。なぜなら旧本殿にある松明に轟々と火が灯されていたからだ。

その中心部にある小さな小屋、旧本殿の上に腰掛けた一人の男。それを取り囲む大勢の悪夢。見ているだけで鳥肌が立つ、なぜなら全員が同じ服装、同じ体、同じ顔だからだ。

俺達は招かれるように旧本殿の輪の中に入る。周りの悪夢たちは攻撃をする気配が見えない。やがて、旧本殿の上に腰掛けた男が声をかけてきた。

「ようこそ。我が闘技場へ。クソガキども」

奴は、確かに周りを取り囲む悪夢たちと同じ顔をしている、しかし彼だけは明らかに違う感じがした。表情に感情があふれている。周りにいるのは、まさに作り物の人形のような固まった表情に対し、オリジナルと思われる奴には、いい意味でも悪い意味でも人間らしさがあつた。

「あなたがオリジナルですか。お願いします、我々は何もしません。帰らせてください」

気持ちを押し殺した声で上谷が叫んだ。俺も出来る事なら早く帰りたい。流石に一体ずつでは弱いものの大量に囲まれば恐ろしい。もう既に囲まれている状況では絶望的だ。

「ふざけんなよ？ 散々人のシマで暴れといて帰らせてくれなんてゆるされねえんだよ！」

目には悪意と狂喜。袋のねずみをどうしてしまおうか。それをじっくり堪能しているのが俺にも良く伝わってきた。ずれたサンングラスが鼻の先のほうに掛かっている。

「だけどな、今の俺様は機嫌がいい。莫大な力を得たもんでな。それを試してみてえんだ」

ねばねばした声を出して奴が言葉をつむぐ。

「どうしたいのですか？」

上谷は、一歩前進しつつ尋ねる。

「俺と決闘しろ。一対一だ」

数では相手が圧倒的に勝っている。もし、周りを囲っている悪夢たちが一斉に手に持った無骨な拳銃を俺達に向けて発砲したなら、その時点でもう俺達はおしまいだ。それなのにわざわざ決闘を持ちかけるのはよほどの自信か。

「いいしよう。僕とマリオネットが相手をします。いいですね？」

最後の一言は俺と藍那に向けて。ここは素直にうなずくべきか…

…？

「いいわ。任せたわよ」

藍那が先に口を開き、決まっちゃった。

「ツヒピア、じゃあそれ以外の奴らは拘束しろ。おとなしくしない

と…… BANG!、だぜ？」

その一言とともに指を鉄砲に見立ててクイツと撃つ仕草をした。俺と藍那、真とリリス、もおとなしく拘束される。拘束と言ってもこめかみに銃口を向けられるだけだが。

俺は目線で上谷を応援し、おとなしく佇んだ。

「俺の名前はヒシカ。まあ一応聞かせてやったぜ？」

「そうですね。出来れば覚えておきましょう」

お互いの一言、それが戦いの火蓋を切って落とすことになる。森が風でザワザワ騒ぎ、それまで沈黙を続けていたマリオネットの大柄な体が動き出した。全身を包むベルトは多種多様で、それらは伸縮自在のようだ。一步前進し、腕を前に差し出す、そこから巻きついたベルトが伸長し、幾本ものベルトが1つに巻きつき、図太い槍のようなものを作り出す。

ベルトの槍は、依然として旧本殿の上で余裕を持って腰掛けているヒシカ目掛けて直進する。だが、当然、直線軌道の攻撃では簡単に回避されてしまう。真上に跳躍するだけでマリオネットのベルトの槍を回避、槍はそのまま旧本殿に直撃し、バラバラに崩してしまっただ。

「ヒーツハア!!! いい威力だア! 当たればなア!？」

宙を舞っているヒシカは、周りを囲う悪夢たちと同じように、鉄の筒に無理やり取っ手をくっ付けたような無骨な銃を構えている。

弾丸は出ず、靈力を打ち出しているようだが……

ヒシカが銃から放った物は、弾丸でも靈力の塊でもない。

電撃が迸った。

「なっ!? マリオネット!」

咄嗟に上谷がマリオネットに指示をする。青白く迸る電撃は、真っ直ぐ上谷を狙っていたが、マリオネットが指し伸ばしたベルト、

その先端についている金具が避雷針のような働きをして電気を誘導する。結果的には上谷は攻撃を回避したのだが、変わりにマリオネットがダメージを負ってしまう。

「カカツ、愉快愉快！ 俺の銃はなア、『撃つ』動作さえあればなんだって出来るんだぜえ？」

着地したヒシカが、その顔を歪ませて笑っている。彼の言葉、おそらく語弊があるだろう。何だって出来る訳がない。

電撃を身代わりに受けたマリオネットだったが、何事もなかったかのように立ち上がった。

そう、まだまだ勝機はある。

「さあ、シヨーはこれからだぜえ！？」

「少し黙っていただけませんか？」

上谷が怒りを込めて言った。

「どうしたあ？クソガキい、いまさら何を怒ってやがる？」

「さあ、あなたにわかるでしょうか？」

「あんだとう？」

「そうですね……こういうことです」

一瞬、上谷が俺にウィンクしたような気がした。

「伏せる！！！」

上谷が叫んだ瞬間、俺と藍那、真とリリスが体勢を低くする。その刹那、頭上をベルトの槍が通過した。見れば、マリオネットの腕がそのまま伸びたかのようにベルトの槍が二本、両手を真横に広げる形になっている。そしてそのまま回転していた。半径5、6メートルはあるかという円が、マリオネットを中心に出来ていた。俺達を拘束……といってもこめかみに銃を当てていた奴らは反応が遅れ、マリオネットの駒のような回転に巻き込まれていた。

「貴様らアアアア!!」

ヒスカがマリオネットの範囲に巻き込まれない位置でほえていた。

「さあ、ショーを続けましょうか」

第三十三話 「一撃」

「貴様らアア！ 打ち殺す……ぜってえ打ち殺す！！」
ヒシカが額を押さえながら一人で呟いている。既に彼らの軍隊は壊滅状態だ、もはやこちらは守護霊が三人、向こうはせいぜい残っ
ていても少数だ。

「皆さん、逃げてください。ここはもう一人で十分です」
上谷は余裕に酔ってるわけでも、自身の力を過信しているわけでもない。ただ状況を最善の方向に導くため言っていた。

「……大丈夫か？」

「はい、奴は僕一人で片付けさせてください。お願いします」

「……ああ」

「ほら、ぼさつとしていないで早く逃げるわよ」

そう藍那に手を引かれ俺達は旧本殿を後にした。

「さあ、早く続きを始めましょうか」

上谷はまだ額を押さえ半狂乱のヒシカに向かって声をかけた。

「ヒヒッ、力が可笑しく成ってるぜ……悪いが……手加減できそうにねえぞお??」

「そうですね。実は僕達の最初の攻撃、初めから旧本殿を狙ってたんですよ」

「なあに?? よく聞こえねえなあ!!」

「旧本殿が消えればあなたの役割も終わりです。もういいんです」
「ハッ、力がさつきよりも漲ってるぜえ。ハツタリじゃねえか？」
「仕事もろくに出来ないあなたがもう存在する理由もありません消えてください」

「やっぱりあいつらはお前の差し金かア、残念だったなアア！！」

「マリオネット……もういいですよ」

上谷を旧本殿に残し、俺と藍那は、獣道をたどり、最初の広場まで戻ってきていた。上谷は大丈夫といていたが、やはり不安が残る。

「なあ、やっぱり引き返そうか？」

いまさら言うのもアレだがヒシカがどれほど実力かもわからない。やっぱり三人で確実に倒しておくべきだった。

俺の提案に藍那は首を横に振って答えた。

「大丈夫だって、それに気になることもあるしね」

「気になること？」

「上谷君、結構得体の知れない人かもよ？」

たしかに彼の登場はタイミングが良すぎる。彼が俺達とであった直後に悪夢に囲まれた。その上、旧本殿や、この辺りの地理にも詳しい。おまけに霊に関しても慣れているように見えた。

「でも何が目的なんだよ。俺達を助けてくれたんだぜ？ それならたくらみがあつたとしても俺達には害がないって事じゃねえか？」

そう、彼がもし……何かよからぬことを考えていたなら、俺達に

は存在を知られたくないはずだ。それなら何故あれだけのチャンスがあったのに俺達を消そうとしなかったのか。

「ま、それもそうよね」

藍那も本気で彼を疑っていたわけではない。そもそも人間が悪夢と協力したりそんなことがあるはずがない。それに……そんなに悪人で世界が満ちてるはずがない。

「それより藍那、あの悪夢のこと。一応メンバーに報告しときましよう」

横からリリスが声をかけてきた。

メンバーとはサークルのことだろう。それにしてもこのサークルでは霊的事象に関しての観測と説明を行っているらしいが、一般的に聞けば怪しいサークルだろうが、俺からしてみれば恐ろしくもあり、頼もしくもある。桜井の兄でもある涼は俺が知ってる唯一の信頼できる人だ。

「そうねー、とりあえずメールでも送つところかしらー」

答える藍那の返事がやや適当なのが気になった。

「そういえばどうしてサークルなんかに入ってるんだ？」

確かに詳しい人たちと関わりがあると安心するが、調査、という名目で今回のように危険な場所に行き、報酬だつてろくにないだろくに悪夢の討伐を行っているには相当の正義感にあふれる人が、なにか理由があるはずである。

「そうね……あんたは最初、霊が見えたときどう思った？」

最初……俺にとっては最悪の思い出でもある。真にはやや訳があり、相手に敵意を向けられなければ戦闘が行えない。そのせいで若干死に掛けた俺だった。あの時であった悪夢は普通の人にも見える奴だったが、真と出会ってからはなんとなく馴染んでいき、今では

普通の日常の一部だ。

「まあ……信じがたかったな」

でも真実だと突きつけられてからは信じていかざるおえなかった。「ねえ、それだけ？ 怖いとか思わなかった？ 恐ろしいとか、自分の頭が狂ってるってるとか」

藍那が言いたい事が判った気がする。他人には見えない、自分だけの現実。それは今までのものとは大きくかけ離れていた。俺は始まりが衝撃的だったからその後はなぜか自然と頭に入ってきた。

「私は怖かった。自分自身がね。リリスの言うことは嘘じゃなかったし彼女は優しくかった。でもね、そう簡単に現実を上書きできなかつたのよ」

なんだが話が暗くなってしまった。とりあえず話をそらせよう。

「サークルにはどんな人が居るんだ？」

「ん、そうね……」

藍那が喋ろうとした瞬間、神社の真つ暗だった広場が突如、オレンジ色の明かりに包まれた、いや正しくは山の奥、旧本殿辺りから火柱が上がった。周りの木々を軽く超えるその火柱は周りに引火することなく、ろうそくの火を吹き消すように消えてしまった。

ちようどあそこでは上谷がヒシカと戦闘していたはずだ。

「藍那、行くぞー！」

何より彼の身の安全が心配だ。爆風に巻き込まれていれば火傷ではすまないはず。

「まって、ねえ。誰か歩いてくるよ」

藍那に腕をつかまれ、森の、ちようど俺達が旧本殿から帰ってきたときの道から人が歩いてくるのが見える。暗くてよく見えないが、一人のようだ。

「上谷……なのか？」

呼んでみても返事がない。真はもう子供状態に戻っていて、炎が灯せないので、恐る恐る近寄ってみた。

その人影は、手に持っていた無骨な拳銃を俺に構えた。間違いない、奴はヒシカ。思考、意思、感情を鮮明に持つ悪夢集団の親玉だった。

「っ!？」

予想外の展開に戸惑う俺は反応が遅れた。奴はボロボロに傷ついていて足元がふらふらしていたが、間違いなく銃口をこちらに向けている。

奴の殺意に満ちた顔は真っ直ぐ俺だけを見つめている。

撃つ。それだけを行えば間違いなく俺は死ぬ。

引き金に力を込めようとした。

その刹那、ヒシカの腹部から槍のようなものが飛び出した。

「大丈夫ですか？」

息を切らした上谷と、体に巻きつくベルトを伸ばし、槍のようなものを創ったマリオネットが森から出てきた。

ベルトの槍に貫かれたヒシカは宙を反転し、地に崩れ落ちた。

「ふう、どうやら何とかなっただようですね」

上谷も安堵して言った。それより俺が安堵に腰が抜けそうになった。

「さっきの火柱はなんだったの？」

藍那の質問に微笑しながら上谷が答える。

「ああ、アレはヒシカの最後の渾身の一撃でした。奴の銃は結構厄介でしてね。辺りを爆風で覆ったのですが、マリオネットのおかげで助かりました」

おそらくベルトのたてのようなもので防いだのだろう。それよりも気になったことがあった。

「周りに引火しなかったのか？」

「はい、少し開けた場所でしたし、霊力によって出来た炎ですからすぐに消えてしまいます」

それなら山火事に成る心配もない。

「もう残党とかも居ないと思います。この件はこれでおしまいでしようね」

そういった上谷の顔からも安心が見える。俺もようやく終わった気がした。

「そうか、……つかれた」

そもそも藍那に無理やり連れてかれた訳だし……いつもこんなんだな。

「そうね。さ、帰りましょう」

言う藍那も相当疲労の顔だ。山を歩き回ったからな。

「お前、歩いてきたのか？」

「そうね」

今から歩いて帰るのも大変だろうな。もう夜中だし。

「あんた自転車だったよね」

「……………」

「じゃ、俺は早く帰りますわ……………」

「あ！ ちょっと待ちなさい！ 後ろに乗せなさいよ！」

走って逃げる俺を追いかける藍那、それを眺めて苦笑する上谷。

とりあえず家に帰るまでが戦い、なのか？

第三十三話 「一撃」(後書き)

……真空気。

そろそろキャラが増えて大変です。

桜井はこういう展開になると出せないし。

第四章はまだまだ続きます。

第三十四話 「備えあれば」

「はい、それじゃあグループを決めまーす！」

けだるい初夏の陽気に包まれて俺達のクラスでは、学級議長である大竹が声を張り上げていた。黒板には『見学旅行』とデカデカと書かれている。いわゆる修学旅行だ。

俺達の学校では修学旅行が夏にある。準備はもつと前から始まっていたが、実際に近づいてくると、生徒達のテンションが序々におかしくなり始めるのである。そして現在は、部屋や点呼などで必要なグループ決めの日である。

「ねえ、京平、そんなに見学旅行って楽しいの？」

真が俺の隣にある窓のふちに腰掛けながら、顔を覗き込み聞いてきた。別に無視する気はないが、クラスないでは真が見えるのは上谷ぐらいだけなので、俺は適当に唸ることにする。

「なあ、秋元、修学旅行について語ってくれ」

俺は妥協策として、前の席で授業中にもかかわらず弁当を食べていた秋元の襟首を引っ張り、こつちを向かせる。

「んがあ！？ 待て待て、首が絞まる……」

黒板の前に居る大竹はなにやら、クラス担任である榎本に注意事項を陰湿根暗ボイスで聞かされている。その隙に秋元が弁当を机にしまい、一拍置いてから語り始める。

「お前……いまさらそんな事いつてんのか？ 一生に一度の大イベントだぞ？ まあいいか、お前が今ここで俺に聞いたのは正解だったぞ。もし聞かないで行っていたら大変な過ちを犯すところだったぞ」

「前置きはいいい、お前のその醍醐味を聞かせてくれ」

実際は俺ではなく真に話してやって欲しいものだ。その当人も興

味津々と言った顔で秋元を見ている。

「まずはホテルだろ。これ以外に異論は認めない」

胸を張って自慢げに話す秋元からなにやら不穏な空気を感じた俺だが、真の楽しそうな顔を見てしまった以上、話を斬るのは気が引けた。

「露天風呂はイイツ！！ 上が、がら空きなんだからなア！！」

「そこ！ 秋元、金城！ 男の虚しい会話は後にしなさい！」

とうとう大竹に見つかり、俺までとばっちりを受けた。こんなんばっかりだ。渋々秋元は前に向き直りながら「非常階段は便利だぜ……」という小言を残していった。

今回のグループ分けは男女別のアルファベット順にA、B、C……と言った感じで決まり、それが部屋分けにもなる。一日目の夜はAグループとBグループが同じ部屋、という具合になる。同じグループに決まった奴とはほとんど行動をともしせざる終えないのだが……

「はい！ じゃあ次、男子のCグループは？」

「俺と京平と上谷です」

秋元が大竹に負けじと声を張り上げる。やっぱりこうなるんだよなあ。

「いやあ、楽しみですね。見学旅行」

そういう上谷に俺は何気なく「ああ、そうだな」と返す。一見すればただの平凡な高校生の会話だが、彼の背後にそびえ立っているマリオネットが妙に物々しい雰囲気になっていた。

「ねえ、そんなにいいの？ 見学旅行って」

真が俺を押しつけるように前に出て上谷に聞いた。実際、このクラス内では唯一俺以外の話し相手である。

「そうですねえ、どうでしょうか」

さっき楽しみですね。とかいってた奴が何を言ってやがる。……

まあ、実際改まって聞かれるとなんと答えていいものか困るのは確かであるがな。

皆に適当な答え方をされ、真は釈然とせず、そっぽを向いてしまった。

見学旅行まであと二週間ほどである。準備や説明は嫌というほどやっているのに旅行に関しては不安はないが、違う土地にはそれなりの不安がある。

「行った先で悪夢が出てくるとかないよな？」

周りに聞こえないように、小声で上谷に尋ねた。彼は少し首を横に振りながら短く答えた。

「ないでしょう」

そう簡単に答えられてしまうと、俺の懸念もすこし過剰だったと思いを直した。

「おらおら、何小声で話してんだあ？ ま、まさか夜中の計画を二人で練っているのか……？」

いきなり秋元に肩を叩かれ、すっかり考えることをやめた。

「夜の計画？ お前こそ、ボーイフレンドたちのところへ行くんだろ？」

「なっ、京平……それはいわない約束……くそっ、上谷あお前もなんか言ってくれ」

「ははっ、そうですねえ。楽しみにしておきます」

すっかり上谷も馴染み、俺達三人で何かと行動することが増えてきた。

「はい、それじゃあ全グループ決まったね？ じゃあ次は移動中のバス座席を決めまーす」

大竹が仕切つて次の決定事項に向かう。バス座席、俺は寝る派なので秋元とかとは離れたいな。それから前にも言ったが、修学旅行

前になると順序に生徒達のテンションがおかしくなり始めるのである。どうやら自然な流れで男女混合は常識になっているらしい。空気を読め、という視線があちこちから飛び交っている。

「さっそくさつき決めたグループが活用されるのね！」

男女のグループ同士でくじ引きを行い、決まったグループ内で詳しい座席を決めるわけだ。まあ特に俺が何をしなくとも大竹がサクサクくじを引き決まっていくなのだが。

アルファベットを次々と読み上げる大竹、彼女がくじを活用するのは前にも見たことがあるなあ……？

「はい、じゃあ最後ね。男子のCと女子のEグループ！」

Cは俺達のグループ。たしかEには大竹が入っていたはず。いや、彼女ともう一人、……まあ桜井なんだが。流石大竹、詐欺師にでもなればいい。

「ははっ、良かったな、京平」

秋元は呑気でいいもんだ。これでなんとなくバス内で爆睡し辛くなってしまった。でも……まあいいか。

第三十五話 「見学旅行・上」

「あー、おもてえ……真、持ってくれよ……」

日に日に気温が上がり始める初夏、いつも見慣れた街並みをいつもと違う荷物を持って移動していた。荷物、つまり着替えが乱雑に詰め込まれた見学旅行用の物だ。

「別に私は持ってあげても良いけど、周りからはバッグが浮いているように見えるよ？」

俺の隣を歩く真は、俺の苦勞なんてつゆ知らずの涼しげな表情で答えた。

バッグといつもの教科書のどっちが重いかと聞かれれば、なんともいえないが、いつもと違う荷物というだけで何だか重たく感じるものである。

今日は見学旅行初日。これから駅に向かい、電車に乗って空港へ行くのだ。

「むー、」

理屈では解っているのに、真が手伝ってくれないことに釈然としないままダラダラ歩いていた。そんな俺の背後から、朝から爽やかな声が掛かった。

「おはようございます。お二人さん」

上谷は、俺と同じような荷物を持っているくせに軽々しく歩いてきた。ちなみに『お二人』というのは俺と真のことで彼には真までしつかりと見えている。

「よう、……やっぱ慣れないな」

彼の背後には物々しい雰囲気をかもし出している守護霊マリオネツトが憑いてきている。全身ベルトで包んだミイラみたいなその容姿は、戦闘時に居ると頼もしいが、普段の日常の中に紛れ込んでい

るとやっぱり違和感がある存在である。

「まあ、そういわずに。良い奴ですよ？」

上谷はそういうが、俺にはあいつが喋っているところをいまいち見たことがなかったし、戦闘スタイルが結構粗暴だったりする。

「そんなことより金城君、行き先は京都ですよ。いやあ楽しみですよ」

上谷が無邪気に笑いながら言った。

「京都好きなのか？」

俺にはいまいちわからない、そもそも旅行があまり好きではないからだ。修学旅行はそれほど嫌ではないが、一人や、家族とは行きたくないかった。一種のトラウマがあるからだ。

「僕は一度行ってみたかったですよね。なんというか日本の美を感じます」

どうやら上谷の趣味が垣間見えた気がする。日本の美を語るの俺には荷が重過ぎる。後で秋元と対談させて見るか。

しばらく歩いたところで駅に着いた。駅は街の中心部にあり、周りをオフィスビルやテナントビルなどで囲まれ、買い物に来る人や仕事に来る人でにぎわっている。今は午前中ということでも人通りも少ないが。

現在は俺達の高校の生徒が多く見られた。駅前の広場みたいなところに集合なのだが、自分のクラスがどこなのか良くわからない。上谷と彷徨っていると、大竹が声を張り上げているのが聞こえた。

「おい、上谷と金城ー！ こっちこっちー」

「さあ、行きましようか」

人混みを掻き分け、大竹の元へ上谷の後をついて行く。俺のクラスの中もほとんど集まっており、全員が妙なテンションで話していた。その中に秋元が居た。

「ようやく来たのかあ。ふう、遅すぎんぜ」

なぜか妙にムカつく口調で喋る秋元をスルーして俺は座った。

「それじゃあ全員そろったようだし、出発しまーす！」
そういつて大竹が担任榎本の後ろをついて行く。
とうとう始まるのか……四泊五日の長い旅行が。

「はい、カメラ回ってまーす」

バス内。蒸し暑い外の空気とは違って冷房がよく効きとても気分が良い。ゆえにだんだん眠くなるものだ。

現在は、一日目の昼過ぎ、既に多目的ホールのようなところで昼食を取った後、なにやらお寺を観光に行く途中のバス内だ。

俺は、既に長旅で、疲れて寝てしまっそうだ。後方二番目の席、隣には桜井が居て、その後ろには上谷と大竹が座っている。

「優希、静かにしててね……」

俺は窓際に腕を置き、その上に頭を乗せてうとうととしていた。目を瞑り、……ああ、もうすぐ睡魔大王が俺の元にやってきて……

「つてうおあ!?!」

「うーん、良い寝顔!」

気が付くとカメラを構えた大竹が身を乗り出している。後ろでは上谷が笑いをこらえ、桜井まで可笑しそうな顔をしている。バツチり撮られてた……

「はいはい、せっかくの旅行なんだから寝ちゃダメだよ!?!」

そういいながら大竹の席である上谷の横に座った。

この旅行のカメラ係である大竹は私用の目的でカメラを振り回す強敵だった。

「別にバス内ぐらいいいだろ……なあ上谷、夜のために今寝ておくんだよ」

後ろに振り向きつつ上谷に声をかける。

「そうですねえ。まあいいんじゃないですか」

「か、上谷君までそんなことを……優希い何とか言っつてよ」

「そうねえ、最終日にはさやかも疲れて寝てるんじゃない？」

「なっ、優希までそう言うの!？」

「上谷の肩に頭乗っけてるかもな」

「そこまで!？」

「いつでもどうぞ」

「どうしてそこまでノリがいいの!？」

大竹を中心にして皆でぎゃあぎゃあ楽しく騒いでいた。

しかし、このバスの一部……前方の席から闇のオーラを感じる。

「秋元は楽しくやつてるかな？」

「……ちよつとかわいそうじゃない？」

そう、秋元はバス座席が一人だけ違うのだ。俺達の班が一番後ろとその一個前の席なんだが、五人分の席がないのだ。一番後ろは席が五人分空いているのだが、反対サイドには別の班があり、結局秋元は席がなく前方に行くことになったのだ。

その前方の席は、言うまでもなく担任榎本の隣である。

「秋元……生きて帰られるのか……？」

どす黒い負のオーラに押しつぶされてないといいが。

そんな懸念を残しつつバスは次の目的地へと走る。

まだまだ長い旅の始まりだ。

第三十六話 「見学旅行・中」

「ハイ、じゃあ写真撮るよー！」

大竹の掛け声に、俺達は清水寺の塔をバツクに横一列に並ぶ。大竹が、たまたま通りがかつた人にカメラをお願いして列の端、上谷の横に並んだ。

「つたくよー。お前らもひどいぜ……」

写真を撮り終えた後、秋元がこぼしていた。

「榎本と悪夢のバス旅行なんて……」

悪夢、と聞くと少し身構えてしまう自分が少し嫌になりながらも、三年坂という坂を皆と下る。

「いいじゃねえか。これを機に榎本と高感度をあげておくのも悪くないぞ」

「ふざけんな」

返す秋元は心なしに弱弱しい。相当強い負のオーラだったのか。

「さあ、そんなことより八坂の塔が見えてきましたよ」

楽しみだと言っていた上谷は、どうやら前から調べていたらしく、さまざまな豆知識をナビゲートしてくれる。いつも敬語で礼儀正しい上谷のテンションは上がっててもわかりにくい、今日はハツキリと楽しそうだとわかる。

「現在の塔は1440年に再建されたものなんですよ」

「ふーん。そういや大竹、集合時間まで後何分？」

「まだまだ時間はあるよー。皆はどこが見たい？」

「私は皆が見たい場所ならどこでもいいよ」

「俺は少し休みたいかも……」

「なら二年坂を下って高台寺に行きましょう」

休みたがる秋元を皆でスルーして坂を下った。すると、しばらく

バス内で沈黙し続けた真が声をかけてきた。

「いい加減暇なんだけど……あの『ばす』って乗り物もずっと動けないし」

見学旅行もとい修学旅行は常にクラスメイトと行動するようなものだ。当然、秋元のように霊の存在を感知できない奴と共に居るときには真と会話できない。

「ふう、主が存在を感知できているだけでもいいじゃないか」

横から話に入ってきたのは、桜井の守護霊であるヴァリエである。彼はアレスにボコボコにやられ、体が原形を留めないほどになったところを涼に助けられ、どうやら無事修復されたようだ。ちなみにどうやって修復するのは俺は知らない。

「まあそうなんだけどね。半年前ぐらいにはつながりも無かったしね」

真とつながってからまだあまり時間が経っていない気もするが、それでもつながりは着実に強くなっていると思う。

「おい、京平、置いてくぞー」

「あ、おい、待ってって」

「何だ……この『子育て幽霊飴』って……」

京都は観光客も多く、もちろんお土産屋も多い。

「それは……まあデマなんでしょうけど、死後に墓の中で生まれた子供のために、幽霊が毎晩買い求めたといういわくつきの品です。まあ良いお土産じゃないですか？」

「ふーん……」

たしかに真なら飴が好きそうだから毎晩買いに来るかもな。

「いやー、それにしてもいっぱいお土産があるねー。おっ、これは何かな？ 上谷君」

大竹の質問に上谷が、「ああ、それはですねえ……」と返す。
なんだかんだで旅行を楽しんでいた。

「ねえねえ、さやかと上谷君って良い感じだと思わない？」

急に俺の襟を引っ張って桜井が耳元で囁いた。

「良い感じ……？ まあでも大竹って割りと誰とでも仲良くするだ
ろ？」

「違うの。ほらよく見て」

言われてみてみれば、確かに心なしか大竹の頬が高揚しているよ
うにも見えるが……。

「うーん。よくわかんねえな」

俺はそういうことに疎いはずだし、特別気にしてるわけではない
からな。

「これは今夜聞いてみるしかないわね」

桜井も密かに楽しんでいるようだった。

「な、なあ、皆そろそろ集合地点にいかね……？」

なんとなくハブられていた秋元がおずおずと提案した。

バスに戻って、次はいよいよホテルに向かう。そこでもいろいろ
イベントは残っているのだが、なんとなく今朝から疲れていた俺と
しては、ゆっくり休めそうので安心した。

「ところで上谷、お前神社のところに下宿してたよな」

俺と上谷が、ともに戦って守ったといってもいいような場所だが、
アレ以降は訪ねていない。今日、たまたま京都の神社などを観光し
ている時に、上谷が京都が好きといていたので関係があるか少し
気になった。

「そうですね。親戚の方に快く受け入れてもらいました」

「実家つてどこら辺？ 遠いの？」

何気なく振った話だが、少し上谷の表情が曇った気がした。しかしそんなことはすぐに何事も無かったかのように上谷はかき消し、話を続けた。

「まあ、田舎の方ですね」

「じゃあ、夏休みとかに皆で行ってみたいとかは!？」

すぐにイベント好きの大竹が話しに入ってくる。

俺の隣で桜井が「ほらね。」って言う顔をしていた。

「……まあ機会があればぜひ」

上谷は苦笑しながら濁らせた。

「じゃあ決まりだな。夏休みは上谷の地元の皆で行くって事で最後の一押しを俺が言った。」

なんとなく、大竹の応援をしたかった。余計なお世話かもしれないが、上谷は結構手強いんじゃないか、それとなくアピールしても礼儀正しくスルーされてしまいそうな印象がある。

いつもは俺たちに何かと計画する大竹にもたまには反撃したいしな。

「楽しみだね。さやか」

桜井も俺と同じようなことを思ったらしく、一緒に乗ってくれた。上谷も少しうれしそうに微笑んでいた。

第三十六話 「見学旅行・中」 (後書き)

まだ中かよ。とか言わないでね。

第三十七話 「見学旅行・下」

見学旅行一日目にも、終わりが近づいてきた。散々バスに乗っていたので体が凝り固まっているし、バスから降りたかと思えば歩き続けていたので、もうクタクタだった。

ホテルについてからは、ホテルの豪華な夕食を食べ、男共でこつた返す大浴場で、威勢よく水浴びをした後、さっさと抜け出して部屋でくつろいでいた。

「それにしても疲れたな。今日はさっさと寝ようぜ」

これから30分ほど自由時間があり、その後学年レクとか言う催しがあり、その後すぐ消灯時間である。

「あ、アホかおまえはああ！」

秋元は俺の提案に激しく突っかかってきた。

「修学旅行の夜はお前……最大のメインイベントじゃねえか！」

そういう秋元だが、俺は実際、秋元と布団をくっ付けて恋について語らいあいたくもねえし、かといって他にすることも無く、まだ一日目なのに疲労感が募っている俺としてはゆっくり寝たかった。

「上谷、秋元と楽しい夜を過ごしてくれ」

とりあえず話を上谷にそらしておく。

「秋元君が、僕で我慢出来るなら構いませんよ？」

「なに……！？ 我慢とかそういう問題なのか……？」

「ってそんなことよりお前ら！ 本当に男か？」

……改まって叫んだ秋元に俺たちは不穏な気配を感じた。

「ってへんな意味じゃねえぞ」

秋元は後から付け足した。

「どうかしたんですか？」

「よく聞いてくれた上谷君。……いいか、ここのホテルには露天風

呂がある」

胸を張って堂々と答えた。まあ解ってたけどさ。

「覗くなら一人で行け」

「なんでだよ〜！ 男のロマンじゃん」

ここで男のロマンについて語るには、俺には少し荷が重いぜ……なにせ秋元は男だけの空間だと思っっているようだが、俺の後ろには長旅で疲れ果て、文字どおり「憑いてる」真がべったりと俺の背中に張り付いている。重さを感じないが、これが霊に取り付かれた状態なのか。と実感していた。

「上谷は行くよな？」

「いえ、遠慮しておきます」

即答された秋元は、肩を落とし、不敵に笑い始めた。

「ふっ、ふふふっ。いいさ。いい。あ〜いい。もう俺一人でユートピアに行くてくるぜ。」

「だいたいどうやって覗くんだよ。普通に考えて無理だぞ」

「非常階段さ」

まるで推理小説で最後のトリックの仕掛けを解説する探偵のように、自信満々に、嫌な感じの爽やかさを含んで言った。

「いいか、非常階段は火災があったときなどに逃げるために使う。

しかも大体は外に付いているツ！ もちろんそれは露天風呂の上の階も例外ではない……」

最後は、俯きながら、自分に酔っているかのように囁いた。

「わかったから行ってこいよ」

「……ふん、いいぜ。そこまで言うのなら行ってくるさ！ お前らの女が俺の視線に襲われていてもしらねえからな！」

そう吐き捨て、部屋から出て行った。

秋元が居なくなつたのを確認して、俺は真を引き剥がす。

「おら、もう喋ってもいいぞ」

上谷は真が見えているのでまったく問題ない。俺の声に、どうやら寝ていたらしい真がのそのそと動き出す。

「ふわ……疲れた」

「……ったく」

とりあえず俺はベッドが三つも押し込まれた部屋を見渡す。テレビはもうコイン式ではなく、普通にリモコンが付いて部屋の隅に鎮座していた。その隣に電子ポットがあり、よく冷えた水が出てくるようだ。

「それにしても眠いな……」

水を飲みながら、巨大なクローゼットにもたれかかる。クローゼットにはどうやら布団が収納されているようだ。

「あの……ちよつといいですか？」

改まって上谷が真剣な顔で訪ねた。俺はそれに首を縦に振って応じた。

「今日、バスの中で僕の実家の話しをしたじゃないですか」

「ああ……」

たしか夏休みには皆で訪ねようって大竹が言ってたやつか。あの時の上谷は少し違和感を感じた。

「僕の両親は……もう、居ないんですよ」

「……そうか……。解った」

もう居ない。その言葉の意味はなんとなく解る。俺も父親がいない。母親と二人暮らしだった。だから上谷の気持ちもわかったつもりだ。彼の両親が既にこの世に居ないのか、それとも複雑な理由があつて彼の前から姿を消したのか。それは俺が聞くことではなく、彼が話すことだ。話したくなければそれでいい。

「だから……実家には行けそうに無いですね」

上谷は同情して欲しくて俺に言ったのではない、ただ知っておいて欲しかっただけなのだろう。

「だから下宿しているのか」

「はい、高校卒業まではあそこにお世話になります。その後は、も

う働くしかないですね」

そういつて、夜の森が眺められる窓際を向き、口を閉ざしてしま
った。俺はその背中から何かを感じた。

「まあ、でも、今は見学旅行だ。そんなことは後から考えようぜ。
別に大竹が夏休みまで覚えてねえかもしれないしな」

俺の言葉に振り向いて、「そうですね」といつものように笑った。

レクが、騒がしく行われている中、俺は秋元の姿を捉えることは
出来なかった。一体どこまで行ったんだ？

まあいい、レクでは無難なゲームが進み、上谷もいつもどおり楽
しんでいるし、大竹や桜井も加わって楽しんでいた。レクは、畳敷
きのただっ広い和室『梅の間』で行われていた。部屋の真ん中に適
当な仕切りで分け、隣には別のクラスがいる辺り、なんとなく肩の
狭さを感じた。

秋元が帰ってきたのは、レクのゲームが終わり、もう一日目の最
後の行事である担任からの注意事項が話される場面になってからだ
った。榎本に連れられ、集会会場のホールに入って来た秋元は明ら
かにやつれていた。

「あー、諸君。このような旅行行事では必ず馬鹿をやるやつがいる。
もう既に一名がやらかした後だが、これ以上我が校の名を汚さない
様に気を付けたまえ。それでは代表のものは……」

榎本がいつものブツブツ陰湿トークに入ったところで、俺は秋元
に聞く。

「（どうしたんだ？）」

「（嗚呼……聞いてくれよ。榎本の奴、俺が非常階段に入り込んだ
途端、現れたんだ。誰にも見られてないのにどうやって気づいたん
だ……？）」

俺が何気なく榎本に視線を送ると、肩越しに榎本の守護霊、國酔が見えた。なるほど。

「（まあ、お前には無力なことだな）」

「（あ、なんだよ、知ってるのか？ おい）」

小突く秋元をスルーしていると、榎本が話を終えて、「それでは一同、部屋に帰れ」と吐き捨ててさっさと行ってしまった。

「さあ、部屋で寝ようぜ」

それぞれが自分達の部屋に帰ろうとして、部屋の出口辺りでスリッパの取り合いをしているのを後ろから眺めていた。

「なあ、ほんとに寝ちゃうの？ ねえ」

秋元は無視してこの夜は即行で寝た。

第三十八話 「月影」

見学旅行一日目は無事終了した。

流れも滞りなく進み、このまま二日目も順調に進んでいた。朝、ホテルを後にした俺たち一行は、市民ホールのようなところで熱心なオッサンによる環境に関する公演を小一時間延々と聞き続け、その後はまたバスに揺られながら京都の観光をしていた。

この日は本当に何も無く、ただ皆と見学旅行を満喫していた。はずだった。

既に日が傾き始めた午後六時。俺たちを乗せたバスは、二日目の宿泊場所であるホテルに到着した。ホテルは、白い縦長の直方体で、なんとなく箱のような印象があった。その周りを囲うように、遊歩道のようなコンクリートタイルが敷かれた道と並木があり、外側を囲う山とホテルの緩衝地帯のような役割を果たしている。

「また胡散臭そうなホテルだな」

秋元が、荷物を重たそうに肩に掛ながら言った。ちょうど今は、バスを降りて荷物をホテルに運び込む途中だった。

「そうか？ 別に普通だと思うけどな」

あまり旅行経験の無い俺が言うのもアレだが、特に不自然なところは無い。

「よく見ろよ。ほら、屋上になんかヘンな像が建ってるぞ」

言われて、秋元が指差す方を見ると、下からなので見難いが、確かに変わった像が屋上に建ってる。

「変な宗教かなんかだったら嫌だな」

とは言ったものの、別に屋上の装飾なんてどうでもよかったし、宿泊だって一日しか居ないのだから気にすることも無いだろう。

ホテルのロビーに、俺たちのクラスの人間は流れていき、その中で室長と言われる……簡単に言えば鍵を預かる係りは、フロントに行っただ後、なにやら説明を受けるらしいので一時、団体から離れることになる。ちなみに俺たちの部屋の室長は上谷だった。

「それでは、申し訳ありませんが、僕の荷物も部屋に運んで置いてください」

上谷の分の荷物を秋元が持ち、俺たちはロビーに入った。内部は高級そうなタイルが壁に貼られ、床は紺の絨毯が敷かれ、落ち着いた雰囲気を出していた。椅子やテーブル、テレビなども置かれたホールのような場所もあり、懸念していた変な装飾も無いごく普通のホテルだった。

「エレベーターは使っていないのか？」

奥に進むと、幅が四メートルほどのデカイ階段の脇にエレベーターが四つ並んでいた。人で混んでいるため乗ったところで楽には見えないが。

「んー、どうやらあのデカイ階段は二階にあるレストランにしか通じていないらしい。俺たちの部屋がある七階に行くには……」

あらかじめ配布されていたこのホテルのパンフレットの見取り図を眺めながら進んでいくと、廊下の奥に非常階段のような狭く、無骨な階段が現れた。

「……これで行くしかねえのか……」

げんなり肩を落としながら階段を上り始めた。

「おーし、風呂に行くぞー」

夕食を食べ終えた後、部屋に戻った秋元が高らかに宣言した。

「おー、確か一階にあったな。降りるのめんどくせえ」

そろそろ疲れてきたので、ゆっくり休みたいが、流石に風呂に入

らないのはいけないので秋元と上谷に続いて部屋を出た。

入浴時間は30分ごとに、前半学級と後半学級に分かれているので、まだ部屋に居る連中も多くエレベータのまわりも空いていた。

和にまとめたらしく、やたら古臭い壺が置いてある廊下を抜けて俺たち三人は、広々としたエレベータで一階に降りた。

廊下の脇を水が流れていて、その上には灯籠のようなものが並んでいた。はたまた窓から外を見れば、薄暗く少し狭い広場には、なにやら石膏像の様な物が立っていたりと結構統一感が無いホテルだった。

ちょうど男湯と女湯が分かれるV字の分かれ道に差し掛かったところで秋元が叫んだ。

「あ、俺バスタオル部屋に忘れたっばい……取りに行ってくるなあ」「先行ってるぞ」

そういつて秋元を送り出した後、男湯の暖簾をくぐろうとした時、誰かにぶつかった。

「あつ、わりい……って、おい、ヴァリエかよ！」

俺がぶつかったのは、桜井の守護霊のヴァリエだった。その彼の周りには、主である桜井も居なければ、誰も居なかったりする。俺と上谷が来るまでは一人で突っ立っていたわけだ。

「どうしたんですか？」

上谷が訝しげに聞いてきた。

「ああ、そうか。上谷にはこいつが見えないのか」

そういつてヴァリエを指さしながら上谷を見る。彼はしばらく目を細めて、なにやら考え込むような仕草をした後、「いえ、見えませんよ」と言った。

「ところでこんなとこで何してんだ？」

この俺の問いにヴァリエは「フツ、愚問だな」と呟きながら答えた。

「仮にも私は男性だぞ？ 守護霊も生前は普通の人間だったからな」それを聞いて俺は納得。

「じゃあここで真も待つてくれよ。ちょうどいいだろ？」

眠そうに目をこすっていた真は、ヴァリエの隣にとん、と座り、「はやく戻ってきてね」と言い、転寝を始めた。ちなみに霊にとつて睡眠はただ怠けているだけなので心配ない。

その後、バスタオルを持って来た秋元と合流して浴場に向かった。

「よし、ここで一発男の真剣勝負だあ！」

「黙って入れねえのかお前は……」

室内の大浴場は、俺と上谷、そして秋元を除いても数人しか入っておらず、割と快適に過ごしていた。湯は、おそらく温泉では無い気がするが、雰囲気だけでも楽しめるように、いたるところに工夫がされている。たとえば、何気に浴槽が岩で出来ていたり、湯はかけ流しで、浴槽の床に循環溝が無い。

「いいじゃねえか。ここは誰が最後まで入っていられるかの勝負だ。いいだろ？ な、上谷」

「そうですね。やりましょう、せっかくですし」

「なにが、せっかく何だか……」

こうして謎の三人の漢の真剣勝負が勃発した。

結果。

「どうやら秋元君の一人負けですね」

そう言う上谷が、とりあえずタオルで扇いでいる秋元は、脱衣所のベンチに横たわっていた。

「のぼせるとか……お前は本当に……」

「京平、……それ以上は……クソッ、俺の体が万全だったら、……」
その後、喋らなくなった秋元を学校指定ジャージに着替えさせ、部屋まで上谷と一緒に運んだ。

部屋に戻っても、秋元は復活しなかった。

「そうですねえ……何か冷たい飲み物でも買ってきてもらえますか

？」

上谷は秋元の脇に座りながら団扇で扇いでいた。

「仕方ねえなあ。ちよつと行ってくるか。確か自販機があったな」

「えーつと、スポーツドリンクがいいか……？」

自販機の前で俺は悩んでいた。

「いや、しかし……のぼせた野郎にきつゝい炭酸を飲ませるのもなかなか……」

「……ちよつと、」

真剣に俺は悩んでいた。

「実は酒を混ぜるなんて楽しそうだな」

「そのあんた、」

もしかしたら秋元の事で今までに無いくらい悩んだかもしれない。

「やっぱり……ホットコーヒーだな」

「人の話を聞きなさいよお！」

、ぐいつと、俺のジャージの襟を引っ張られて後ろを見る。するとそこには俺より頭一つ背が低い藍那が守護霊のリリースを引き連れて立っていた。彼女は他クラスなのでこの見学旅行中には会っていなかった。

「なんか用か？俺は今、頬を高揚させて、ホテルのベッドで寝ている男を虐げる方法を熟考していたところなんだ」

「へんな言い方するな！……用って程でもないけど……」

どうやら些細なこと過ぎて言いにくいらしいのか、口籠もってしまふ藍那の顔をじつと見つめながら話を待った。

「……なんかさつき外の山の方に妙な影が見えたんだけど……」

ようやく口にした言葉は、微妙に些細ではない気がした。

「影って……まさか、悪夢とかじゃないだろうな？」

それならなるべく早めに何処へ行って欲しい。せつかくの旅行を

邪魔されたら洒落にならないからな。

「うん……よく見えなかつたけど……だから、確認しに行こ」

確かに、この山にもヒシカ率いる悪夢軍団が潜んでいたりしたら恐怖を覚える。早めに確認して場合によっては退治した方が、自分のためにもいい気がする。

「でも確認ぐらい一人で行けるだろ……？ 戦いになったとしてもよほど数が潜んでない限りリリースが勝てるんじゃないあ……」

「う、うるさい、念のためよ！」

「ふーん、」

暗いところが怖いのだろうか。

「あー、わかつたよ。どうせ行くならさっさと行こうぜ、夜中になつたら外に出るのも大変だろうし」

厳密に言えば、もうホテルから出るのも禁止されている時間だが、まだ教師達も見張りに徹しておらず、ホテルのフロントさえ抜けてしまえば外に出られるはずである。

「おら、真ももしかしたら戦闘があるかも知れねえから気をつけろよ」

「むー、戦闘が始まつたら危ないのは京平でしょ」

まだ子供状態の真は少し頼りないが、それでも敵がくれば、本来の力を発揮できるし、リリースも居るから大丈夫だろう。

「ほら、早く行くんでしょ？」

藍那に催促され、俺たちは人目を避けつつホテルを出た。

初夏の夜の風が心地よく、俺たちの肌をなでた。

月の光が、照らした。

今日は満月だった。

第三十八話 「月影」 (後書き)

そろそろ・・・がんばります。

第三十九話 「告白と気絶」

「で、どの辺りに影つてのが見えただ？」

ホテルの外に俺たちは出ていた。辺りには山気があり、夏の夜はむしろ心地よかった。月明かりに照らされ、辺りには外灯などが無くても十分に視界は保たれていた。

ホテルと山肌の間を走る遊歩道を歩きながら、辺りを見回す。特に異常は見られなかった。

「えっと……ちよつと話があるんだけど……」

そこから、おずおずと藍那が切り出す。

「あれ……？ 影はどうした？」

確か、先ほどは影が見えたどうのこうのと。

「それよりも……大事な話」

どこと無く、目線をそらす藍那が、夜風に吹かれ、いつもと違うというか……なんだか気恥ずかしくなってきた。

「あのね。……真剣に聞いて」

釘を刺され、動けなくなる。まさに藍那が話をしようとした瞬間、俺の視界の端に、まさしく人の影が入った。

「つと、こつちだ！」

俺は慌てて藍那の手を引き、手近なところにあつた石膏像の裏に隠れる。

その数秒後、人影が、ちよつどさつきまで俺たちのいた場所を通り過ぎ、やがて遊歩道を抜けて、ホテルの裏側へ行ってしまった。

「ふう、警備員かなんかか？」

とりあえず人間っぽかったし、さすがに悪夢だったらこんなところに隠れている人間を見逃すはずが無いだろう。

「で……話があるって……？」

個人的にはこのままなんとなく話を終えてしまいたかったが、何

故か藍那がそれをさせない空気を出していた。

すぐに石膏像の裏から飛び出し、遊歩道の真ん中に植えられている木の下に行く。

「……、前に聞いたよ。どうしてわざわざ転校してきたかって」

そういえば、前に聞いた気がする。その時は俺たちの住む町に出現した悪夢の退治だと言っていたが、それならばわざわざ転校してくる必要も無かった。

「あんたの為よ」

しつかりと俺を見据えていった。

「……………え？」

「こ、これは…………？」

「監視するためよ」

目をそらして付け加えた。

「か、監視？」

若干、拍子抜けしたが、逆の方向に話が切り替わった。監視とは

「それってやっぱ、俺の……………憑心だっけ、そのことか？」

以前、俺の体に起きた異変。これは涼にも話したが、特に悪性ではなく、むしろ助けてもらったに近い。しかし俺の意識はほぼ無く、傍らに居た真の話によるとだが。

「そう、あと不真面目な教師達もついでにね」

教師達といって思い当たるのは、やはり藤崎と榎本か。あの二人の件には、藍那も関わっていたからな。

「なあ、あの現象は確かに気味が悪いが、別に悪い奴でもないみたいだし放っておいてもいいんじゃないか？」

俺の提案に、さらに顔をそらした藍那は呟くように答える。

「どうして悪い奴じゃないって言い切れるの？」

「ど、どうしてって……………真の味方をしたんだろ」

「たとえばアンタの守護霊の味方だったとしても万人の味方であると

は限らないわ。それに気が変わって人間を襲うかもしれない。もしかしたら別の目的があつてたまたま味方をしただけかもしれない」
そういわれて背筋に嫌な汗がにじみ出てきた。人間を襲う。俺の意思に関係なく。それは……自分を傷つけられるよりももっと恐ろしい事だ。

「それにね。もし、そのような兆候が見られただけでもアンタの身は危ないのよ」

「どういうことだ？」

「アンタは信頼されてない。もし自在にその力を操ることが出来るようになる。もしくは出来ていたならば、何を行うかわからない。

そういう見解もあるのよ」

そういう見解、つまり一口にサークルといつても、学生達が集って娯楽をするものとはかけ離れている印象がある。さらに言えば組織だったものかもしれない。

そんな人たちに俺は信頼されていない。……悪ければ、俺は削除されるべき的かもしれない。

「ど、どうしたらいいんだ？」

「何もしないことよ。アンタは霊に関するトラブルに巻き込まれすぎてているの。これからはなるべく避けることね」

最後の一言は、釘をさすように強く言われた。

「もし……俺の力は得体の知れない危険なもので、俺はそれを自在に操れたとしたらどうなるんだ？」

「……場合によつては、私が、まず、抹殺を試みる」

藍那が、俺を抹殺する。

それだけで、もう、……嫌だ。

「させないよ。京平は私が守る」

これまで沈黙を徹してきた真は、力強く宣言した。

守護霊としてだけではない。真の意志。

「私だって、そんなことしたくない。もちろんそうならないように努力してる」

藍那は弁解するように言った。もちろん俺は彼女が悪くないことなんてわかってる。

その様子を見かねたのか、リリースはそつと付け加えた。

「君にこのことは、当然秘密にすることになっていたわ。それでもこの子が、あなたに警告した意味がわかるでしょ？」

その言葉に俺は、しっかりと頷いた。

「じゃあ、戻ろうか。いつまでもこんなくらい話ししてる場合じゃないよね」

いつもの明るさを、取り戻したのか、取り繕ったのか、藍那は俺の腕を引つ張りホテルの入り口へ歩みだした。

俺からは彼女の顔が見えなかった。

「ふー、なんだかな」

エントランスで、藍那と別れた後、俺はエレベータに乗った。そこで、秋元に飲み物を買ってくることになっていたのを思い出したが、時間が経ちすぎていたので、諦めることにした。

エレベータが止まり、俺たちの部屋がある階に下りたが、廊下には誰一人居なく、逆に不気味な感じがした。疲れていたのか、少しくらっとした。

「ん？ 何だあれ」

思わず呟いたが、俺たちの部屋のドアの前に何かが置いてある。よく見ようと近寄ったところで、それは廊下に寝そべる秋元だとかかった。

「つたく、だらしねえな」

廊下で爆睡している秋元を部屋に戻そうと、彼の脇に膝をつき、腕を肩に回したところで、ふと違和感に気づいた。

寝息が無い。

むしろ、長距離走を走りきった後のようにヒューヒューと息を吸っているに近い。表情は苦しくなさそうだが、それでも顔色は悪い。「……なんか、体調でも崩したのか？」

若干、違和感があるが、俺にはどうしようもないので、とりあえず部屋の中に運び込んだ。中には上谷の姿は無く、特に異常もなかった。

ベットに秋元を、これまでに無いくらい優しく寝かせて、部屋を飛び出した。

「確か、この階の突き当たり、担任と副担の部屋があったな……」俺の部屋は廊下の突き当たり程近いところにあつたので、担任と副担の部屋は目と鼻の先だ。

ノックもせずに、ドアを開け放つと、中には榎本は居なく、副担が、椅子にもたれていた。

「あ、あの……失礼します」

榎本が居ると思っていたので、自分の無礼が少し恥ずかしかった。副担である、若い体育教師は、俺の言葉に関心が無いのか、ピクリとも動かなかつた。

「……？」

近寄って、顔を覗き込んで、気が付いた。

秋元と同じ症状だ。息が荒いにもかかわらず、意識が無いのか、目を瞑って居る。

「……ちくしょう、どうなってんだ？」

部屋を後にし、手当たり次第にドアを開けていく。

その、どの人も、全員気絶していた。

まるで……俺と藍那がホテルから出ている間に、何かが起こったかのようだ。

「京平、気をつけて……何か……さっきからずっと気配がまとわりついてくるの」

真の言葉に、俺は確信した。

悪夢の仕業だ。

俺はエレベータに向けて走り出した。

第三十九話 「告白と気絶」(後書き)

なんか会話文が多いですね。

文章の成長がまったく感じられませんねえ。

第四十話 「交錯する刃」

「どうなっただよー！ ちくしょう！」

楽しいはずの見学旅行。その二日目の夜、ホテルは不気味な静けさと、肌寒い気配に包まれていた。

俺は、とりあえずエレベータに飛び乗り、1つ下の階に行く。

「真、どう思う？ この現象は」

「そうね、敵が悪夢にしろ、そうでないにしても目的が解らない事には下手に動くのも危険ね」

そう話しているうちにエレベータが停止、扉がスライドして開いていく。

俺が降りた階は、俺たちのクラスの女子の部屋がある階だ。

念のため言うが、これは混乱に乗じてなにやらしようというわけではない。

慎重に廊下に出た俺は早足でドアの確認をしていく。やはり、廊下はがらんと誰も居ない。廊下に出た俺は早足でドアの確認をしていく。

ドアの前には、その部屋のメンバーが張られている。その中で、桜井の名前を見つけるのはたやすいことだった。

「ふう、……行くか」

何故か緊張しているのは、現状とは別の原因がありそうだ。

決心を固めて、ドアノブを捻った。ドアをくぐろうとした瞬間

俺のど元に刃が突きつけられた。

「うっ、……」

「動くな、……って何だ、貴様か」

改めて見返せば、刃の持ち主はヴァリエだった。

「桜井は!？」

部屋の中には、桜井のほかにも大竹とクラスメイトの女子が居るようだが、入り口の前でヴァリエが通せんぼしているため中に入れない。

「どうやら現状は理解しているようだな。安心しろ、気絶はしているが、それ以外異常は無い」

その一言にホツとした。それからすぐに聞く。

「何が原因かわかるか？」

「いや……ただ、何者かから直接何かされたわけではない。どうやら催眠ガスのようなものだと思うが」

催眠ガスといってもここでは霊的な力によるものだろう。とすれば、たまたまホテルの外部に居た俺や藍那は、その被害を回避したわけだ。

「そうだ、上谷が見当たらない。もしかしたらあいつもどこかで回避してるかもしれないな」

「そうだな、とにかく私はここを離れるわけにはいかない。そっちで何とかしてくれ」

「わかってるって」

そういい残して、ヴァリエに背を向けた。

エレベータに乗るかの間にケータイが鳴った。どうやら電話らしいが、知らない番号だった。

「もしもし?」

『あ、もしもし? 京平?』

「その声……藍那か?」

『うん。そんなことより、そっちは無事なのね?』

「ああ、やっぱりそっちにもこの現象は起きてたか」

『今、涼さんに電話して聞いたんだけど……とにかく一度会って話したいわ。エントランスまで来れる?』

「わかった。今すぐ行く」

そう言って電話を切った。エレベータの一階を連打してドアが閉

まるのを待った。

「藍那！」

エントランスも静けさに包まれている。その中に、藍那とリリースが佇んでいた。

「遅い！ とにかくこっち来て」

藍那は、ホテルの出入り口である大き目の自動ドアの前で手招いてる。そちらに駆け寄ると、ある違和感に気が付いた。

「開かないのか？ このドア」

自動ドアというのは、皆さんもご存知だと思うがドアの前にセンサーが付いていて、人が近寄ると開く仕組みだ。ところが今、俺たちの前にあるこのドアは、藍那が正面に立っていても開く気配が無かった。

「開かない、じゃなくて開くことが出来ない、ね」

そういつて藍那はおもむろにドアから距離を取り、そして渾身の蹴りを放った。

普通なら碎けてしまうはずのドアは、衝撃を吸収するかのようになり、そして平然と佇んでいた。

「……この有様ね、閉じ込められてるわ」

「そんなことより皆が気絶しているのはどうしてなんだ？」

俺の質問には首を横に振るだけで答えた。

「とにかく、さっきは桜井君に電話してアンタ番号聞いたんだけど、アンタが直接電話したほうがいいわね」

藍那の言う桜井君は涼のことか。

俺はズボンから電話を引っ張り出し、素早くコールした。

『もしもし、京平か？』

「ああ」

『状況は藍那から聞いてる、こつちで調べたんだが……おそらくだが、現在そこでは、霧状になった霊力がばら撒かれているだろう。』

「霧？」

『そうだ。一種の催眠スプレーだな、霊製のな』

「それで俺たちは外に出ていたから回避したのか」

『あるいは、お前達は既に霊的事象に体が慣れているということもあるかもしれないな。とにかく気絶した人々は大丈夫だろう。それよりも……そんなことをした犯人が気になる。いつも通りの悪夢なら問題ないが、』

「どういうことだ？」

『いや、今はそれよりも屋上、または上の階を目指してくれ。霊の霧は上から下に流れるものだ、ホテル全体に霧を流すには屋上から流すのが効率がいい。あまり危険なことに関わって欲しくないが、見過ごしてはいけないことが進行しているかもしれない』

「わかった。あと、閉じ込められてるんだが、どうしたら出られるようになるんだ？」

『ふむ、その形式にもよるが結界が使われているのだろう。本来は悪霊を閉じ込める役割を果たすのだが、霊が充満している建物を封印しているのかもしれない。どの道、結界を解く鍵も犯人が握っているのだろう』

「鍵？」

『形式によって結界は解き方が違う。お札を張り巡らせるやり方や、精霊像に霊力を注ぐやり方なんかがあるな。とにかく犯人を見つける必要がある』

「わかった、またなんかわかったら電話する」

電話を切って、藍那を見る。つい先ほどホテルの外で言われたこと。俺の身に潜む別の何か、そして今ホテルで起きている異常。

「行くしかないな」

俺の一言に、藍那はしばらく間を置いて、

「そういつと思ったわ。行きましょう。こんなことをした奴は懲らしめてやらないとね」

彼女ははにかみながらそう言った。

その時、

カラカラカラ……という金属の棒を引きずるような音がした。

音のする方、ロビーの奥にある二階の食事をする広間へ通じている大階段から人影のようなものが歩いてくる。はつきり『人』と言えないのは、それがあまりにも長身で体が大きかったからだ。

「あれは……武者？」

その人影は近づけばわかる。その身に赤褐色の鎧をまとい、だらりと垂れた腕には2メートル近くもある長い刀を引きずっている。顔は兜で覆われているため判断できないが、その隙間から視線がギラギラしている気がした。

そして、明らかに味方な気がしなかった。

「京平、気をつけて、何か不穏な気配がする」

真は既に本来の力を取り戻し、大人状態になっている。奴はこちらに敵意を向けているわけだ。

「そうね、リリース。わかる？ 敵は奴一人じゃないわ」

藍那の一言に軽くうなずいたリリースは、おもむろに鞭を取り出す。その間にも、鎧武者はこちらに近づいてくる。

それにあわせて金属を引きずる音は増していく。

「京平……行くよ……！」

その一言、一拍で鎧武者の懐まで真が飛び込んだ。彼女の手に灯る炎からは、包丁が飛び出し、必殺の一撃を御見舞いする。

ガギーン！！ という金属のはじける音がすると同時に、真の包丁が吹き飛んだ。

武者は右手に刀を持っているが、空いているほうの左手で包丁を

弾いていた。普通なら手のほうが斬れてしまいが、それでも鎧に包まれたその体が傷つくことは無かった。

武器を失った真に、至近距離から神速の動きで刀を振りかぶる。

しかし、真は二メートルもある刀を、体を捻るだけで回避する。

刀を振り下ろした武者は、隙だらけになったその体に烙印を受ける。

「真！！ 危ない！！」

咄嗟に叫んだ俺の声に、身を固めた真だが、武者の強烈なニースマッシュを腹部に打ち込まれる。真はその反動を利用して武者から距離をとる。

「ハア、ハア、これでもうお終いね」

勝ち誇る真は烙印を操り、武者を服従させる。

「倒れる！」

その一言で、武者は滑稽に床に這い蹲る。

まさに止めを刺そうとした、

その刹那

空を切るように刀が飛んできた。

軌道をたどれば、ロビーを、俺たちを囲うようにさまざまな格好

をした武者、武士、侍が現れてる。

「どつやら……一筋縄ではいかないみたいね」

ついに姿を現し始めた敵に真は飽きたように言った。

第四十話 「交錯する刃」 (後書き)

ついに……………

一周年です。(笑)

とうとう一年たってしまいました。そして一年で四十話までしか進んでいないという……………

この作品は練習的な意味もあつたのでサクリと頭の中にあつた適当な話だったので、いっこうに終わりそうにありません。二周年なんていわないではやく終わらせたいなあ……………なんて思っていたり。

飽きっぱい自分はよく一年も続けられたなど、ちょっと驚いています。

よろしければこれからもよろしくお願いします。

第四十一話 「人間の力」

「小僧共、大人しく従えば……首を切るだけで済ましてやるう」
俺たちを囲う軍勢、そのうちの一人、灰色の着物を着た侍が、静かに言い放った。

それと同時に、俺たちを囲む輪が少しずつ狭まってきた。

「（いい？ 私とリリスがまず敵の注意を引くからその隙にアンタ達は屋上を目指して）」

肩越しに藍那が囁いた。

「（ダメだ！ こいつらは全員上級の悪夢だ。神社の時のように楽には勝てない。危険すぎる！）」

俺の反論にも、藍那は微笑みながら答える。

「（大丈夫！ 誰かが屋上には行かなくちゃならないでしょ？）」

「行くわよ！ リリス！」

俺に有無を言わせず飛び出し、リリスの鞭に烙印が施される。それを、俺たちを囲う武者達の輪を薙ぐように振り回す。

鞭に触れたものたちは、その接点を基点として爆発していく。

「ほら！！ ぼやぼやしてないで行くよ、京平！！」

真に呼ばれ、俺は、ロビーの端の方にある無骨な階段に駆け込む。ロビーには正面に大きな階段があるのだが、こちらは二階のレストランにしか通じていないので屋上を目指すならエレベータかこの階段だけである。エレベータは危険が多いので使用しない。

幸い、階段側には悪夢が待ち伏せしていることは無く、後ろを横目でチラリと見れば、リリスと藍那が楽しげに踊るように武者達を圧倒している。とりあえず大丈夫そうだ。

階段を真を前にして勢いよく駆け上がると、後ろから鎧がすれるような音と足音が聞こえてきた。

ちょうど階段を二階と三階の間の踊り場のようなところで、上から武士が流れ込んできた。

「京平！！　ここは狭くて危険かも！！」

せいぜい二人並んで窮屈な幅しかない階段で、大勢の武士を相手に出来るはずも無い。まして真は、どちらかといえば、相手の攻撃を回避して反撃を取るタイプだ。狭い空間では、それも上手くいかない。

ということとは、真は烙印を使って大規模な攻撃を仕掛けるだろう。そうなれば、狭くて危険、というのは、真が俺を巻き込んでしまふということだろうか。

後ろから聞こえる階段を上る音はもうすぐそこまで来ている。

俺は急いで階段を駆け戻り、二階に出る廊下へ飛び出す。

真を背後に感じながら。

二階の廊下は、細い通路からレストランへ通じている。真が階段の敵を排除できたならば戻ろう。

(どの道、俺が居てもあんまり役に立たないしな……)

そう思っていた時、後ろから追ってきていた武者の一人が俺を追いかけて通路に入るのが見えた。赤い衣の侍で、肩に矢が刺さっているところを見ると、戦死したのだろう。

奴は手を、腰に挿した刀に添えている。これを見れば、自分では歯が立たないことは嫌でもわかった。だから俺は素直に逃げるしか出来なかった。

通路を抜ければ、そのままレストランに出る。レストランには、ほんの数分前まで夕食の準備がされていたのだろう、縦長の並べられたテーブルの上には燭台が並び、脇では準備をしていた人たちが気絶していた。

俺の足の速さは決して遅くないが、後ろから追ってくる侍との距離はもう数メートルも無い。

このままでは必ず追いつかれる。

「クソッ、……喰らえ!!」

俺は適当にテーブルの上においてあつた燭台を掴み、思いつきり投げつけた。それは直線の軌道を描き、侍の顔面に直撃する。

「クツクツク……痛いナア？ やはり人間ではその程度の力しか持つて居ないか……」

侍は意外なことに立ち止まり悠長に構えた、当然ダメージがあるようには見えない。

だが、立ち止まってくれたのは意外だった。ここは相手の会話に應じて時間を稼ぐしかない。

「死んだら力も何も無いだろ、お前は……」

「ああ、死んだ。大昔、戦で死んだ。その時俺は天下無双を夢見ていた哀れな男だった。だが、今となっては死んだ方が良かったのかもしれない。今、こうして人間を超越した存在になることが出来たのだからな」

(……なんなんだよ、こいつ……)

むちゃくちゃな理論に戸惑いながらも、少しずつ後退し距離を取ろうとする。しかし侍もそれに合わせて近づいてくる。

次第に、レストランのホールの角にまで追い詰められた。敵はまだ悠長に構えているが、常に片手を刀に添えているところを見ると、不用意に近づけば抜刀の一撃で首が飛ぶだろう。

(考える……せめてこいつを動けなくすることが出来れば……)

「フッ、そろそろお終いだな。大人しくしていれば痛みを感じる前に死ねるかもな」

そういい、しなやかに刀を抜刀した。ゆっくり抜き放たれたのは白銀の身を持ち、光の反射でまばゆく輝く刃を持つ、まさしく刀だった。

もう後ろには下がれない。壁にはさまれた俺はもう万事休すだ。

俺は真がいなければ、悪夢一人にたやすく切られて死ぬ存在。

俺の中に眠る正体不明の霊なんて助けてくれない。

ましてその霊にすがろうとしていた弱い自分。

誰一人助けることの出来ない自分の力。

侍に睨まれ、手に汗がにじむ。

俺の体は震えていた。

真は……来ない。

やがて侍は、唇を愉快そうに歪めて言った。

「……………死ぬ」

「チクシヨオオオ!!!」

刀を構え、俺に必殺の斬撃を食らわそうとした、白銀の刃が俺を襲う、その刹那　俺は手近なものをとにかく掴んでいた。それは、消火器。

一見何の役にも立ちそうにないが、俺は咄嗟にピンを抜き、ホースを構え、強く握る。

消火器は、爆発的な空気の抜ける音とともに内蔵された粉を噴出す。ややピンクがかった粉は、侍の顔面を多い尽くし、視界を殺す。

「!?　なんだこれはア!!!」

さらに、侍は口ぶりからすると昔の人のようだ。

つまり現代文化を知らない。まして消火器なんてものは聞いたことも無いだろう。奴にとっては正体不明の現象に完全に惑わされ、構えどころか、俺すらも見失っている。

このチャンスを俺は逃さない。空になるまで噴射した消火器で侍の粉まみれの顔面を殴り倒す。混乱した侍は足をもつれさせその場に倒れこんだ。

俺はその場から走り去り、真とはぐれた階段まで戻ろうとする。

(なんだ……俺一人でも出来るじゃないか。そう、頼らなくなつて)

自分の足がまだ震えてることに気づき、やっぱり心細くなった。早く真に会いたい、そう思いながら通路を抜け、階段まで戻ってきた。

しかし、そこに真の姿は無く、ただ床の抜けた階段があるだけだった。

階段に大穴が開いていた。直径三メートルほどで、二階と三階の間の踊り場がそのまま抜けていた。下を覗けば、打ちのめされた武士が何人かいた。

「……真は居ないか……とりあえず上にはいけそうに無いな。一旦下で藍那と合流するか」

階段を警戒しながら下った。

ホテルの中の激闘はまだ続きそうだった。

第四十一話 「人間の力」(後書き)

ホテルはまだつづきます。

ながくなりそうです。

第四十二話 「墮ちる罫」

俺はロビーの正面にある大きな階段から一階に下りることにした。この階段は、二階のレストランと直結している、その分レストラン以外には通じていない。もしホテル中に悪夢が潜んでいるなら、この階段を使った方が安全だ。

「真は……無事なのか……」

俺と真の間にはつながりがある。これでお互いの存在がぼんやり把握できるが、このホテルは今、何者かによって撒かれた靈気によって包まれている。これは靈に耐性の無い人を気絶させるだけでなく、つながりでお互いを把握することを阻害していた。

階段の手すりに体重をかけながら、ずり落ちるように下る。

ロビーには、先ほどまでの多くの武者は居なく、最後の一体に、リリスが止めの一撃を放ったところだった。見たところ彼女達には目立った傷は無いが、それでも無傷というわけではない。ところどころ切り裂かれた痕がある。

「ふう、これでおしまいね」

最後の一体は、糸の切れた人形のように吹き飛ばされ、崩れ落ちた。

そこで藍那は、階段をやっと下りた俺に気が付いた。

「どうしたの？ 私なら無事よ？」

そっぴいなながら明るい笑顔を見せる。太陽のように明るい素顔を少しも隠そうとしないところに彼女らしさを感じた。

「すまん、真とはぐれたんだ。たぶん無事だと思うが、俺一人じゃ捜しに行けない……」

人間なら当たり前だが、ここに居る悪夢は普通の者達とは格が違う。その中を守護靈も無しに歩き回るのはもはや自殺行為である。

「守護靈とはぐれたの！？ すぐに捜しに行かないと、」

藍那は意外にも焦っているようだ。

「真なら大丈夫だと思っけどな……」

「そうじゃないわ、守護霊は主とのつながりが強ければ強いほど霊力も増すのよ。アンタが側にいてあげないとやられてるかも知れない」

確かに、これまでも数々の戦いを潜り抜けてきたが、そのどれも二人の力を合わせたものだった。今更何を言っていたのだろうか、やっぱり俺は真の側にいて一緒に戦わなければならない。

それは、俺の中に眠る正体不明の霊ではなく、俺自身の意思でだ。「とにかく捜すにしても下の階には居ないみたいね。どの道屋上を目指すんだから上に行きましょう」

「そうだな」

そう入言ったものの、階段は途中で大穴が開いているため通れない。必然的にエレベータを使わざる終えない。

幸い、辺りの悪夢はすべて藍那たちが倒したため、安全に乗ることが出来た。

この状況でも、通常通りに動くエレベータに感心しつつ、少しずつ上に上ってきた。

「なあ、屋上にはどんな奴が居ると思う？」

「そうね、このホテルに居る悪夢をすべて従えているなら相当の実力ね。私達が力を合わせても勝てるのかな」

そう話しているうちに、エレベータはガゴン！！という音を出して止まってしまった。階数にして6階と7階の間である。

「どうした？ 何があったんだ!？」

そうしているうちに、エレベータの明かりは消え、ノコギリで無理やり鉄を切り落とそうとするような奇怪な金属音が響く。

「まずい！！ ワイヤーが切られる！！ 敵は上よ！！」

藍那がそう叫ぶと同時に、リリスが鞭を、エレベータの天井に叩きつける。その威力で天井が吹き飛び骨組みが露になる。

エレベータの上には、頬をげつそりとした落ち武者のような男が、刃こぼれをしてノコギリの様になった刀でワイヤーを削っている。

「リリース！ 早く！！」

天井が吹き飛んだ衝撃で、エレベータは急停止したが、序々に細くなるワイヤーのおかげで、エレベータが傾く。

俺は脱出のため、ドアに手を掛け、こじ開けようとする、しかし硬く閉ざされた扉はなかなか開かない。その間に、リリースの第二撃は、落武者の顔面を捉え、奴を叩き落とす。

「畜生！！ 開け！！」

力いっぱいこじ開け、やっと手のひらが通るぐらいの隙間が空く、その間にもエレベータの本体は不自然に大きく揺れた。

「なっ！！ あいつ、横に張り付いているわ！！」

落武者は叩き落されてもエレベータの側面に刀を突き立て、こびり付いている。その衝撃でエレベータがもう一段傾き、ワイヤーに負担が掛かる。

「クソッ、ひらけえええ！！」

俺の手はエレベータの扉を少しずつ開く、しかし時間が足りない。辺りに嫌な音が響く。

破裂音に似たワイヤーの切れる音がした。

刹那、俺の体は、重力に晒され、宙に浮く、奇妙な感覚が襲う。

「グッ……！??」

一瞬の衝撃が走り、空を自由落下するはずだった俺の体は、抱えられる形で吊るされていた。

「もう……あぶないわね」

見れば、俺と藍那は、エレベータがあるべきはずの縦長の空間にリリースに抱きかかえられていた。リリースは片腕で俺たちを抱え、もう一方で切れたワイヤーの上の部分を掴んでいる。

「リリース、大丈夫？ 咄嗟に烙印でエレベータを吹き飛ばしたのね？」

どうやら、俺たちの乗っていたエレベータはワイヤーが切れると同時に、リリスが吹き飛ばし、俺たちは助かったわけだ。

「……それよりリリスさん。あの……」

「何かしら？」

宙にぶら下がる状態で俺は尋ねる。

「あ、当たってます。……藍那が」

リリスの腕は長いわけではない。人を二人も抱えるのは大変だろう。

「あ、当たってるって何がよ！！ ちょっとアンタがくっ付き過ぎなんでしょ！！？」

「な、なんだよ、暴れるな！！ 危ない！！」

リリスの腕の中で暴れる藍那を静めて、六階の扉を突き破り、黒い縦長の空間からやっと脱出した。

「ふう、また上を目指すか……」

息を整え、また階段で上を目指すとした時だった。

「ほう、貴様らか。まだ小僧ではないか」

六階の廊下の奥、バルコニーへ続く扉の手前に一人の鎧武者が立っている。彼から発せられた冷たい、冷水を浴びせたような声は廊下に響き渡る。

「なんだ、お前は……」

奴はこれまでの悪夢とは明らかに存在が違う気がした。

周りを取り巻く靈気のようなものも、静かに、戦に備え、渦巻いている気がした。

「我が名は夜籬やなせ。見ての通り、はぐれ侍だ」

彼は刀に手を掛けながら手招きして宣言した。

「我と決闘せよ」

「そんなことして何の徳があるのかしら？」

藍那が自信に満ちて言った。

「ふむ、おぬしが生き残れば、何でも叶えてやる。ここから去るのもよし、屋上へ誘うのもよし」

「……嫌って言うても通してくれそうにないしね。いいわ、乗ってあげる、その決闘ってやつに。ね？ リリス」

藍那は自信に満ちて歩みだした。

侍の待つ、決闘場、バルコニーへと。

第四十二話 「墮ちる罫」(後書き)

この話は一回保存に失敗して書き直しました。

もしかしたらクオリティがいつもより低いかもしれません。(い
つも低いですが)

第四十三話 「夜を薙ぎ払う刀」

ホテルの六階、廊下の奥にはガラス張りの扉があり、そこを抜ければ、長方形のへり出したバルコニーがある。観葉植物やベンチがあり、横幅は10メートルほどの余裕があり、手すりは高めになっている。

そのバルコニーは今、決闘場に化していた。
「いつからでも良いぞ」

藍那と対称の位置に立った夜薙は、特に刀を抜く様子も見られない。

それに、藍那とリリースも特に構えがあるわけでもない。

「そうね、じゃあ私達の好きなタイミングで行かせてもらおうわ」
意気揚々と宣言する藍那には微塵も恐怖を感じさせない明るさをまとっていた。

俺はそれをバルコニーの入り口から眺める。というのも、俺もバルコニーに出たかったが、真の居ない俺はただの足手まといだそうなので、決闘に足を踏み入れることは出来なかった。仕方なくここで眺めているわけだが。

「ふう、……じゃあ、行くわよ」

頬をなでる夜風が止んだところで、戦闘が始まった。

「リリース！ 速攻で決めるわよ！」

その声にあわせて、リリースの鞭が走る。一直線に伸びた鞭は、烙印を纏い、夜薙を吹き飛ばそうとする。

「ふむ……」

あと数センチ、鞭の先端が迫る。

しかし、リリースが放った鞭は、夜薙に触れる直前で何かになぎ払われた。

「何……？」

リリースも思わず疑問を声に出す。見れば夜薙は、刀を抜刀した構えになっていた。

「これは……抜刀術ね」

藍那が、囁いた。「抜刀術？」と俺は思わず聞いてしまった。

「そう、簡単に言うくと剣術の一種ね。鞘から抜く時、鞘をまるでレールに見立てて助走を付けて走らせるのよ、普通に斬るよりも強力ね」

そう話してる間にも、夜薙は刀を再び鞘に戻す。

「弱点は、一度抜いてから戻すのに時間がかかることね」

リリースが、テストで間違った生徒に正解を教えるような口調で言った。

なるほど、俺は邪魔しちゃったか。

「ふふっ、それを知ったところでこの夜薙の刀は破れまい……」

「えらく自信家なのね。まあいいわ、私も自信だけなら負けないから！」

そう言う間に、リリースの鞭が走る、今度は曲がりくねった軌道で夜薙を狙う。

そしてまた、触れるか否やの距離で抜刀術によってなぎ払われる。

「何度やっても無駄だ……」

夜薙は、抜刀した刀を鞘に戻そうとする、しかし

「む!!!」

夜薙の元に瓦礫が降り注いだ。

なぎ払われたはずのリリースの鞭は、バルコニーのある上の階、その外壁を叩き壊し瓦礫の雨を降らしていた。真っ直ぐに伸びた鞭では、なぎ払われてしまうが、弛ませた曲がった軌道の鞭なら、なぎ払われた反動を生かして別の標的、外壁を攻撃することが出来る。

つまりフェイント。

一見、攻撃に見えるものでも、相手の構えを崩すためのものでもあったりする。

事実、夜薙は降り注ぐ瓦礫を刀を使って弾かざるを得なくなった。

刀を鞘に戻す時間が無い。

「抜刀術はもうできない！ リリス！！ 今よ！！」

藍那の声とともに、リリスが距離を詰める。

反射的に夜薙も刀で応戦しようとするが、

「遅い！！」

リリスの手のひらに烙印が施される。それは弾けて衝撃波を生む。衝撃は夜薙の刀を吹き飛ばす、その隙にリリスの鞭が入り込む。

絶対に避けることの出来ない距離。

しかし……

「ふむ、おいしい」

夜薙には鞭は届かなかった。

そして、その手には弾かれたはずの刀が握られていた。

「！？ どうして？ 確かに弾いたはず……」

リリスが事態に驚愕している隙に、夜薙は悠々と刀を仕舞い、弾かれた刀も拾いに行った。

「さて……決着を付けようかの。御主らではこの業を破れまい」

夜薙は再び、抜刀の構えになって行った。

「くっ、まずいわね……」

藍那も、彼がどんなトリックを使っているのかわからないようだ。

しかし、傍から見ていた俺はふと気が付いた。

（刀が……一本しかない？）

先ほど、リリスが刀を弾き、鞭の攻撃を仕掛けた。しかし肝心の鞭の攻撃は突如出現した二本目の刀によって阻まれてしまった。

しかし、今現在、夜薙の腰に収まっている鞘はどう見ても一本しかないのだ。

（確かにさっき、刀を納めて、しかも拾ってたはず……）

抜刀術は一撃が強力だ。しかしその弱点は、第二撃を放つために

は刀をしまう必要がある。夜薙は抜刀術に特化した侍に見える、それならば、弱点を補いたいはずだ。

見えない二本目。

(なにか……ヒントは……)

リリスと夜薙の戦闘を思い返す。

なんだ、そういうことか。

「藍那、フェイントだ!!」

俺はバルコニーの入り口、決闘場の蚊帳の外から叫んだ。

「見えている刀はフェイントだ!! 見えない刀が本命だ!!」

見えてる刀と見えない刀の二段構え。おそらく、一本目は投げ捨てるぐらいの覚悟でやっているのだろう。

「フェイントね……面白いじゃない」

藍那の顔に自信が戻る。

「リリス、連撃がいいね」

コク、とうなずき、次の瞬間にはもう鞭を振るっていた。

一飛びで距離を詰める、と同時に鞭が舞う。空で円を描くように振るった鞭、その動きは読むことが出来ない。その内の一撃が夜薙を目掛けて飛来する。

夜薙はそれを横に飛ぶことで回避する。

空を切った鞭はそのまま直進し、バルコニーの端にあつた観葉植物の植木に絡む。

それを強く引くことにより、砲弾のような速度で植木が飛ぶ。

「チツ、まずいか……」

夜薙は思わず声を漏らし、抜刀術によって植木を吹き飛ばす。

その隙を狙い、空で円を描いていた鞭が夜薙に目掛けて飛来する。

「仕方ない……手段を選んでおられん!!」

夜薙は、腰辺りの空に手を掛ける。一見何も無いように見えるそこには、確かに刀が存在していた。

勢い良く抜刀された刀は、……鞭をなぎ払うことが出来ず、空を切った。

鞭が夜籬の腹部に直撃、体ごと吹き飛びベンチに突撃し、手すりに当たって停止した。

「ふう、何とか勝ったみたいね……」

藍那は安堵と勝利を確信した、
だが、俺には最後の空を切る一撃がどうも腑に落ちなかった。

ガゴン！！

という、轟音とともに、直方体のバルコニーに、対角線状の切れ目が入った。

それは、ちょうど夜籬と対峙していた藍那が外側に来る位置、つまり、藍那が落ちる位置だった。

「藍那！！」

リリスが、藍那を助けるために飛ぼうとした。……だが、

リリスの背中に横一文字の斬撃が奔った。

その衝撃でリリスはその場に崩れ、片足を付いた。

その間にも藍那の足場は崩れ堕ちる。

「藍那あ！！」

俺は思わず走り出し、手を伸ばそうとした。

その途端、目の前を銀の閃光が横切った。

それは夜籬の刀、刀はリリスの肩に直撃し、リリスは悲鳴を上げて倒れこむ。

「動くな……小僧、首が飛ぶぞ……」

這いずり上がってきた夜籬のもう一本の刀は俺のど元に突きつ

けられる。

その場に凍りついた俺の視界の奥では、藍那の足場が完全に崩れ、闇夜の空に吸い込まれていく所だった。

第四十四話 「すれ違いの時」

「おい！ 鼠！！ 居るんだろう！？」

夜薙は、俺の喉元に刀の切先を突きつけつつ誰かに向けて叫んだ。硬直している俺の視界には、背中に刀を喰らって倒れこんでいるリリースしか映っていなかったが、不意に三叉の槍が横切った。

見れば、俺の胸ぐらいままでしかない身長の方が顔をすっぽりとフードで隠していた。

「なんだよ、夜薙の爺。俺も忙しいんだぞオ？」

枯れた、でもどこか子供のように高い声で話す背の低い男は、三叉の槍を俺の喉元に突きつけながら答えた。それと同時に、夜薙は刀をしまう。

「この小僧をどこかに監禁しておけ。こっちではまだやる事がある」

夜薙は苦しそうにリリースの前に立った、その後姿を眺めながら、鼠と呼ばれた男が舌打ちをしつつ、俺の腕を後ろに回してロープで縛り始めた。

「小僧、君の守護霊はどうしたのかなア？」

「……………」
「この男には何も言う必要はないだろう。」

「ちえ、だんまりかよオ？」

俺の背中を押しながら歩き始めた。その間も俺の喉元には槍が突きつけられている。

「おら、もっとテキパキあるけよオ？」

歩かされるまま俺はバルコニーを出た。

連れて行かれたのは同じ階の空き室だった。

部屋の真ん中に倒され、足にも縄を縛られた。

「まあ、しばらくすれば楽になるから、安心してくれよオ？」
そう言い残して鼠は部屋を出た。

(さて……これからどうすればいいんだ？)

手と足を縛られ、身動きが取れない。幸い、口が封じられてないだけましか。

(それにしても奇妙だな、後で楽になるってのは、あとから誰か俺を始末しに来るのか？ いや、それならあいつの持つてる三叉の槍さらに言えば夜薙があのまま首を切ればよかつたんだ。今も俺を生かしている理由は何だ？ ……とにかくここから出るのが先か) 数分間の思考と状況を把握、せいぜい十分ぐらいもがいていた。

鼠は部屋を出たつきり、どこかへ言ってしまったようだ。

俺はとりあえず、ツインベットの部屋を転がり、壁のところまで来る。何とか体を起こし、うさぎ跳びの体勢になり、とりあえず立ち上がる。

足に力を入れると、ハラリ、という具合に縄が解けた。

「ははっ、器用な奴じゃなかったのか」

もがいたおかげか足の縄は解けたが、腕の縄は解けない。仕方なくそのまま脱出することにする。

ドアノブを後ろ手でこじ開け、廊下に出る。

がらんとした廊下、その奥にあるバルコニーを見ても、誰も居ない。

(夜薙に……リリースも居ない……か)

藍那は落ちてしまった。その感覚が時間が経ってからこみ上げてきた。

まだ……無事かもしれない。その期待を込めて、俺は下を見下ろさず、上を目指すことにした。

「あれえ〜〜？ おかしいなア？ どうして廊下を歩いているのかなア？」

振り向くと既に三つ又の槍が俺に向けられていた。

「いけないなア、殺しちゃだめって言われてるけど……まア仕方ないよねエ？」

「クソツ、」

俺は急いで逃げようと走り出した。しかし、腕を縛られてバランスが悪く、転んでしまった。

「あれあれエ〜？」

「く、くるな！！」

地面を這うように俺は後ずさりする、それをわざと面白がるように鼠が槍で追いつけ回す。

そのフードの中に見える目玉には狂喜が浮かんでいた。

「ハア！！ その足、切り落としてみようかなア？」

「やめろ！！！」

鼠が槍を大きく振りかぶり、俺の足を切ろうとした、

その刹那

「ゲエエツ！？」

鼠が何者かに真横から叩かれた。

真つ黒な、ベルトを幾乗にも重ねて創られた腕のような太い槍。

「大丈夫ですか？ 金城君」

俺を助けてくれたのは紛れも無く、上谷だった。

「か、上谷あ……無事だったのか」

「どちらかという金城君の方が危険でしたね、守護霊はどうしたんですか？」

俺は上谷にこれまでの経緯を全部話した。

それを聞いている上谷は静かにうなずくだけだった。

「それで、立花さんの無事を確認していない……と」

「ああ、まだ、無事かどうかわからない」
俺は内心、上谷が助けてくれていたのではないかと期待していた。が、それも幻想に過ぎなかったようだ。

「とにかく、この事件の首謀者を突き止めるのが先なのでしょうね」
俺は上谷の後について行く。
階段を上る、屋上まであと少しだ。

バルコニーが崩れたとき、叫び声をあげることすら出来なかった。
た。

彼が差し出す手を握ることすら出来なかった。
リリースが斬られた。自分を助けようとしたために、敵に背を向けた。

私は落ちる。

漆黒の空へと。

自分は死んでしまうのだろうか。

死んでからはどうなってしまうのだろうか。

自分の居ない世界は、一体何が変わっているのだろうか。

……イヤダ。

……そんな世界は嫌だ。

「……、え？」

急に浮遊感が襲った。

気が付くと自分の体は、宙を浮いていた。
いや、とある男に抱きかかえられていた。

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

彼の顔には見覚えがあった。かつて、自分が原因の誘拐事件、その犯人の守護霊。

セーレが、天使のような優しい顔で自分を支えていた。その背中からは、天使の純白の羽が羽ばたき、彼の肩には主である藤崎が腰掛けていた。

「こんばんは、憎きお嬢さん。本当なら突き落としてやりたいところだけど、そういう状況じゃないのよね」

敵意むき出しの顔で彼女は言ったが、助けてくれたのは事実だ。

「早く上に戻って！！ リリスが危ないの！！」

背中を斬られ、うずくまっていたリリスを思い出す。自分よりも彼女の方が危険なはずだ。夜薙はダメージを負っているが、それでも傷ついた守護霊や、人間など、殺すのはたやすいことだろう。

「わかってますよ、ほら、見えてきました」

セーレはふわり、と宙を舞い、バルコニーに降り立つ。そこには夜薙、そして傷ついたりリリスだけ。

「……アイツが居ない？ どうして？」

頭に嫌な予感が走った。が、しかし、その考えもおかしい。もし殺されていたなら死体が残る、下に落したとしても自分たちが気づく。

「吸収、かもしれないわね。まあいいわ、私には関係ないし」

藤崎は依然として勝手なことを言い、セーレはゆっくり歩いて、リリスの元に寄り、回復を始める。

「貴様ら……何者だ？」

夜薙はリリスが回復しているのを黙認しながら問う、その姿には確かな疲労が見えた。

「ねえ、どうしたの？」

「む？」

「アイツをどうしたのかって聞いてんのよ」

「さあな。既にどうなっただいようと関係のないことだ」

「どうしたのかって聞いてんのよ！！！！」

感情がそのまま言葉に成って口をつく、その声に共鳴するかのよう
にリリースが立ち上がった。

「いくよ……リリース！」

夜薙は構える、思わず、その刀を握る手が震えていたかもしれな
い。

それぐらいに彼女達は眩しかった。

第四十五話 「終着の侍」

「ほらほら!! そんなんじゃあたし達の鞭は防げないよ!!」
リリスと合流した藍那は、それまでとは別人のように激しく舞うように戦っていた。

「心境の変化つてやつね、まあどうでもいいんだけど」

藤崎は、セーレの肩から降りて、バルコニーの手すりに優雅に腰掛けていた。

「それにしてもすごいですね」

セーレも腕を組んで寄りかかっている。

リリスの振るう鞭は変幻自在の軌道で夜薙を襲う、時には蛇のように曲がりくねって、時には直線的な一撃、そして時にはホテルの外壁を壊し、その瓦礫による礫など。

それに夜薙の武器である二段構えの抜刀術も、そのトリックが見破られているので、容易く攻略されてしまう。

加えて藍那の心境、さらに言えば戦意も先ほどとは段違いに燃え上がっていた。

守護霊と主のつながりは、互いの気持ちもつなく。

今の二人には、夜薙など敵ではなかった。

「グフツ、、!?!」

鞭が夜薙の鳩尾に直撃し、思わず膝をつく。

もともと夜薙も先ほどの戦闘のダメージが蓄積しているため、状況が悪い。

自慢のトリックアートのような抜刀術も、タネが明かされていれば何の意味も無い、まして、リリスを倒したとしてもセーレがいる。奴は他の守護霊とは桁違いの霊力を秘めていた。

(このままでは確実に勝てない……)
もともと、生前も侍として生きてきた、そこには当然プライドと
いうものもある。

それを捨てるのは容易いことではない、だが、更なる高み、更な
る力を求めるには捨てなければならぬときもあった。

しかし、

(これはただの卑怯ではないか……)

夜薙の頭の中では一つの秘策が思いついていた。

しかし、それはこれまでの侍としての、武士道なんでクソ喰らえ
とでも言うかの如く、卑怯かつ弱者だった。

プライドか、それとも存続か。

頭をよぎった二つの道、だが、答は既に決まっていた。

静かに、刀を抜く。

右手にも、そして左手にも。

「二刀流、か。面白いことをするなあ」

セーレが静かに言った。

「ふうん、それで勝てるのかしら？」

藍那は余裕たっぷりに言った、それもそのはず、本来、まともな
侍なら二刀流などしない。

まして、今の彼女達は無敵感が漂っていた。

「それでもなお……突き通すのだ!!」

夜薙は最終特攻を仕掛けた、両手に刀を構えて、捨て身の突進。
当然反撃としてリリスの鞭が飛来する。

これを夜薙は右手の刀で吹き飛ばし、さらに距離を詰める、すか
さず左手の刀で突きを放つ。……が、これはリリスが跳躍すること
で回避、続けざまに宙返りからの踵落としが、夜薙の脳天に直撃し踵

に施されていた烙印が爆発を起こす。

「どう？ リリスの烙印、『付加効果』の威力は。」

リリスの烙印は、施したものに触れたものに衝撃を与える。また、触れた強さによって衝撃の威力も変わる。踵落しの威力は計り知れないほどに倍増していた。

「ガッ、……ま、まだだ!!」

脳天から衝撃が手足まで波のように伝わってもなお、刀だけは放さない。

夜薙はその場に踏ん張り、持ちこたえる。それだけで、夜薙はまだ戦えると確信していた。

「!? リリス!」

至近距離の戦闘はリリスにとっては不利だった。まして二本の刀を振り回す相手は最悪だ。

急いで距離を取りたいが、夜薙の攻撃は素早く連続して繰り出されるため隙が無い。回避しきれずに体を切り裂かれ、バルコニーの端の方に追い詰められる。

「これで終いだアア!!」

夜薙の最後の一撃、二本の刀による突きを放つ。

これ以上後ろには下がれない、断崖絶壁のようなバルコニーの外側。先ほど藍那が落された漆黒の空。

リリスは躊躇なく、飛び降りた。

「リリス!!」

藍那も思わず叫ぶ。

その様子をセーレは依然として腕を組みながら眺めていた。

「終わったか……？ 自ら破棄するのか？」

独り言のように呟いた。

刀は鞘に仕舞わなかったが、構えを崩し、どこか呆然としていた。

途端、夜薙の足に鞭が絡みついた。

それは下方向に凄まじい力で引きずり込もうとする。咄嗟に手にしていた刀を床に突き刺し体を固定したが、これでは身動きが取れない。

バルコニーの下側では、一本の鞭を命綱よろしくぶら下がっているリリースが居た。

だが、このままではお互いに硬直状態が続く、セーレは手を下す気が無いのか、成り行きを見守っていた。

リリースは、少しずつ体重移動で勢いを付ける。

そして、決着は一瞬でついた。

鞭を勢いよく引き、反動を利用してリリースが一気に上まで上ってくる、その刹那、リリースの手のひらには烙印が施されていた。鞭に足を縛られ、身動きが取れない夜籬の胸にその手のひらがぶつかった。

それだけで、夜籬の体は爆発し後方へ二メートルほど吹き飛ばす。

勝敗は決した、夜籬の刀は主の手から吹き飛び、漆黒の空へ吸い込まれていった。

「終ね、……さあ言いなさい。アイツをどうしたの？」

藍那は、胸部を大破され、地面に転がる夜籬に呼びかけた。

苦しそうなうめき声の後、彼は口を開いた。

「……そこらの部屋に閉じ込めてある……」

「ふうん、ありがと」

その一言で、リリースに最後の一撃を下すように指示する。

だが、それは夜籬の叫びによって遮られた。

「まてッ！！ ただ閉じ込めているだけではない……当然、我が部下が監視をしている、その喉に刃を突きつけながら……」

それを聞いた途端、藍那の顔が曇る。

「どういう意味？」

「……我が指示さえあればいつでも殺せるということだ……」

「でも、どうやって指示を出すのかしら？」

リリースが横から反論した。

事実、夜薙はもう立ち上がることもすら出来ない。そんな彼が叫んだとしても、その声が届く保証も無い。もう彼にはなんの力も残っていない。

「情報網、があるのだよ」

「なに？」

聞きなれない言葉に思わず聞き返していた。

「情報網……このホテルを襲撃している悪夢は数多くいる。それぞれが独自に動いてるわけではない、ちゃんと計画があるのだ、その達成のため、情報交換は非常に重要だ。それは肌身離さず、つまりテレパシーのように思考を共有するのだ。……指令を出すなど容易い」

夜薙は静かに言った。

「奴など、今すぐにでも殺せる……なんならその首をここまで持ってきてさせようか？」

「やめて!!」

雑音に耳をふさぐように藍那が反射的に言う、その様を夜薙は見つめ、やがて呟く。

「……我が、刀はどこだ……」

「ど、どうすればいいの？」

藍那は訪ねる。

「何をすれば助けてくれるの!？」

縋る様に、夜薙に訪ねる。

「……我を回復させる」

セーレに視線を向けながら夜薙は呟いた。そこで初めて、セーレは腕を解き夜薙達の方へ歩み寄る。

「悪いけど……そうも行かないよ」

セーレには夜薙の指示に従う気は毛頭ない。それもそのはず、閉

じ込められている少年のことなど彼らにはどうでもいいからかもしれない。

それを悟った藍那は、セーレを阻止しようと、藤崎に迫る。

「やめて!! ねえ、貴方からもやめさせてよ!!」

その藍那を軽く突き飛ばし、首を振った。

「いいのか……? 小僧が死ぬぞ……」

「彼を殺させはしませんよ」

いった途端、バルコニーの床に円形の烙印が施される。

空間の支配。その烙印は、半円形の空間を隔離し、セーレの絶対的な支配下に置く。

そこからは……何者も、どんな現象であっても外部とのつながりが分断される。

それは、夜籬のテレパシーにも例外ではない。

「終わりにしましょう。それも、一撃で」

夜籬の倒れていた床、そこから高さ二メートルほどの氷柱が彼を貫通する。

(……終わり、か。どうせハツタリだったんだ。テレパシーなんぞありえない。……)

もし、テレパシーが使えたなら、早くから増援を呼ぶだろう。あんな鼠などでも居ないよりはました。そんなことは出来なかった。

プライドを捨てた卑怯なハツタリ。

もう、消えることに悔いは無かった。

セーレの烙印は、外部から見ればそこに、何も無いように見える。お互いはすれ違いながら、屋上へと歩を進める。

第四十五話 「終着の侍」(後書き)

第四十六話 「犯人」

俺は上谷の後に続いて階段を駆け上っていた。

ホテルの上層階まで達し、これまで幾度も行く手を阻んできた悪夢達も、上谷がいるからなのかさっぱり見かけなくなった。

箱型の構造をしたホテルで、発生したこの事件。いまだ不明なところが多すぎた。

「なあ、上谷。この事件の犯人は一体何者だと思う？」

俺の先に行く上谷、その背中に問いかけてみた。

元々俺よりも霊に関しては詳しいらしい彼とはほんの先ほどに合流したばかりで、彼がそれまで何をしていたかも知りたかった。

「そうですね、僕も断言は出来ませんが、それでもこれだけの大群を束ねるには相当の力を持ったボス、あるいは全員が共感できる『なにか』があるのではないのでしょうか」

上谷の言うことを聞いて、改めて自分の行動を思い返して見る。

「そういえば……なんで俺は殺されなかったんだ？」

夜籬も、あの鼠だって最初は俺を閉じ込めておくだけにした。いまさら彼らが情けをかけたとも考えにくい。

俺が生きている方が都合が良いのか……？

「さあ、もうすぐ屋上ですよ」

その一言で俺達は足を止めた。

無骨で飾り気の無い階段はいつしか行き止まりの屋上の扉の前まで来ていた。

(ここに……この事件の首謀者がいるのか……？)

結局、真と合流することは出来なかった。しかし、おそらく彼女は無事だろう。つながりは途切れていないと思う。

それに上谷の守護霊、マリオネットだって強力だ。

恐れはもう必要ない。今はただ、目の前の敵をどうするかを考え

るべきだ。

(と、言っても俺には何の力もないしなあ……)

真がいなければ、特に戦闘に参加する必要も無い。もしかしたら足手まといかもしれない。

でも、それは逃げて良い理由にはならない。

「行きますよ……」

その直後、上谷の合図によってマリオネットのベルトを幾乗にも重ねた槍のようなものが屋上へ続くドアを蹴散らした。

途端、初夏の夜の風が吹き抜けた。

そして俺達は、屋上へと踏み入れた。

「真ッ!!」

その屋上、箱型のホテルの屋上は綺麗な正方形を形作っている。

その中央には、高さ三メートルほどもある精霊像が置かれていた。

精霊像は大きく手を広げ、天を仰いでいた。その胸部には、黒い布のようなもので真が縛り付けられていた。

真には目立った外傷は無かったが、意識は無かった。それに加えて、大きな不自然な点が、嫌でも気になった。

「誰も……いない?」

屋上には誰も居なかった。

それだけではなく、この事件の目的を指し示すものすら見つからなかった。

「とにかく、真を助けないと、」

俺が言う前に、もう上谷が黒い布のようなものをはがし始めていた。俺も手伝い、布ははがされ真は倒れそうになったので、俺が抱きかかえるように受け止めた。

「上谷、これは一体どういうことだ?」

この不自然な状況に、考え込むような表情の上谷は静かに言った。

「これは……屋上はフェイント、なのか……？」

屋上はフェイント。そこに違和感を覚えた。そもそもどうして屋上を目指していたのか。

「そうだ、涼に電話しよう」

「涼……ですか？」

「ああ、上谷は知らなかったつけ。桜井の兄貴で『サークル』に所属してるんだ。今も涼の助言で屋上まで来たんだ」

その言葉に少し不安な顔をした上谷だったが、すぐに戻った。短いコール音の後、涼が電話に出た。

『どうした、何かあったのか？』

「ああ、全部話したら時間がかかるから、とりあえず今聞きたいことがあるんだ」

『わかった、それで？』

「屋上まで到達した、だけど誰も居ないんだ。」

『何？ 屋上には何も異常はないのか？』

「異常……精霊像が置いてあって、そこに真が縛り付けられていたぐらいだな」

『精霊像……か。なるほど、ちなみにそのホテルはどんな形をしている？』

「形？ ええと、別に変じゃないぞ。普通の箱型だな。縦長の直方体みたいな」

『……いいか、よく聞け。まだ確定じゃないが、犯人の目的がわかった』

「本当か!？」

『ああ、『生霊の理』という霊術だ』

「なんだ……それは？」

『大昔の霊術だ。簡単に言えば大規模な吸収だと思えば早い。これの発動条件は、箱と精霊像なんだ』

「発動したら、どうなるんだ？」

『……箱の中に存在するものすべて、分解され吸収される。だが安心しろ、条件があるんだ、まず、発動のキーになるのは精霊像、そして満月と十二時だ』

「満月って……今日の月は？」

『もちろん満月だ。だが、このうちどれか一つでも欠ければ発動はしないんだ、まず精霊像を破壊すれば発動を阻止できる』

「そうなのか、わかった。ありがとうな」

『気をつける。生霊の理は発動が困難だ、それなのに精霊像の周りに誰もいないのは不自然だ』

「ああ、わかってる」

そういつて電話を切った。

「つまり、この精霊像をぶっ壊せば、とりあえずはセーフってことだな」

犯人の目的は、『生霊の理』という儀式を発動することらしい。それが発動してしまったら、この箱型のホテルの内部にあるものはすべて霊力に分解され、おそらくホテルの外側にいる犯人に吸収されるだろう。

「それならマリオネットの一撃で大丈夫そうですね」

精霊像が儀式の発動のキーなら、それを破壊する。

上谷の合図によって、マリオネットは自身の体を包むベルトを伸ばし、図太い槍のようなものを作る。

それをフルスイングして、精霊像に叩きつけた。

爆音に近い、衝撃が奔り精霊像は粉々に砕け散る。

はずだった。

「傷一つ付いてない……！？」

大抵の建物なら、一撃で全壊してしまいそうなマリオネットの一撃、それを傷一つ無く、いまだ平然と立っていられる精霊像を見て、

俺は愕然とした。

「どうやら……ここにも結界が張られていますね、解除するのは困難かもしれません」

精霊像を指でなぞりながら上谷が言った。

発動のキーとなる精霊像の破壊は困難だ。となれば、残る条件は

……

「十二時、満月……どちらも俺達の力でどうにかなる問題じゃない……！」

生霊の理。その発動を阻止するためにはもう時間もあまり無い。

「いや、待つてください。この精霊像に張られている結界は、どこかに発動源となるエネルギーを飛ばしているアンテナのようなものがあるはずです。……おそらくは、同じ精霊像の形をしていると思いますが」

精霊像、確かに俺達がホテルに入るとき、入り口から屋上にあるこの像が見えた。だが、他に精霊像なんてあったらどうか……

「そうか……あの時!!」

藍那につれられてホテルの外に出た、あの時、確かに人から隠れようとして物陰に飛び込んだ。

それは確かに同じような精霊像だったはず。

「ホテルの周りの遊歩道みたいところに精霊像があるぞ!!」

俺は急いで覗き込むように、屋上から身を乗り出した。

その時、何者かが羽ばたく様に上昇してきた。

「おや、そちらはもう辿り着いていましたね」

背中から大きな天使の羽を羽ばたかせ、両腕に藍那と藤崎を抱えたセーレが現れた。

その後から、ホテルの外壁を跳躍してきたリリスも来た。

「藍那！ 無事だったのか」

夜雑の攻撃によって落された藍那は、特に傷も無く無事だった。

おそらく、セーレに助けてもらったのだらう。

そこに不機嫌そうな藤崎の声が響く。

「それで、犯人はどこかしら？」

見回しても、屋上にいるのは、俺と上谷、そして真とマリオネットだけ。

そこで、セーレが真の意識が無いことに気が付いた。

「どうぞ、私の回復能力を使って真を回復させましょう」

セーレは、神の教えを説く神父のように歩み寄り、その手のひらから光が舞い、真を回復させ始めた。

「そうだ！ 真は犯人を見てるかもしれない！ セーレ、早くしてくれ」

真は、一階で俺とはぐれてからここまで来るのに犯人と接触している可能性が高い。

そうなれば、真はここで重要なポイントになる。

「さて、終わりましたよ」

セーレが身を引き、真はゆっくりと瞳を開ける。

俺の呼びかけに意識を戻し、やがて立ち上がる。

「京平……、ええと」

真に今までのことを軽く説明する。

「真、覚えてるか？ 誰に襲われたか」

ゆっくり、時間を置いて考え込むように間をおいた。

その間、ここに居る全員の視線が真に集まる、藤崎でさえ真剣な顔で見ているし、上谷はもう睨みつけるかのように真の方を見つめる。

「……上谷竜那」

「え？」

真の口から言われたのは、意外にも仲間である上谷の名前だった。

「いや、襲った奴の名前だぞ?」と聞き返しても、真は撤回しない。

「そう、上谷竜那。それが私を襲い、この事件の首謀者とされる者の名前よ」

その一言に、屋上は凍りついた。

第四十七話 「裏切りの友達」

「……か、上谷？」

屋上は真の一言で凍り付いていた、真は上谷をしつかりと見据えながら言った。

彼が犯人であると。

彼がこのホテルに悪夢を呼び、生霊の理という、中にいる人々を皆殺しにし、そこから霊力を吸出し私欲を肥やす。悪魔のような犯人。

本当に上谷が犯人なのだろうか。

「皆さん……どういうことですか！？ これは……ぼ、僕は知らないッ！！」

上谷は皆の視線を怯えるように、叫んだ。

彼がこれほど取り乱している姿をはじめて見た。

「そうだ、上谷が犯人のはずが無いだろ……」

無意識のうちに言葉が出た。

そう、彼がそんなことをするはずが無い。

「そもそも上谷は人間だろ？ 霊力は人間が得ることは出来ないし、マリオネットだって強力な守護霊なんだぞ、こんなことをする動機が無いだろ」

自分でも、もっともなことを言ったと思った、これに藍那も頷き、真は慚然として立ち尽くし、藤崎は口を挟んできた。

「そうでもないわ、とりあえず『人間だから』で済まされないわ」

藤崎は上谷を一瞥し、俺に向かって言った。

過去に、藤崎も自分自身の霊力を強めようとしたことがあるが、それは関係しているのだろうか。とりあえず俺よりもこういうことには詳しそうだった。

「どづいうことだ？」

「生霊の理ってね、元々は太古の霊術だけど開発したのは人間なのよ」

生霊の理は、多くの人間の命を必要とする悪魔のような霊術だ。

それを開発したのは人間だったら、それはただの殺人ではないか……
「太古、まだ科学も進んでいない頃、人々は何を信じていたか。それは宗教として今も残っているけど、神という存在を太古の人々は信じていた。でも神様なんて人間の目に見えた存在ではない、ましてその存在の確たる証拠だって存在していなかった。だから太古の人々は考えた……存在していないなら呼べば良い、この世に創り出せば良いってね」

「それで……人間を生贄に霊力で神を作ろうとしたの!？」

藍那も知らなかったようで、愕然として話を聞いていた。その一方、上谷は顔を伏せたまま、身動きをとらない。

そして藤崎は続ける。

「でもね、神なんてものは出来なかった。莫大な量の霊力を捧げても抽象的で不確かなものを作り出すことなんて出来なかった。しかも、生霊の理の生贄に莫大な量の信徒を捧げたため、この宗教は衰退し、消滅した。これにより生霊の理も消滅したはずよ」

「でも……それが上谷とどう関係があるんだよ!!」

「いい？ どうして太古、生霊の理が失敗したのか。それは創造しようとしたのが『神』という不確定なものだったからよ、つまり、実際に存在していた、確かな存在なら創造することが出来るかもしれないのよ」

「つまり……死んだ人間を蘇らせることが出来る、って事なのか？」

俺の返事に藤崎は軽く頷いた。彼女が言うように死んだ人間を蘇

らせるという理由なら、人間がこの事件を引き起こすこともあるだろう。

しかし上谷は？ 彼はそんな理由があるだろうか。

ふと、脳裏に上谷との会話が思い出される、この見学旅行の何時か、それすらも覚えていない何気ない瞬間に、彼は悲しそうな顔をしていった。

「家族が居ない……？」

上谷の実家、そこに家族はもう居ないらしい。それにより、上谷はこの町の神社に下宿して学校に通っていたはずだ。

その家族はもう死んでいて、

上谷は家族ともう一度会う為に、

同じ学校に通う仲間達を生贄に捧げようとしているのか……？

「京平、信じて。私はこの目で確かに見たわ。上谷竜那が私に攻撃するその瞬間を、その顔を」

真はこの間がとても嫌なのか、諭すように俺に言った。それに軽く俺も頷き、顔を伏せている上谷と向き合う。

「上谷、答えてくれ。本当のことを」

俺も意を決した。

まだ上谷が犯人と断定したわけではない。ただし、今のところ上谷は怪しい。もともとホテルで事件が始まった時、俺と藍那は外に居た。その間上谷はホテル内で自由に動けたといえる。

「……金城君は、僕のことを信じてくれないんですね」

「え？」

「守護霊の言うことを真に受けて、僕の言うことは無視するんですね」

上谷は頭を上げ、歩き出した。屋上には、元々人が来るようには

できていなく、フェンスは無い。屋上のふちに沿って歩きながら、決してこちらには視線を向けずに話し始めた。

「そういうわけじゃない、ただ、本当のことを聞きたいんだ」

俺の心の底から正直に言った。俺だつて上谷を疑うようなことはしたくない。ただ真偽を確かめたい、ただそれだけだった。

それがたとえ、真実がどちらであつても。

「……ハハツ、君に嘘は言えないや」

上谷は無邪気に笑いながら言った。

「どつ这个事情……だ？」

「僕がこの生霊の理を発動させる。それ以外に何がある？」

上谷は俺を見据えて言った、途端、俺の胃の中に鉛でもぶち込まれたかのようなグラリとした衝撃が奔った。

「……嘘だろ？ おい、上谷、」

縋るように、哀願するかのように、呟く。

しかし上谷はそれを蔑む様に見下し、さらに言葉を続ける。

「僕は僕のためにここまで準備してきた、もう……友達ごっこも終わりだ」

その一言を聞いたとき、俺は弾けるように上谷に飛びかかるつもりだ、

しかし、俺の拳が上谷に届く前にマリオネットが間に立ちはだかった。マリオネットの分厚い腕が俺を弾き飛ばし、俺の体は屋上の床を二、三回バウンドして転がった。

「京平……！」

真はすぐに俺の元に駆け寄った、マリオネットは追撃をする気は無い様で、そのまま上谷を守るように立っている。

「どつして……、」

四つん這いになりながらも、俺は必死に肺に酸素を送り、何とか声を絞り出す。

「どうして？ 君には一生わからないだろうね」

上谷は依然として蔑むように言った。その様子を藍那は混乱しながら見つめ、藤崎は興味なさ下だった。

「君にもわからせてやるよ。マリオネット、殺せ」

その一言で、まるで電気が流れたかのようにマリオネットが動き出し、いつもは俺達を助けてくれたベルトによる槍が襲い掛かる。

だが、真がそのベルトの槍に瞬時に烙印を施し、「裂ける！」の一言でベルトはあっさりと裂けてしまった。

「おっと……そこらへんでお遊びはお終いよ、セーレ」

藤崎がその重い腰をあげ、セーレが参戦する。と同時に屋上の床には円形の烙印が施され、ドーム状の空間がセーレの支配下になる。

「……いいでしょう。三組まとめて相手しましょう」

上谷は、いまだ余裕の表情で宣言した。

「どっして……どっしてなんだよ上谷ぁ！……」

第四十七話 「裏切りの友達」 (後書き)

そろそろ四章もクライマックス。
がんばります

第四十八話 「死人」

最初に攻撃を仕掛けたのはセーレだった。烙印の力によってこの空間の支配を得た彼は空気中の水分を凝結させ、巨大な氷柱を作り出す。

それは砲弾のようにマリオネットを目掛け射出される。

空気を裂く、鋭い音が駆け抜け、氷柱はマリオネットに激突する。だが、マリオネットに届くほんの数センチ手前で、停止してしまう。見れば、氷柱はマリオネットのベルトが蜘蛛の巣のように何重にも絡みつき、完全に受け止められていた。そして氷柱は投げ返される。

途端、氷柱は蒸発して消え去ってしまった。

「反撃、と行きましようか……」

今度はマリオネットの腕から伸びたベルトが幾重にも重なり一つの槍を形成する。一直線にセーレを貫こうとするが、地面から氷の壁が反り立ち妨害する。だが、それでも槍は轟音をあげて氷の壁を破壊した。

セーレは身を振って回避するが、今度はマリオネットが槍を鞭のように振り回し、セーレの脇腹に強打する。セーレは床を転がり受身を取ったが、軌道修正した第二撃を回避することが出来ない。

「クッ、……」

セーレは身構えたが、彼に槍が激突することは無かった、

「なにやられっぱなしになってんのよ、ほら、早く立ちなさい！」

藍那とリリスが間に割って入り、リリスの烙印による一撃でマリオネットの槍を粉碎していた。

「ふっ、君達は本当に……」

セーレは呟き、そして立ち上がる。

「手加減はしない。本気で君達を潰そう」

途端、セーレの髪が逆立ち、目は色の無い群青、肌は温かみの無い、まるで天使と悪魔が逆転したかのように変貌を遂げていた。

その背後には氷が展開され、巨大な翼のように広がった氷の柱は一本ずつで龍のようにうねり、全方向からマリオネットを襲撃する。

「マリオネット!! 構うな!!」

上谷が叫んだ途端、マリオネットのベルトがすべて解けた。

スルスルと、音も無く、あっけなく、それまで体を覆いつくし、ミイラ男のように象っていたベルトがすべて解けた時、その中が姿を現した。

一体の骸骨。

本当の人骨に見えるそれは、泣いていた。

瞳の無い目から涙を流して泣いていた、すべてが一瞬で起きた。悲鳴にも似た叫びが辺りを包む、その衝撃でセーレの氷柱による龍は砕け散り、バラバラになった。再構成しても叫びにより一瞬で碎かれる。

俺達には特に害が見られないが、守護霊たちには人間以上に効果があるらしく、真も耳を塞ぎ苦しんでいた。

「さあ……マリオネット、終らせてやれ、」

上谷は指示を出す、その刹那、マリオネットから何かが飛んだ。

それはマリオネットの肋骨、肋骨が弾丸のようにはじけ飛びセーレの肩に突き刺さった。

息をつく暇も無く、骸骨は跳躍し、セーレの眼前に迫る。叫びをやめず、骨だけの、本来なら立っていることもできない体を糸で操られているかのように滑らかな動きでリアットをセーレに叩き込む。

「セーレ……!」

衝撃で仰け反り、倒れる寸前で藤崎に支えられた。

だがその瞬間力を失ったセーレの烙印は消滅してしまった。これにより屋上を包んでいたドーム状の空間も無くなり、辺りは月明かりに包まれた。

「真、いけるか!？」

こうしてはいられない。単体での霊力の強さではセーレが一番だった。そのセーレが軽くあしらわれてしまったのだ。

マリオネットに勝つためにはリリスと真のコンビネーション技を活用するべきだ。

「いくよ、リリス。真と協力して」

藍那もそれを理解し、マリオネットを改めて見る。

ベルトが解かれた彼は細いただの白骨でしかない、だが、奴の叫びは守護霊の能力を阻害するようだ、つまり、奴に勝つためには叫びを攻略する必要がある。

(でも……どうするんだ？ 耳を塞ぐとかそういう次元じゃない。

奴の叫びは存在そのものに訴えてくるようなものだ、それにあの骸骨から普通の声で叫んでいるとは到底思えない。特別な物のはずだ。

考える暇も無く、マリオネットは攻撃に移っていた。体から剥がれ落ちたベルトでも自在に操れるらしく、ベルトはリリスを目掛けて、本体である骸骨は真のほうへ、それぞれ攻撃を仕掛けてきた。

骸骨は滑らかな動きで、真にハイキックを繰り出す、だが真の手のひらに灯された炎から包丁が応戦した。

だが、白骨を切り裂いたところでダメージが目に見えない。

真の攻撃を掻い潜って骸骨の手が真の顔面を掴んだ、真は剥がそうと腕を掴み返した。それと同時に骸骨の腕が、真つ二つに折れた。その様はまさに人間の骨だった、というより見れば見るほど人間

の骸骨だった。折れた断面からは本来の霊ならば霊力が滴り落ちるのだが、それもない。

(まさか……!?)

上谷は人間を蘇らせるために生霊の理を発動させるつもりだろう。死人を蘇らせる、それならばその死体も必要ではないか。

死体なんてそう簡単に運べるものではない、だから常に行動を共にする守護霊に、それも外見を変えてしまえばいい。

そうになると、あの骸骨はまさしく上谷がよみがえらそうとしている人だろう。

その骸骨の叫びは悲しいまでに痛々しかった。

「やめろ!! 上谷、こんな事しても意味が無い!!」

視界の端では、リリスがまとわりつくベルトに悪戦苦闘し、真は骸骨に鳩尾に正拳突きを喰らい、前かがみになった所に後頭部を強打され、床に崩れてしまった。

「ほう、君に一体何が理解できているのかな？」

手でマリオネットに合図を送り、静止させた。

上谷は屋上の淵に立ち、俺を見下ろしていた。その彼にはいつものクラスメイトとしての笑顔は無い。ただ冷徹で残酷な表情だった。「こんなことをして……何人もの犠牲の上に生命を蘇らせたところで、その人は喜ばないんじゃないか？ 確かにお前の気持ちもわかる、でもこんな方法は誰も望んでいない!!」

俺の叫びに上谷は軽く笑って、答えた。

「君は勘違いをしているよ。蘇りその人は喜ぶのさ、今でも生を渴望している」

「どうして!?! 確証も無いでしょ!?!」

藍那も堪えきれず叫んでいた、上谷はわかっている。どうして自分の考えをあそこまで信じられるのか。

「お前の家族は蘇ったとしても、お前はたくさんものを失うんだ

ぞ！！」

「家族、そんなものに興味は無い」

「なに！？」

「僕は、……僕自身を蘇らせるんだ！」

第四十九話 「リミット」

上谷は死人だった。その事實は俺の中を静かに駆け抜けた。

「な、何を言ってるんだよ……お前は、今、ここに居る」

この状況でも俺は懇願するように上谷に問いかけた。だが、彼は肩をすくめて、鼻で笑って返した。

「僕は悪夢だ。事實、僕は初めて君と出会う前に死んでいる」

信じがたい事實だった。俺と出会ってからの日々、彼は本当は既に死んで、この世に残された残滓が俺とともに行動していたのだ。

「これで辻褄が合ったわけね、やっぱりその子が犯人で間違いないわ」

藤崎が口を挟んできた。

「そうですね。僕はこの事件の首謀者、そして莫大な霊力を得て人間に生き返る。その踏み台に君達はなるんだ。その為には邪魔はさせない」

言った途端、上谷の手には黒い斧が握られていた。斧は黒い宝石のように黒光りし、刃というものが見られなかった。

次の瞬間、上谷は斧を振り上げて藤崎の前に立っていた。

そして、気づいたときには斧が振り下ろされていた。

「藤崎！！」

俺はただ、見ることに出来なかった。真は床に崩れたままピクリとも動かない。リリスはマリオネットと格闘し、セーレは気を失っている。藍那もただ、見るだけの無力な存在だった。

首を刎ねられた藤崎は、そのまま崩れ落ちた。

しかし、よく見ればその頭はまだ体とくっついていて。どうやら意識だけを刈り取ったようだ。

「さあ、次は君だ」

上谷は、斧を投擲した。その斧は直線軌道で藍那の胸を貫通した。まるで操り人形の糸が断ち切られたかのように彼女は崩れ落ちた。

「畜生、お前は どうしてそこまでして生き返りたいんだ!？」

俺はもう支離滅裂ぎみになっていた、それでも上谷に止まって欲しい、その一身体で叫んでいた。

「どうして?、いいだろう、君だけに教えてあげよう。いや、君だけに聞いて欲しかった」

だから邪魔者は消した、とでも言いたげな顔をした。

現在、俺には上谷を止める力も無い、それに生霊の理は時間と条件がそろえば発動してしまう。時間稼ぎは上谷にしか有利だった。

しかし俺には話を聞く以外選択の余地が無かった。

「僕は生前、片田舎の普通の少年だった。家は貧しかったが学校にも普通に通っていた。君にもわかるだろう? 母と二人暮らしだった。でも僕は幸せだった、少なくとも生きているうちは」

上谷は懐かしむように話し出した。俺はその話を聞き続けた。

「でも悲劇はあっさりと起きた、学校帰りにもう日が暮れていた。

僕は青信号を渡っていた。そこに一台の車が走ってきた、夜には街灯もつかないそんな片田舎、僕は気が付くと自分を見下ろしていた。車に轢かれてぐちゃぐちゃになった自分をね」

そこまで、上谷の声はひどく冷静で、何かの報告をしているだけのような雰囲気だった。

「じきに夜が明け、人が僕達を囲った。警察と救急車が送れてやってきて、僕を残して僕を運んでいった。最後に母が来た。唯一の家族であり、僕の事を一番愛してくれた人。彼女は何故か、僕がさっきまで倒れていた場所で泣き崩れた。僕はただそれを見下ろしていた。

僕にはわからなかった、自分は どうしてこうしているのか。死ん

だのか、生きているのか。死んだとしてもその実感は無い、死を受け入れることが出来ない。そんな状態が一週間ほど続いた。その間僕はずっと事故現場で立ち尽くしていた。母は毎日僕のところに来て、花を添えて、お祈りをして、泣きながら帰っていった。

ところがある日、彼女は来なかった。その次の日も、それからずっと、彼女は来なかった。彼女は僕を忘れようとしていた。苦痛ほくから逃げようとしていた。でも僕はどうしたら良いのかわからなかった。

そんなある日、彼に出会った。彼は囁いた、『生き返りたいのか？』ってね。」

上谷の話す『彼』が誰なのかわからない。ただ、今はそんなことどうでも良い。

「僕は彼の言うとおりに動いた、まずは僕から目をそらした母を殺した。その次は仮初、うわべだけだった友達を吸収した。そして彼の計画……生霊の理を発動させる準備に取り掛かった」

上谷は事も無しげにいった。

「てめえ……どうしてそんな簡単に殺せるんだよ!!」

「簡単じゃない!!、今でも哀れにも引きずっているんだ、断ち切りたいのに!!」

上谷はそういいながらマリオネットを見た。

人間の白骨で出来たその体。それは紛れもなく本物の白骨。

「マリオネット……僕の母を使ったよ、この計画では人間に成りすます必要があるからね。守護霊は必須だ、人形で作られた守護霊がね。」

それから僕はとある学校に忍び込むことになる、生霊の理は箱と精霊像の準備が必要だ、つまり準備は目立たない方が良く、それでいて発動時は人が多く集まる場所が必要だ。それにはホテルがちょ

うど良い、更に修学旅行が重なると確實だ。

条件に合う学校、それが君のいる高校だった。僕の使命はそこで敵情の視察。それには神社でヒシカを利用した」

「アレも……お前の演出だったのか」

確かに、街でわざわざ退治に行くなんて俺達ぐらいしかいないだろう。

しかし、よく考えればその情報はその日、たまたま転入してきた藍那が教えてくれたことだった気がする。

「少し計画が狂いましてね。もともとあの役はヒシカではなかったのですが。裏切り者に僕が制裁を与えるはずが、結果的にあなた達が釣られたわけですね」

計画上には無かったが、結果的には俺達の情報がばれてしまったのか。

「それからは退屈な日々だった。人間のふりをして、君達を観察していた」

「それが今日で終るって言うのか」

「僕は人間になる、そのために君達は消滅するんだ！」

「馬鹿野郎……なんで、そこまで人間にこだわるんだよ」

「わからないのかい？ 人間と霊には決定的な違いがある。生きてるか死んでいるか、というね。でもその差は大きい。決定的なんだよ、君にはわかるかい？ 死んでいる人間の気持ちがい！ この数ヶ月、何も知らずに接してきた君達がどれほど僕を苦しめていたかなんて！！」

「ああ、知らねえよ。だがな、俺からはお前が苦しんでいたなんて思わない。これまでのお前の笑顔は嘘じゃない！！」

「君に何がわかる!!」

それと同時にマリオネットのベルトが俺を目掛けて射出された。俺を守る人はもういない。抵抗できずに俺は攻撃をすべて受け入れた。

受け入れてなお、俺は立ち続けた。

「ほら……手加減している。お前は俺を殺せない!!」

「調子に乗るなア!!!!」

今度は上谷が黒い斧を取り出し、一瞬で俺の前まで来た、次の瞬間には俺を鋭い衝撃が襲った。

簡単に吹き飛ばされ、転がる。

しかし、俺はまだ立ち上がることが出来た。

「お前はまだ忘れることが出来ない、これまでの数ヶ月、お前は人間とか、霊とか、死んでるとか生きてるとか関係なかったんだ。それぐらいに俺達と過ごしてきたんだ。俺には霊のいる生活は当たり前だ、だからお前が死んでいたって関係ないんだよ!!」

俺は渾身の一撃の拳を上谷の顔面に放った、上谷は抵抗なく吹き飛び、精霊像に激突した。

「帰ろう。こんなふざけた腐れ野郎の被害妄想なんて抜け出して、俺達の住む世界へ帰ろう。な、上谷」

差し出した俺の手に、握り返して来る弱弱しい手。

上谷は上谷。死んでいても、霊でも関係なく、彼は彼だ。

今からでもまだ、俺達の日常に帰る事ができる。

そう、信じていた。

「……ずるいですよ、本当に君はずるい。君のせいで……また帰りたいなくなってしまったじゃないですか……」

彼は泣き言のように呟いた。そして、俺の手を借り、立ち上がった。

「でも、遅すぎたんですよ。もう引き返せない、僕の意味に関係なく生霊の理は発動する」

「なに！？ 精霊像を壊せば良いんだろ？」

生霊の理は満月と十二時、そして精霊像があれば発動してしまう。しかしそのどれかが欠ければ発動を阻止できる。

「精霊像には結界が張られています、この結界を解くには、ホテルの周りにある四つの精霊像を壊す必要があります」

ホテルの周り、ちょうど藍那とホテルの外に出た時に見かけた奴だ。

「しかし、それを壊しに行くには入り口の結界を解く必要があります、そして入り口の結界はこの屋上の精霊像を壊す必要があります」

二重の結界、これにより完全に閉じ込められていた。

「さらに、僕が勝手に結界を解き、生霊の理を阻止したとしてもホテルの中の人には助からないでしょう」

「どうしてだ！？」

「ホテルの中には多くの悪夢がいます、彼らは僕の手下ではなく、同じ目的の元に集った同志です。彼らもまた、生霊の理によって得られる莫大な霊力を求めています。元々僕一人で手におえる量では無いのです。そして今、彼らがホテルの中の人を傷つけないのも、生霊の理の為でそれが失敗したとなれば好き勝手に吸収し始めるでしょう」

「どうすりゃ良いんだ！？ 阻止できても奴らが暴れたら意味ねえだろ！！」

「だから……遅すぎたんです、どの道結界が解けなければ意味が無い」

第四十九話 「リミット」(後書き)

遅れてすみません、これからがクライマックスです。

第五十話 「最後の奇跡」

生霊の理、これを止めるにはまず屋上の精霊像を破壊しなければならぬ。しかしこれには結界が張られていて、結界を解かないことには傷一つつけることが出来ない。

「どうします？ 僕はそのまま生霊の理が発動するのを待つだけなのですがね」

この局面に来て白々しい台詞を吐く上谷、その姿に思わず怒りがこみ上げた。

「どうしてそんなことを言われてられるんだ、帰るぞ。皆無事に」

そういつて俺はなんとなく気が付いた。

「そういえば、このホテルの中にいる連中は生霊の理に巻き込まれないのか？」

「と、いいいますと？」

上谷は特に気にしていないようだ。

「生霊の理が発動したら、このホテルの中身は全部霊力にされるんだろ？ だったら今ホテルの中にいる悪夢達はどうなるんだ？」

俺の問いに、「ああ、そんなことですか」と軽く鼻で笑って上谷は答えた。

「彼らは生霊の理発動寸前にホテルから飛び出してきましたよ、もともと彼らはホテル内の警備をしていますからね」

屋上が僕の担当です、と付け足した。

その答を聞いて俺は一つの打開策を考えた。

だが、その考えはとてつもなく幼稚で、愚かなものだと思う。

「飛び出してきた時に全員叩きのめす、これしかないだろ」

「ハハッ、そう言うと思ってました、けれどそれも精霊像を破壊できなければ何の意味もありませんよ。それに彼らの実力もわかってるでしょっ？」

そんなことは上谷に言われるまでもなく解っている、しかし、こ

れしか道は無いのだ。

そして俺にはまだ、秘策があった。

俺の中に眠る謎の霊。

破壊者アレスとの一件の時、突如覚醒し俺達の危機を、結果的に救ってくれた。

それがもう一度覚醒すれば、あの無尽蔵な霊力が再び湧けば、こんな結界や悪夢なんて軽く退けてしまっただろう。

しかしあの時の一度以来、覚醒したことが無い、そもそも覚醒するのか。眠っているだけなのか、取り付いているのか、それすらも不明な存在。

この賭けは危険すぎる。

「とにかく結界を解くぞ、上谷」

「いいですが、入り口は塞がっていますよ？」

「いや、入り口じゃない。飛び降りるんだ、ここから」

俺は思い返していた、それは藍那が夜雑にバルコニーから落された時、あの時はそのまま下に落下していた。

つまり結界は入り口のみには張られており、それ以外は脱出可能というわけだ。

「たしかにここから飛び降りれば下にいけますね。ですが、それからまたここに戻ってくるのは不可能ではないでしょうか？」

「う、……」

確かにそうだった。

「それに、マリオネットはもう役に立たないかと思えます」

ベルトを解き、本当の姿を晒したマリオネットは、その場にぶら下がるように佇んでいた。

「つまり僕が下に行ったとして、戻ってくることは出来ません。僕は飛べないのでね。それに付け足しますと、現在時刻、午後十一時四十分ですよ」

十一時四十分。後二十分で生霊の理が発動してしまう。

八方塞がり。万事休す。

「クソッ!!」

何の策も無く力任せに精霊像を殴りつける。

ただ、俺の拳に鈍い反動が返って来た。それは精霊像に触れたのではなく、結界に阻まれた惨めな結果だった。それでも俺は精霊像を殴り続けた、次第に拳が痛くなり、血が流れ始めた。

「もうやめてください、無理なんですよ!」

上谷は言うだけで俺を止めようとはしない、それを良いことに俺は殴り続けた。

痛みなんて関係ない、マリオネットの一撃でもびくともしなかった結界を壊せるとも思っていない。

ただ、何かを殴りたい、それだけのやりきれない思い。

絶望だった。

救えない、皆を救うことが出来ない。

それでいて、屋上にいれば、自分は助かるかもしれない。

そんな、矛盾。

「クソオッ!!!」

最後に一撃だっただろう。拳も、骨が見えるのではないかと思うほどに殴り続け、壊れ果てていた。

しかし、最後の一撃は、コツンと、精霊像に届いた。

「!? 上谷! 結界が、」

素人目にもはっきり解る、結界が消えていた。

「そんなはずは……」

上谷は慌てて下を確認する。そこでは、四つの精霊像はバラバラに砕かれていた。

一体誰が壊したのか、俺達には見当もつかなかった。

「とにかく、こいつを壊してしまうぞ!!!」

精霊像を壊して生霊の理を防ぐ、それが可能になった。

「いや、ダメです、ホテル内の悪夢をどうするんですか!？」

「とにかく後から考えるぞ! 早く破壊しねえと」

賭けるしかない、どんなに不可解で危険な存在でも。

しかし、本当に出てきてくれるのだろうか。

前に一度、俺に取り付いて以来、音沙汰無しだ。その間にも危険なことがあったのに、一度も出てこなかった。

本当に信じられるのか。

もし、失敗すれば、死ぬ。

皆が死ぬ。

その責任を背負って、戦えるのか。……無理だ。俺には出来ない。肝心な時に足がすくんでいた。

「どうすりゃいいんだ……」

結界が解けたのに、結局状況は同じ。

自分かもどかしい。

そんな俺の様子を見ていた上谷が、まるで普段の様子で、教室で困っている俺に助言をするかのように言った。

「まだ、方法がありますよ。とても、簡単なね」

「どういうことだ、？」

上谷は、もう、吹っ切れたかのように言った。

「ぼくが箱になります」

箱。それはなんだったか。

それは、生霊の理の発動条件の一つ、箱の中の物をすべて靈力に変換する。

その箱。

「それで、お前はどうなるんだ……?」

「靈力を抑えきれずに爆発するでしょうね」
それはつまり

「自爆……」

俺の中ではそれは嫌だ、という考えがすぐに思いついたが、その反面、それしかもう方法は無い。ということも解っていた。

それに時間も無い、もたもたしてれば生霊の理が発動し、結局誰も救えない。

それに、上谷だって生半可な覚悟でこんなことを言うはずが無い。彼にかけるしか……ない。

自分の力の無さが齒がゆい、悔しくて握り締めた拳が痛い。

「もう時間が無いです。……これでお別れだ、」

上谷は俺にそう告げて、マリオネットに絡み付いていたベルトを拾い上げた。

「い、嫌だ。お前と、お前も帰るんだよ……」

「いいえ、僕はやはりそこにはいられなかった。でも、僕は後悔をしていませんよ、少しでも、消えるのが嫌だといっってくれる人が居るだけで僕の存在価値があるのですから」

ベルトを広げたり、縮めたりしながら、上谷は続けた。

「馬鹿野郎……俺だけじゃねえよ、俺達みんながお前を必要としているんだよ。……絶対に、帰って来いよ。俺達はお前が俺達のところに帰ってくるのを待ってる。ずっと」

「ありがとう。君はとてもずるい」

時間が来た。ホテルの外壁、窓という窓を突き破りホテル内に居た悪夢達が溢れ出す。それと同時に周囲の山や森に潜んでいた悪夢も屋上の方を目掛けて集まりだす。

夜、明かりに群がる虫のように集るその黒い影に月明かりが遮ら

れ、辺りはいつそう薄暗くなる。

それを確かめながら、上谷は精霊像を屋上の床から引き剥がし、ベルトで自分の体にくくりつける。ちょうど屋上に来た時の真のよう、精霊像に貼り付けられているかのようだった。

やがて、悪夢達が異変に気づき始めた。上谷の身勝手な行動を咎めるかのように上谷に突進してくる、だが上谷はそれを気にも留めず、屋上の床を蹴り、高く跳躍した。

黒い、悪夢も膜を突き破り、月明かりの元まで飛び上がる。

その刹那、上谷の身を縛っているベルトが、限界を超えて伸び始める。

伸びたベルトはこの屋上に集まる悪夢達を包み込もうと、更に伸び続ける。悪夢達は、上谷の行動を止めようとしているのか、それとも狙いに気づいていないのか上谷のほうを目指して集まり始める。ホテルの上空に黒い球状の『箱』が完成する。中では悪夢達がうごめき、頂上部では精霊像と上谷が居る。

俺はただ、見つめることしか出来ない。

「時間……だ」

満月の夜、十二時、精霊像、そして箱。

すべての条件がそろい、生霊の理が発動した。

一瞬で、黒い球は光に包まれ、その形がぼやけ始めた。

それは、物凄い速度で霊力に変換され始め、箱の中では混乱と消滅が渦巻く。

そして、その莫大な霊力の発生に伴い、箱が形をとどめておくのが困難になる。

「まずい、このままだとホテルも巻き込まれるぞ!!」

俺はその様子を見て直感的にそう感じた。規模がでかすぎる!!

光の球を化したそれは、規模が爆発的に拡大し、ホテルをも飲み込みかねない大きさまで肥大していた。

このままでは、彼のすべてを賭けた行動が無駄になる。しかし、俺には何も出来ない。

「クソオー！」

俺の怒号に反応したのか、光の球は少しずつだが、上昇を始めた。彼がまだ、俺達を助けようとしているのか。

ホテルを飲み込むか、そのギリギリのところまで、光の球はその上昇速度を少しずつ上げ始め、暗い夜の空に上り始めた。

二つ、月があるかのように空が明るくなった。

そして、爆発。

中に秘めていた霊力が限界値を超え、そのすべてを空に放出した。空に霊力があふれ、オーロラのようなひどく美しい現象が起きた。それは暗い空に幾つもの線を靡かせ、覆いつくした。とても美しかったが、とても悲しかった。

一瞬で、その美しさが花開き、

夜の空を一瞬で美しさが覆いつくし、

一瞬で、終わりを迎える。

花火のように、散ってゆく、はかなく、終る。

一人の友達が最後に起こした奇跡。

儂く、終った。

俺はその場に立ち尽くし、ただ夜の空を眺めていた。

第五十一話 「道標」

修学旅行もとい見学旅行はあと一箇所だけ目的地を残し、終了に近づいていた。

残る一箇所は、小休憩のために立ち寄る大きな目の公園で、真ん中を川がぶち抜いている形をしている。

「はい、それじゃあ三十分後にバスに戻ってくださいね。飛行機に乗り遅れますから」

係りの生徒の呼びかけに、それぞれそろそろとバスを降りる。長い時間乗っていたので体があちこち痛む。

痛いのは、それだけが理由という訳ではないかもしれない。

俺には、わからない。

「おい、京平。何があったのか知らねえけど、最後ぐらい元氣出せよ」

秋元の呼びかけにもうつろな声で「ああ、」とかいったと思う。

ホテルの一件は何事も無く、誰にも悟られること無く消滅した。

壊れたホテルの外見は俺と真で烙印を使って直した。靈力はいくらでもあった。藍那も、藤崎も時間が経つと意識が戻り、特に異常は無かった。見た感じでは。

しかし、一つの齟齬が生まれていた。

上谷の記憶が誰にも無かった。

それが彼の意思だったのか、それとも自然の摂理だったのか、俺にはわからなかったし、どうしようもなかった。

真は覚えているらしいが、ハッキリしないらしい。つまり、覚えているのは俺だけだった。

とにかく気持ちの整理が出きず、残った見学旅行の日程をないがしろにし、友達相手にもろくな対応が出来なかった。

今は……何も変わらない。

時間が……遅い。

誰かに声をかけられるのが嫌だったから、とにかく一人になりたかったから、川の際にある、新緑の色をしたゆるい坂に腰掛けた。ここからは川が一望でき、自然と独りになることが出来た。

真も声をかけてこない、それでも最低限の距離を保っている。

俺は、どうすれば良いのだろうか。

俺も忘れるべきだったのだろうか、それとも、ずっと引きずっていくべきなのか。俺にはどちらも苦しかった、答が欲しい。

これからの学生生活、その一瞬一瞬を、彼はそこに居た、でももう居ない。そんな気持ちを持って生活するのだろうか。

俺は死んでからの彼しか知らない、だけれども、それだからこそ、俺はどうすれば良いのかわからない。死んだ人が元、あるべき形に戻った。それだけのことが、これほど悲しいのか。

「馬鹿野郎……何も、無いじゃないか、」

独り言を呟く、それは、川のせせらぎに流された。

「あ、こんなところに居た。ちょっと、そのアンタ。そんなところでいじけてんじゃないの！」

藍那が俺の後ろから声をかけてきた。

当然、彼女も上谷のことは記憶に無い。ただ、ホテルを襲撃した悪夢を退治した。ということしか覚えていない。

俺と並んで腰を下ろした。

「なんだよ、悪いけど用が無いなら……」

「バカ。なんかあったんだったら相談でもしたら？ 最近ずっとそんな感じでしょ？」

そう、いつもと変わらぬ調子で俺にとやかく言ってくるところは、

ありがたかった。でもそれでは何も解決しない。

「悪い。お前に言っても意味が無いんだ」

「ふ〜ん、そう。……もしかして恋の悩み？ フラれたとか!？」

藍那も、無理に俺を励まそうとしていたが、無理だと悟ったらしく、諦めて立ち上がった。

「でも本当になんかあるんだったら、私でよければ頼りなさいね。わかった？」

「ああ、ありがとう」

珍しく素直な俺に面喰らいながらも、藍那は俺に背を向けて歩き出した。

また、一人に戻った。

もう、はじめをつけるしかないのだろうか。

仕方ないことだったと割り切るべきなのだろうか。

それも違う気がするし、絶対に違っても言い切れない。

俺自身、どうしたいのか。

「金城君、隣、いい？」

いつの間にか桜井が俺の隣に立っていた。

さっきまで藍那が居た場所に、同じように腰かけ、おずおずと、気まずそうに話かけて来る。さしずめ大竹辺りの指示だろう。

「何か用か？」

藍那の時と同じように対応する。

「あのね、ずっと元気ないから、何かあったの？」

藍那と違って桜井は一切事件に関わっていない。だからなのか、俺も遠まわしに言ってみたくなった。

「大切なものを……無くした。見失った。どっかに忘れたのかもしれない、でも、俺にはもう見つけられない気がするんだ」

「ふうん、でもそれって何をなくしたの？」

「何だか解らない。だから、困ってるんだ」

「私にはよくわからないけど、でも、それを無くしたことで君が悲しむのはそれにとってもうれしくないんじゃないのかな？」

上谷は、確かにそう言うだろう。自分のせいで起きた事件だから、君は悪くない。なにも悲しむ必要は無い。と。

「それに君もとってもがんばって、それもとってもがんばって、その結果なら、胸を張って、誇っても良いと思いますよ」

みんなを救うことが出来たんですから。

「えっ？」

桜井は微笑んでいた。

ただ、笑っていた。

「はあ、疲れたぜえ。まあ、明日から休みだしな。京平、どっか遊びにいかねえ？」

秋元のやる気を削ぐ誘いにも

「とりあえずサークルに報告に行くわよ！ ほら、もたもたしてないで」

藍那のやかましい呼び声にも

「よかった、元気出たみたいだね」

桜井の小さく言う独り言にも

「京平、どうするの？」

真がささやいた俺の名前にも

俺は、少し元気を出して答えることにした。

「ああ、わかってるって」

上谷だって、俺が立ち止まるのは見たくないって言っただろっつな。

「行っつぜ」

第五十一話 「道標」 (後書き)

長かった、ずいぶん長かった四章が完結しました。

四章だけでもう小説全体の半分はありますが、ちゃんと終ることができよかったです。

若干、終盤は息切れしてますが、大目に見てください……

そんでもって、次の章が最終章になる予定ですが、いかんせん内容がまとまってないのでしばらく間が空くことになりそうです。

そんでもって、(二回目)別作品も書きたいなあとおもっちゃったりなんたりしちゃったりしてしまっています。

そんでもって、(三回目)今はこの辺りで勘弁してください。

では、また。

ご覧くださりありがとうございました！

第五十二話 断章 「教師決闘物語 上」

見学旅行二日目の夜。まだ、上谷の計画が実行される前のひと時。ホテルのロビーで新聞を読みながら休憩していた榎本のもとに、守護霊である國酔が報告にやってきた。

「どうした？」

「今 ロビーから生徒が外に出たぞ」

國酔は、榎本に代わって生徒の監視がいつもの役割だ。たまに生徒の中にも霊に関わっているものが居て、そいつが霊を使ってカンニングのような不正行為をしたりする。それを罰するのが榎本の役目だ。と本人は自負している。

「解った。見に行こう」

生徒は、教師が居ないと思ってハメをはずす、しかし、実は國酔に見られていて榎本に報告が行く。そんな仕組みが出来ていた。そして何より、榎本はそうやって手柄を得るのが楽しかった。

ホテルのロビーは、フロントに受付の人が居るが教師ではないため、生徒が外に出ても何も言わないだろう。

すなわち、外に出るのは容易いことだっただろう。

「誰だか知らんがとっ捕まえて朝まで正座でもさせるか……」

いやらしく眼鏡を押し上げ、ホテルを出た。既に日が暮れていて月が出ていた。

榎本は夜が好きなので、今日みたいな天気は最高だった。

「ん……？ 気のせいか？ いや、一応……國酔！ 外を偵察してくれ」

なにやら不穏な気配を感じた榎本は、國酔に命令した。そうすることで生徒を捜す能力は少し落ちるが、生徒はどうせたいした奴で

はないだろう。と踏んでいた。

國酔が暗闇の中に飛び込んで行き、見えなくなった。榎本は再びホテルの周りにある遊歩道を歩き始めた。

ちょうどホテルの周りがある石膏像の辺りまで来た。そこで、一瞬だが人影が見えた気がする。だが、そんなことよりも山の際に確かに、生徒が一人、たたずんでいるのが見えた。

石膏像を通り過ぎて、山の際まで駆け寄る。

「貴様、そこで何をしている？」

さっそく近づいて声をかける。

生徒は、担任しているクラスの上谷竜那だった。

「おや、先生。すみません、僕ちよつとやらなければいけないことがあるんで。眠ってくれますか？」

「!？」

榎本はただの生徒と違って完全に油断していた。その隙を突かれ、首筋を後ろに居たマリオネットに叩かれ、視界がグラリと回り、地面に突っ伏した。

「くっ……、まさか」

「じゃあ、先生。そこで見ていてください」

そういい残して、上谷は榎本の視界から消えた。

そして、榎本の意識も闇へ落ちた。

「主 主 お目覚めください」

次に榎本が気がついたのは、國酔に揺すられていた。

「う……。くそっ、私が後れを取るとは」

起き上がりつつ時計を確認する。あれからは実質二十分程度しか経っていない。

「急ぐぞ、奴に制裁を下す！」

國酔は頷きついて来る。

榎本は授業中などの仕草で、生徒が霊と関わっているかは調べてあるが、上谷はそれまでそんな仕草は見せなかった。

この日のために周到に用意されていたらしい。

「む？」

入り口まで来たところで違和感に気がついた。

「フツ……舐められたものだな」

いつの間にか榎本たちを囲うように悪夢が出現している。

それらはすべて鎧をまもっていたり、着物を着た侍であったりする、そして全員が刀を装備していた。

「國酔、思い知らせてやれ」

「御意」

國酔は刀を取り出した。趣味の悪いゴタゴタがいっぱい付けられたその刀。しかし切れ味は本物だった。

國酔は、刀を構え跳躍する。得意の神速の突きが、手前にいた悪夢の胸を突き刺し、そのままの勢いで後ろに居たもう一体まで貫通する。

しかし、技を放った後の隙を狙って一斉に辺りの悪夢が襲いかかる。

「浅はかな」

國酔は真上に跳躍、そして空中で烙印を発生させる。

國酔の烙印は、空に円を描き、それを踏み台として利用できるというもので、これを利用すれば高速の空中戦をすることが出来る。

そして、空からの打ち落とすような突き。その直後に宙への跳躍を繰り返す、ヒット&リリースで確実に悪夢の数を減らす。

「ふん、雑魚どもめ……」

國酔の猛攻により、悪夢は全滅した。

「カカカツ、愉快な侍も居るもんよのお」

はるか上のほうから、鳥が鳴くような笑い声が響いた。

「むっ？」

見ると、ホテルの三階ほどのバルコニーに、一人の侍が立っている。

そして彼は飛び降りてきた。

「カカツ、わしの名前は森眼^{もりがん}。気高き侍よ。おぬしら、とても愉快な戦いをしよる。手合わせ願いたい」

変な喋り方のこの侍は、髪の毛が真っ黒で、後ろになびいている。さながら翼のようだった。

「了解 抹殺する」

國酔が前に踊りだし、森眼が抜刀する。その異常な長さの刀に、思わず榎本も身構える。

「いざ尋常に勝負」

森眼が大きな刀で薙ぐように斬る。しかし、國酔にはそんな軌道の斬撃など避けるのは容易い。

すかさず反撃の突きを繰り出すが。

「もらったあ！」

森眼も國酔に突きで返す。

技の出や威力などは完全に劣るものの、森眼の刀は異常に長い。このまま行けば國酔の刀は届かない。

「くっ」

間髪いれず足元に烙印を発生させ、上に跳躍する。

すんでのところ回避するが、國酔自慢の突きが完全に攻略され

てしまった。

「おやおや、逃げるとはのう。おぬしにその力が無ければ既に死んでいたの」

完全に余裕を持つ森眼の態度に、國酔のプライドは傷付けられた。しかし、ここで逆上し、ヤケにならないのが國酔であった。

「わしから行くぞ!!!」

森眼がさかさず連撃を放つ、國酔は刀でそれを受け止めるが、一発一発の威力の重さは異常だった。

そのまま力で押されてしまえば、勝ち目は無い。

「ぬん」

一旦距離を取る。しかし森眼の攻撃が止むことは無く、距離を詰められ、追い詰められる。

「カツカツカ、所詮その程度か」

森眼の振り下ろした刀を、國酔も刀で受け止める。

鏝迫り合いになったが、森眼はひじを引いて、素早く刀をスライドさせる。刃を地面に水平に向け、横に振る。

その剣風で國酔の刀が吹き飛んでしまった。

「不覚」

「カカア!!!」

その隙に森眼は攻撃を仕掛ける。國酔は完全に防御に回り、どんどん追い詰められる。

やがて、石膏像に背中がぶつかった。

（國酔……まずいぞ!）

見てることしか出来ない榎本は、心中で叫んでいた。

「カカツ、つと」

しかし森眼は斬撃を止め、拳で國酔に攻撃した。しかも、回避さ

れるとすぐに拳を止めた。

「！？ 石膏像か？」

森眼の意味深な行動に榎本は何かを悟ったが、状況は何も変わらない。

「ぐおおおっ」

途端、森眼の突きが、國酔の腹部を貫いた。そして刀を振りまわし、國酔は地面に叩きつけられる。

「止めじゃあ！！」

森眼の袈裟切りが國酔を襲う。

第五十二話 断章 「教師決闘物語 上」 (後書き)

番外編榎本編です。

長くなりそうなので二話に分かれました。

第五十三話 断章 「教師決闘物語 下」

森眼の放った袈裟切りを喰らえば、國酔は一撃でやられてしまうだろう。そして、國酔にはその一撃を受け止める刀が無い。勝負は決まったかのように見えた。

「ぬ？」

森眼には、確かに手ごたえはあった。

しかし、その刀は、完全に止められていた。

「まさかこのように使えるとは われながら天晴だな」

國酔は確かに森眼の袈裟切りを受け止めていた。その手烙印を発生させて。

普段は足場として、足の裏に発生させていた烙印だったが、今回は違い、手のひらの前に発生させた。そして烙印は、さながら盾のように國酔の体を守った。

「カカツ、やはりそうでなくては面白くないのう」

國酔が真横に素早く飛び、吹き飛ばされた刀を拾う。

森眼も構えなおし、勝負は仕切りなおしになった。

（國酔、石膏像だ）

榎本は國酔に思想を伝える。

國酔もそれに頷く。

森眼は不自然に石膏像に対して手を止めた。それはやはり、石膏像が守るべき対象であるからなのである。それを利用しない手はない。石膏像を背にして戦えば、森眼の異常に長い刀による突き返しを軽快する必要が無くなる。

（状況からみてやはりチャンスは一度、一撃で仕留めるんだ！）

榎本の意味を汲み取り、國酔はまず、上に跳ぶ。空中戦は國酔の

得意分野だ。そして、森眼も追いかけるように上に跳ぶ。彼は飛ぶ術を持っていないため、ホテルの壁を蹴りながら國酔に並ぶ。

月を背にして、お互いの刀が交錯する。

金属の弾ける音が鳴り響く。

國酔は更に上へ飛ぶ、それを逃さず、森眼も上へ飛ぶ。その刹那、急に國酔は折り返し、上へ上る森眼とちょうど下へ降りる國酔が激突する。

「カカカア！！面白い！」

この挑戦に森眼は躊躇なく突きを放つ。

刀は長い。森眼が勝つはずだった。しかし、國酔は烙印を発生させる。

突きはまるで地面に突き刺さったが如く切先が止まる。

その痛恨の隙を狙い、國酔の刀が襲う。しかし、森眼は逆に受け止められた刀を利用し、身を手繰り寄せ、その國酔の一撃を回避する。

位置が逆転した。

森眼は更に、國酔の烙印を利用し、上から打ち落とすような斬撃を放つ。

國酔は身を翻し、森眼と向き合う。

「カカツ。お仕舞いじゃあー！！」

叫んだ途端、國酔の肩越しの地面に、石膏像が見えた。

（カツ、そういうわけか……侍の癖に卑怯なやつめ！！）

「ふふ どうする」

森眼は躊躇無く、刀を振り下ろした。

石膏像などお構い無しに。

自分の任務より、勝負を取る。一生に一度のこの勝負を、そんな
終り方で終りたくない。

それが彼のプライド。

刀だった。

「ふん 熱くなるなよ」

瞬間、森眼の額を刀が突き刺さった。

趣味の悪い、ゴタゴタがいつぱい付けられた刀。

國酔の刀が、森眼を仕留めた。

國酔は刀を投げ飛ばしていた。いくら森眼の刀が長くとも、投げてしまえば関係ない。

一撃で、勝負は決まった。

「不覚……カア」

森眼は石膏像に激突し、消滅した。

そこには、異常に長い刀が残っていた。

「國酔、ご苦労だった。この刀はどうやら霊体ではなく、実物のよ
うだな」

そういうと、國酔おもむろにその刀を拾った。

「ふん、好きにしろ」

榎本は興味なさげに背をむけ、歩き始めた。

「行くぞ、他の石膏像もとりあえず破壊してやる」

榎本は何気なく上を見上げた。

月明かりに照らされるホテルの屋上には、なにやら不穏な気配を感じた。

「御意」

國酔もそれに従った。

修学旅行も最終日を迎えた。

もう残りは小休憩に立ち寄り寄る公園しかない。生徒はそれぞれ、気の合う仲間たちと遊びまわっている。餓鬼どもめ。と榎本は内心で呟く。

ちょうど川の脇に少年が一人、座り込んでいる。

おそらく、今回も、奴がからんでいたのだろう。

一人の生徒が消えた。

そいつは榎本に対して何の気も無かったのだろう。だからホテルの外に居たことを忘れて居たのだ。

なんとも心外である。

「餓鬼が……」

一人、川の脇に座る少年の背中を一瞥し、榎本は生徒の見回りを続ける。

「本当に、餓鬼だな」

榎本は何も言わない。

生徒の問題は自分で解かせる。

それは彼の教育のスタンスだからだ。

第五十四話 最終章 「終わりの幕開け」

月日は流れ、暑い夏が終わり、やがて日本列島には寒気とともに秋がやってきた。徐々に生い茂っていた緑は枯れ、哀愁の漂う枯れ葉が地面を埋める。

日に日に肌寒くなった教室では、月曜の朝からホームルームによる議案がされていた。

議題は学校祭について。

この学校では文化祭もひっくるめて『学校祭』とするため、秋に行われるのだ。

そして例の如く、議長、大竹が声を張り上げて議案をまとめていた。

「はい！ じゃあ、ステージ部門は後で決めるとして、教室部門はオバケ屋敷でいい？」

クラスの皆は同意の意思を示した。

学祭では、クラスを半分に分断し、教室部門とステージ部門に分かれる。教室部門は教室展示を、ステージ部門はステージでパフォーマンスをするというものだ。

「はあ、今年も教室やるか」

俺は、あまり学祭とかには積極的に参加しない。

だから、教室展示でお茶を濁すでしょう。

「ふふ、果たしてそうできるかな？」

隣にいる秋元に声をかけたが、どうやら予想外の反応だった。

「どつという意味だよ」

「お前は限りなくステージに回される可能性が高いって事さ」

「どつして？」

「ヒ・ミ・ツ。(はあと)」

……。
「もういい」

その日の放課後、家に帰るために教室を出た俺を、強引に襟を掴んで教室に引き戻された。その犯人は大竹だった。

「何だ？ 用があるなら普通にこえかけろよ」

襟を直しながら呟いた。しかし、その俺に自信満々に大竹は答えた。

「どうせ声かけるだけだったら逃げ出しそうだし」

「逃げねえよ」

「そう、じゃあお願いするね。学祭、ステージ部門に入って」

「……」

シュパアン。という音が聞こえそうなぐらい、俺は俊敏に逃げ出した。しかし、その俺を上回る速度で大竹が俺を捕らえた。

「どうして！？ まだ何やるかも決めてないんだろ？」

「いやいや。実は決まってるね……」

不敵な笑みを浮かべながらポケットから紙を取り出した。

その紙に書かれている文字を、俺は馬鹿正直に読み上げた。

「ロミオとジュリエット」

ロミオとジュリエット、確かシェイクスピアの悲劇で、なんか複雑ないざこざのある両家のロミオとジュリエットが結ばれるために仮死薬を飲んだが、それを本当に死んだと勘違いして、結局二人は天国で結ばれましたって話だっけ。

「大体そんな感じ。でもね、馬鹿正直にまねするんじゃないで、アレンジするの。特に結末」

アレンジ。高校生の分際でシェイクスピアの傑作を改ざんしちゃまって良いのか？

「んで、どうアレンジするんだ？」

「ジュリエットが死んでしまったと勘違いしたロミオは毒を飲んで死んだ、そしてジュリエットもその後ロミオの短剣で自殺。事の真

相を知り悲嘆に暮れる両家は、ついに和解する。……と見せかけて、ロミオが飲んだのは毒薬じゃなく、仮死薬で、その後復活。ジュリエットも死んだように見せかけていましたとさ」

「むちゃくちゃだ。悲劇のへったくれもない」

「そりゃそうね。喜劇にしたいもん」

まあ、学祭の演劇なんて大抵そうなのかもしれないな。それにしても、それにどうして俺が参加しなければいけないのか。

「まあね。実際やるとして、ロミオ役に適役なのが君なわけね」

大竹はあっさりと言った。

「どーして。俺にそんな華があるとはおもえないけどね」

「そうでもないよ？ とりあえず見た目チャラチャラしてる連中よりはよっぽどマシだと思うけど」

ほめられているのか？ それ。

「とにかく、俺はやりたくない……」

「だめ。やりなさい！」

お互い一步も譲らず、状況が硬直しかけた時、俺のケータイ電話が唸りをあげた。

どうやら電話らしい。

「悪いな」

とりあえず電話に出た。

『京平、今大丈夫か？』

電話の主は涼だった。大抵、こういうときは涼のところ呼び出され、サークルのために情報提供を迫られるのだ。

「ああ、今すぐ行く」

『すまん。いつものように、喫茶店で待ってる』

すぐに切れてしまった。どうやら急ぎの用らしい。

「ということ、またな。大竹」

スチャ っと指を振って別れた。なにやら文句を言っていたが、

事実急用が出来たので、大竹も渋々俺を放してくれた。

「それで、涼は何のようなの？」

学校を出て、人気の無い路地を歩いている中、真が話しかけてきた。

「さあな。そこまではいつてなかった。たぶんこないだの事件の話かもな……」

こないだの事件、修学旅行を襲った事件の途中で、俺は一度涼に電話している。だが、旅行から帰ってきてすぐに涼には大方のことを話している。

別件の可能性もありそうだ。

「それは良いとして。京平、学祭でどうしてステージやらないの？」

「んー、まあ人前に立つのはあんまり好きじゃないからな」

人前に立てば、必ず俺に対して皆感想を持つ。良いイメージもあれば悪いイメージもある。俺はどうしても悪いイメージを持たれなくなかった。だから人前は嫌いだ。

そうこうしているうちに、いつもの涼と対話する喫茶店に着いた。落ち着いた内装のこの店は、平日だからなのか、いつも客が少ない。もしかしたら涼はそういう店を選んでいるのではないか。と思った。そしていつも通り奥の席を一人で陣取っている涼のところへ向かう。カランと音を立てながらドアを開け、風の当たらないやや暖かい店内へ踏み込んだ。

「よし、来たか。さっそく座れ」

俺を見つめるなり、座るように促した。

俺はそれに従いながら、ついでにコーヒーを注文する。

「それで、何の用で呼び出したんだ？」

「うむ。まずはこれを見てくれ」

そういつて鞆からなにやらインターネットのニュース記事のプリントアウトしたものを取り出した。記事の中身は、日本のはるか南の海上で、異常な規模の台風が出現した。ということだった。

「これがどうかしたのか？」

「ああ、とりあえず二枚目を見てくれ」

言われるままに一枚めくった。二枚目には画像が印刷されていた。どうやらその台風を観測船が撮影したもののようだが、そこには温帯低気圧なんて写っていないかった。

巨大な黒い塊。しかもその周りを膨大な数の悪夢が取り囲んでいる。

まるで、黒い塊が、悪夢達の根城であるかのように。

まるで、黒い塊が、悪夢達の源であるかのように。

「なんだ……これ」

「悪魔。そう名づけた」

悪魔、そういわれればそうかもしれない。見ているだけで背筋に冷や汗がにじみ、胸のうちには嫌なモヤモヤする気持ちたちが渦巻く。

悪魔、やはり悪夢の魔窟のようだった。

「こいつが、日本に近づいているんだ」

涼は事を告げた。

そして、この悪魔の接近が、すべての始まりであり、終わりであるように思ひ。

第五十四話 最終章 「終わりの幕開け」 (後書き)

とうとう最終章です。

何とか無事終らせたいです。

第五十五話 「異常事態」

「とはいっても、こいつは最近生まれたものじゃない。もっと昔から存在していたんだ」

涼は資料をぱらぱらめくった。

「そうなのか？」

俺は素直に驚いた。こんなものがあつたらもつと話題になつていくはずだが。

「ただし、何も無い海上を漂っているだけだった。もともと悪魔は、地球上に走る霊脈からこぼれた霊力に群がった悪夢の塊みたいなもので、人間社会がある土地では、霊脈が走つていても、自然消滅してしまう。つまり、悪魔は本来、人のいる方には寄り付かないんだ」
「誰もいない海上を、しかも一般人には見ることも出来ない塊は、それは確かに無害とはいえないが、あまり気にする必要は無いかもしれない。」

「それで……どうするんだ？ 近づいてきてるんだろ？ 破壊とか出来るのか」

涼は首を振った。

「いや、悪魔そのものを破壊するより、軌道をそらす、かな。ともかく、現状では何も出来ないのも事実だ。警戒だけは怠らないでくれ」

そういつて涼は話を切った。その後、「安心しろ。お前達を戦いに駆り出したりはしないさ」と締めくくった。

喫茶店を後にして、俺は夕暮れの街を歩く。

正直、ここ最近の問題が山積みだ。これも霊に関わつてからすべて始まつたことだ。俺が気づく前から、そこには存在していたが、気がつかなければ問題にもならないんだよな。

そう、何の気もなく、考えてる時だった。

「痛っ、!?!」

急に頭痛があった。だが、瞬間的な痛みで、すぐに引いていった。「大丈夫?」

心配そうに覗き込んでくる真に、手を振って「大丈夫」と伝え、再び歩き出す。

翌日、学校へ行くと、朝一から大竹が俺のところに来た。

「それで考えてくれた? ロミオ役」

「いやだ。俺がやらなきゃいけない理由なんてないだろ?」

そう言い返すと、まるで反応を予測していたかのように、満足げな表情をして、「ふふふん どうか」と言う。

「いやいや、実はね。他にロミオ役を立候補する人がいないもんだから、多数決で決めることになったのね」

「おいおい……聞いてねえぞ?」

その大竹の手には、既に票数が書かれている。もう結果は決定していたのだ。

「多数決には逆らえません。頑張つてね、ロミオ君」

クラス単位の陰謀なのか、俺は演劇の主役をやらされるハメになった。そもそもクラスの中で、俺はあまり目立たない位置にいます。ずだが、何故か最近、あまり仲の良くないクラスメイトにも頼られることがしばしばある。

秋元いわく、線が太くなったらしい。印象的にな。

余談だが、ジュリエットは桜井に多数決で決まったそうだ。

「じゃあ明日から練習始めるからね」

放課後、大竹から宣告を受け、俺は足早に教室を去った。

玄関で靴を履き替えていると、背後から名前を呼ばれるのを聞いた。この陰湿な声は、おそらく担任教師、榎本だろう。俺に何のようだろうか。

「貴様、気づいているかは知らんが、最近悪夢共の動きが活発化しているらしい」

「ああ、悪魔の副作用みたいなものだろ？」

涼から聞いた話によれば、悪魔の霊力のおこぼれを頂戴して、パワーアップしているらしい。どうやら最近の悪夢が強力になっているのはそのせいだとか。

「今日も学校の周りを何体が飛び回っていたが……まあ退治した。

いいか、これは忠告だ。余計なことに首を突っ込むな」

「何でアンタにそんなこと言われなきゃいけないんだよ」

そもそも、一度、榎本たちに巻き込まれたこともあるし。

「いいや……ただ、まあいいだろう」

榎本は背を向けて立去った。去り際に「覚えておけ」と言い残して。

「それにしても……なんかみんな戸惑ってるな」

涼はともかく、あの榎本まで俺に忠告をくれるとは、よっぽどのことなのだろう。

通学路を歩きながら、そんなことを考えていた。

「うん、でも悪魔が近づいているって事は守護霊にもプラス効果があるかもしてないよ？」

真は俺の脇を歩いている。

なんとなく、こいつも成長したような気がする、体系的に。

「ああ、そうか。悪夢が霊力をもらって強くなってるって事は守護霊にも効果があるのか」

「でも守護霊は基本、主とのつながりがメインだからね」

何気ない、平凡な下校時、俺は警戒を怠っていたつもりはなかった。

だが、気がつくのと、俺達の周りには誰もいなく、不気味な静けさが満ちていた。

「……………！？ おいおい、どういうことだ？」

確かに、俺の通っている道はあまり人通りが多くはないが、今は明らかに異常と言える。

まったく人の気配がないのだ。車の通る音も、道に面した家の住民の生活音すら聞こえない。

「人払い……………気をつけて、囲まれてる！」

路地の角と言う角から、悪夢が顔を覗かせた。その数はざっと十は超えている。だが、それ以上にもっと奇妙なことが起こった。

「真、……………どうして大人モードにならないんだ？」

俺達を囲う悪夢はジリジリ距離を詰めてくる。悪夢達は、一体一体はあまり強力には見えないが、真は戦闘が行える状態にならない。

「あいつら……………京平だけを見てる……………？」

真は、敵から明確な悪意を向けられると、その間だけ、本来の力を取り戻し、戦闘を行うことが出来る。俺が今まで接してきた敵は、必ず真と戦っている。

だが、今回は違う。どうやらターゲットは俺一人のようだ。

「まずい、来るぞ……！」

悪夢は一斉に俺達の方へ襲い掛かってきた。

第五十六話 「死の灰」

悪夢の一体が俺を目掛けて突進してきた。速度もそこまで速くない、俺でも十分かわせそうだ。

隣にいる真を抱えて、真横に飛ぶ。悪夢はそのまま塀に直撃するが、すぐに他の悪夢が俺を囲む。

「邪魔すんな！」

俺の正面に立つ悪夢の顔面に、精一杯の力で拳を突き刺す。

ただの人間の一撃だが、確実に効いているようだ。悪夢は仰け反り、その隙に肩をぶつけて、包囲を脱出する。

「京平、後ろ！」

「なっ!?!」

俺に抱えられていた真からは、後ろがよく見えていた。だから、咄嗟に叫んでくれたおかげで、後ろから大きな爪を振り上げる悪夢の攻撃に対応することが出来た。

だが、完璧に回避できたわけではない。

「くそっ、腕が……」

腕をかすった。おそらく、表面の皮膚がめくれただけだろうが、出血が多い。あまり樂觀できそうに無い。

「また来るよ！ 避けて！」

今度は別の悪夢が、両手を握り合わせハンマーのように振り下ろしてくる。

飛びのこうとしても、身体が追いつかない。

「ゴッ、!?!」

側頭部を叩かれ、バランス感覚を失い、地面に倒れこむ。

真が衝撃で投げ出されるが、悪夢は目も向けない。

「真、無事か!?!」

手を伸ばし、真を再び抱えようとしたが、その手を踏みつけられ

る。

耳元に吐息が聞こえる、良く見れば、悪夢の顔は真っ黒に塗りつぶされたように無個性で、どこか獣じみた野蠻な雰囲気がある。見回せば、俺を囲む悪夢全員がそのような顔立ちだ。

「ンゲツ、」

腹を踏みつけられ、息が詰まる。続けざまに、顔、足、脇腹も蹴られ、満身創痍だ。更に囲まれているため、動きを取れそうに無い。
(まずっ、……意識が……)

一瞬だけ、何度か意識が飛んだ。それぐらいに強烈に、横暴に悪夢の集団攻撃が続く。

せめて、真が無事でいれば、反撃の隙があるかもしれない。

「やめる！ これ以上、京平に手を出すなよ？」

真が、宙を舞い、俺を囲む悪夢を飛び越え、俺の上に、ふわりと着地した。

その途端、悪夢達の標的になったのか、本来の力を取り戻すことが出来た。

「京平、大丈夫？ ……ごめんね、私が守らなきゃいけないのに」

「心配すんな、これぐらい、大丈夫だ、だから、思いつきりやれ」

真は、その一言を聞いた途端、力があふれるような面持ちで、その手に炎を灯す。それから、十八番である包丁の五月雨を放ち、周囲の悪夢を一掃した。

相手に立ち直る隙を与えず、素早く烙印を地面に施す、その直後、地面がせり上がり、悪夢を蹴散らす。

「ふう、こんなもんかな……!!？」

真は手を抜く気も無く、本気で戦った。だが、悪夢達は、まるで回復しているかのように、みるみる傷が無くなり、再び襲い掛かってくる。

「……何度やっても結果は同じ!!」

再び、真が悪夢を撃退するが、悪夢達は何事も無かったかのように

に回復し、襲い掛かる手をやめない。

「キリが無い、なにか……トリックがあるはずだ」
辺りを見回すが、誰かが裏で糸を引いている痕跡が見えない。更に良く見れば、次々と路地から悪夢が増えている。

「真、逃げるぞ、ッ、」
痛みで声を漏らす、立ち上がり退路を見る。幸い、俺の後ろの道からは悪夢が来ていないようだ。まず、俺が先に路地を走り、その後ろから真が悪夢を返り討ちにしながらついてくる。
しばらく走った後、俺は、何故こちらから悪夢が来ていなかったのかを思い知らされた。

「行き止まり……かよ、ツクソ！」
そこは山の尾根を、コンクリートで壁にした行き止まりだった。上れる高さでもなければ、他に道もない。後ろからは、悪夢の軍勢が迫り来る。

「どうする……考える」
自分に言い聞かせるが、思いつかない。
そうしている間にも、真に目掛けて悪夢の攻撃が始まる。真と悪夢の実力差はかなりあるはず、しばらく持ちこたえられるだろう。

「京平、どうする？ 烙印でトンネルでも作ろうか？」
真は言うが、この尾根、どこまで広がっているかわからない。不用意に穴を開ければ落盤する可能性もある。
真に、悪夢が飛び掛った。それを払いのけるように、手に灯る炎を振る。そこから、真の得意の包丁が発生するが、
「つく、どうして……」

発生したのは、たった一本の包丁だった。それは、悪夢の顔面に直撃したが、勢いを殺せず、悪夢の攻撃を正面から食らってしまう。

(まずい、真の霊力が落ちてる、)

守護霊とその主は、つながりという見えない絆で結ばれている。これを通じて、守護霊は主の持つ霊力をもらいうけ、戦闘で使用している。つながりが強ければ強いほど、流れる霊力も増すが、今は俺の体が傷つき、体力も落ちている。自然と俺の身体が、霊力の供給をセーブしているようだ。

「危ない、京平！」

正面の真に気をとられ、横から回り込んできたほかの悪夢に気づかなかった。咄嗟に真が俺をかばい、盾となったが、首筋に深々と噛み付かれてしまった。

「真！ 離れる、この野郎！」

真に噛み付く悪夢を蹴り飛ばし、真を抱きかかえるが、予想以上に霊力の流出が多い、おそらく、先ほどの戦闘も無理していたのだろう。

俺が不甲斐無いせいで、真が傷ついている。

「 テメエら……これ以上真に手を出すなよ！？ 俺が……俺がゆるさねえからな 」

自分出来ることなど、真の前に立ちほだかり、悪夢と対峙するだけだ。

戦ったって勝てるはずが無い。ただ、これ以上、俺のせいで真を傷つけたくなかった。

「 おら、かかつて来いよ 」

いつせいに悪夢が飛び掛ってくる。なんの策も無い。ただの捨て身の行動だ。おそらく、この後俺は悪夢に容易く食いちぎられ、死んでいくのだろう。そんな中、俺の耳には、不思議なくらいに鮮明な声が聞こえた。

「 己を守る守護霊を、主がその身を挺して守ると言うのか。……面白い、面白いぞ人間よ 」

悪夢が奇声を上げながら飛び掛ってくる。もうかわせない。死を覚悟した。途端、悪夢が急に宙で停止した。と思ったら、色が足元から失せていく。いや、脱色ではなく、灰になる、と言うのが正しいだろう。まるで、生をもぎ取られたかのように、悪夢達の軍団は、一瞬で灰と化した。ただ、黒い閃光が迸っただけで。

「なんだ……これ、」

どこかで見たような気がする。

すると、灰が舞い散る路地の向こうから、一人の男が歩いてくる。徐々に近づく後、その姿が見えてきた。二十代前半ほどの若い男で、スーツを着込んだ、就職活動の真っ最中とも言つような風貌だ。髪型も、最近の青年を意識しているのだろう。ところが、彼の纏うスーツが、場違いなほどに黒いダークスーツと言う点を除けば、だが。

「誰だ？ お前が助けてくれたのか？」

「助ける……まあ、貴方から見れば、そうかもしれないね。ただ、僕にとってはそうでないかもしれない」

男の喋り方は、先ほど聞こえた声と少し違っているが、声はあまり遜色ない気がする。

「どういうことだ……？」

「それはともかく、早く傷の手当てをしたらどうですか？ あまりいい状況ではありませんよ？」

言われてみれば、足元で真が横たわっている。急いで抱き上げると、真の姿が、いつもの子供状態に戻ってしまった。

「お前は何者だ、教えてくれ」

俺のしつこい質問に、根負けしたのか、男が溜息混じりに言った。

「僕は死神です。死をつかさどる神、死神です。どうぞ、よろしく」
そう、死神は微笑んだ。

第五十六話 「死の灰」 (後書き)

ようやく登場しました、しにがみ君です。

実はかなり前から考えてた人なので、登場させてうれしいです。

第五十七話 「準備は進む」

「死神……だと？」

死神。それはいつだか聞いた事がある気がする。それがどこだったか、そして聞いた話の内容が何で合ったかまでは思い出せない。

「ご安心を、危害を加える気はありませんよ？」

その証拠に、襲い掛かる悪夢を蹴散らし、結果的に俺達を救ってくれている。

信用……して良いのだろうか。

「ふふつ、もしも、貴方と縁があれば、僕と必ず、再び出会うことになるでしょう。それでは」

そっぴい残し、来た道を引き返していた。

次の瞬間には、もうその姿が見えなくなっていた。

「なんだったんだ……いや、それよりも真のほうだ。大丈夫か!？」

真はダメージがあるが、まだ大丈夫そうだ。

俺は携帯電話で涼に連絡し、真の回復のために涼のところへ行くことにした。

翌日、学校へ向かった。

真は昨日、すぐに回復し、今では何の問題も無い。

悪夢がいきなり襲ってきたことについては、悪魔が接近していることで、悪夢のバランスが崩れたとか、そんなことを言っていた。

だが、真を狙わず、俺だけを狙ってきたことや、死神という存在については詳しくわからないそうだ。

そんな考え事をしながら、授業が進み、気がつけば放課後になっていた。

「やつほー、金城君、今日は残るよね？」

教室を出ようとしたところを、大竹につかまった。

「え？ ああ、ちょっと用事が……」

用事なんて無かったけど、なんとなく学祭の雰囲気にはなれなかった。

「そんなことじゃ、本番上手くないよ！ ほらほら、主役みたいなもんだから！」

半ば強引に教室に押し戻され、学祭の練習が始まってしまった。

「はあ、まあ仕方ねえか。ところで桜井は？」

同じく主役級の桜井が居ないと、練習も上手く行かない気がするが。

「ああ、優希は買出しに行った」

「何だよ、そういうの裏方の役目だろ！？」

「衣装は本人も見て選んだ方が良いでしょう？ さあ、金城君は台詞を覚えましょう」

そういえば、台本なんてろくに目を通していなかった。

台詞を覚えるのに悪戦苦闘した。

しばらくすると、買出しから帰って来た桜井も交えて、一通りやってみるようになった。

「はい、じゃあ台詞三十五番から！ はい！」

監督みたいに、大竹が、手をぱっちゃんと鳴らし、練習が始まる。

場面は、踊っているジュリエットを一目見たロミオが賞賛の言葉を言い、甥のティバルトに聞かれてしまうという所。

「『なんと！ その人は松明に明るく燃えているかのようだ！ 黒

人が身につけている宝石のように、夜のやみのなかで際立っている！ その美しさは地上においておくにはあまりに高貴すぎる！』つてどんだけべた褒めすんだよ！」

半ば、一人ノリ突っ込み。急に背筋が暑くなった。

「いいよいいよ！　そこで更にロミオのダメ押し！」

明らかにノリノリの大竹に促され、俺は台本をめくり、台詞を読む。

（ダンスが終わり、その女性が立っているところを見つめた。仮面をつけていたので、多少の無礼は許してくれそうだったので、手をとった。）

「君の手は聖地のようだ。僕が触ったことで、穢してしまったのであれば、償いのためにキスをさせて欲しい！」　つてただの変態じやねえか！！」

「えー？　だって原作でもそういう感じで……」

「言い方が違うんだよ！　これじゃ無理やりキスを迫ってるだけだろ！」

俺は桜井の手をとりながら、とんでもないことを言っていた。演技でも恥ずかしい。

「……いや、そこでお前も顔を赤らめないでくれよ」

「ええっ？　いや、えっと……『キスはいけませんわ！』」

素っ頓狂な声で、桜井は台詞を叫んだ。

なんだか、先が思いやられた。

「はあー、とんでもなく疲れた……」

学校祭の練習も終わり、俺はやっと帰路につくことになった。

辺りはもう夕暮れ、秋が深まり、日がくれるのも早くなってきた。
「いいじゃん、良かったよ。『キスをさせて欲しい!』、だって。
ふふっ」

「だから笑うな！ 俺だってあんな台本……」
そもそも台本を書いた大竹の語彙力に問題があるだろう。

「そんなところで守護霊と大声で話していると、傍からは独り言に聞こえるわよ?」

振り向けば、後ろから藍那が追いかけてきた。

どうやら、同じく学校祭の準備で残っていたらしい。

「なんだ、おまえか」

「なんだって何よ!? それよりも、教室の外からちよっと見たけど、酷い演技だったわねえ」

「なっ、聞いてたのかよ……」

出来れば忘れて欲しい。だが、藍那は弱みでも握ったかのようにニヤニヤ笑っている。

「そっちは何やんの?」

「私は教室展示、いいでしょ?」

ちっ、なんだかんだで、こいつも恥ずかしい演技をやるのかと思っただのに。

「そんなことより、アンタ、昨日悪夢に襲われたんだって?」

「ああ、涼から聞いたのか」

「実はね、私たちのほうにも来たのよ。悪夢の群れが」

「無事だったのか?」

まあね、と答える藍那。それにしても、昨日、ほぼ同じ時間帯に同時に悪夢に襲われるというのは、やはりただ事ではない気がする。
「他に被害者とかは居ないのか?」

「うん、生徒ではないみたい。涼が調べてるけど、街でも被害は出てないみたいよ。ただ、やっぱり悪夢の数自体が増えてるみたい」

俺のときほどの大群ではないにしろ、悪夢が増えて人を襲うようになってるといふことか。

悪魔の接近といい、最近はおかしなことが多い。

「まあそれでね。またアンタが襲われたりしないように、一人で歩くのは絶対ダメ。それから出来る限り、悪夢と戦える人と行動すること、だって」

「悪夢と戦える人？」

それはつまり、守護霊が見えるってことか。

それなら、大分人数が限られてくるような……。

「そ、だから特別に私が登下校と一緒に居てあげる。良いでしょ？」
確かに、リリースの戦闘能力は心強い。

「……仕方ないな」

「ちよつと、その間は何？ 不満があるわけ？」

「いいや、うれしいよ。ありがとう」

「ちよ、そ、そう。よかつたわね」

微妙な返事をして、藍那は先に歩いてしまった。

「待てよ、先に行ったら意味ないだろ！？」

俺は急いで藍那のあとを追いかけた。

第五十八話 「銀のナイフ」

暗い、寒い、寂しい。

そんな、場所だった。ガランドウの中、自分だけが、ビンの中に閉じ込められたかのような。とにかく息が詰まりそうで、絶望だけが塗り固められたような空間。

ジメジメとして、身の周りには、無骨な岩肌のような壁がある。ところどころにひび割れがあり、外の様子が見える。だが、外は大嵐の真っ只中のように風が吹き込んでくる。その風の音が、誰かの不満や不平を訴える怒号のようで、耳を塞ぐ。

誰もいない。

自分はこの空間の中で、独り、自らの身体を抱くように座っている。

何を思うのかもわからない。

ふと思えば、いつも誰かの顔を思い浮かべている気がする。

自分が誰なのかも、わからない。

ただ、一つの使命のみ。

使命とは……なんだったのか。

ただ、会いたい。

寂しいのは、もう、

イヤダ。

「ハア、ハア、ハア、……夢？　か、……」
午前二時、完全に街が寝静まった頃、俺は汗だくになりながら起き上がった。

いつも通りの自分の部屋、特に変わったことも無い。外も、……月が見えるほど良い天気だ。ふと、自分の足元を見れば、そこにうずくまって寝ている真を見つけた。

守護霊でも睡眠する意味があるのか？

なんだか、その寝顔を見ると、不思議と落ち着き、先ほどから感じる頭痛も忘れ、再びベッドへ戻った。

支度を終え、学校へ行くため家を出た。本日も学校祭の準備が待ち構えているかと思うと、正直あまり気分が乗らなかった。その気分を反映してか、今日は曇り空だった。

「なんか今日は風が強いな……」

家を出た途端、強風に吹かれた。季節がもう秋に入っているので、なかなか寒い。

「この風……ちょっと靈気を感じるかも」

真が心配そうに呟いた。

「やっぱ例の悪魔とかの影響なのかな……」

悪魔が日本に近づいている。と、言われてもやっぱり実感がわかないものだ。涼達のサークルが対策を練っているらしいが、悪魔の集合体のような奴に、どうやって戦うのだろうか。

そんなふうに、サークルのことを考えていたからなのか、電柱に背を預けている藍那の姿を見つけた。

「よう、どうした？　こんなところで」

「どうしてって……昨日言ったこと忘れたの!？」

呆れたように言う藍那に、俺はようやく思い出した。

「あー、そういえばそんなこといつてたな……それじゃあ行くか」
「なんだか、今更、女の子と二人で登校するのに、何か思うわけではない。なにしろ、それぞれ守護霊がついてるもんだから、感覚としては四人みたいなものだ。」

(痛っ、……)

急に、今朝夢に見た頭痛が再発した。皆に気づかれぬように、なるべく平静を保ち、歩き続け用としたが、

「大丈夫!？」

という真と藍那のシンクロに、あっさりと見抜かれてしまった。

「いや、なんでもねえよ。さ、早く行こうぜ……」

必要以上に心配をかけるわけにもいかない。ただでさえ、問題が山積みな時期に、ただの頭痛で騒ぐ必要も無い。

「ほんとに? 何かあったら必ず言う事。絶対だからね?」

藍那に念を押すように強く言われた。なんだかんだで頼れる存在だ。

学校に着けば、また違う問題で頭を悩ますことになる。

学校祭の準備は着実に進み、舞台の小道具やら衣装やらを作る作業に入っていた。小道具、大道具は、工作好きや裏方専門の、おもに男子中心に行われ、衣装関係は、女子達のプライドをかけた戦いが行われそうだ。

その間、舞台上がる俺や桜井は、台詞の暗記や演技の練習に励むことになる。

「ねえねえ、最後のジュリエットが使う、ロミオの短剣はどうするの？」

桜井が尋ねた短剣とは、最後のシーンで、ジュリエットが自ら命を絶つ時に、使うものだ。かなり重要な小道具だろう。

小道具係に指揮を飛ばしていた大竹が考え込む。

「うーん、やっぱり手作りはちやちになりそうで嫌なのよね……となると、どこかで買ってこなきゃいけないんだけど、やっぱり本物って訳にもいかないしね」

刃の無い模造刀が一番だ。演技だからといって、本物を使うわけにも行かない。第一、本物の短剣なんて売ってるわけがない。

と、そこに、クラスメイトの男子生徒が、悩める大竹に助言した。「俺、作り物の剣とか売ってる店知ってるぜ。なんなら買いに行こうか？」

どうやら模型の武器とかに詳しい奴みたいで、その店にも良く行くという。

「そうねえ、君はまだ作業の途中でしょ？ だったら地図でも書いてくれたらこっちで行くから」

密かに、口実をつけてサボろうとした男子生徒が、悔しそうに肩をすぼめて、地図を描いた。

「じゃ、ここは主役の二人に買いに行ってもらおうかな。領収書はちゃんともらってきてね」

最初からそうするつもりだったのか……。

主役は演技の練習をすべきだという俺の抗議も虚しく、桜井と買出しに行くことになった。

「な、なんかゴメンね？」

学校を出ると、気まずそうに桜井が謝った。

「なんでお前が謝るんだよ、いいから買いに行こうぜ。どうせならとびきりかっこいい奴を買おう」

どうせ、金は学校が払うんだから。と思ったが、確か学祭費は後から徴収されるんだっけ。とか考えて歩いていると、桜井が話しかけてきた。

「あのさ、やっぱりロミオ役って嫌？」

多数決で主役に決まった時のことを思い出した。そういえば、桜井も多数決だっけ。

「いや、今はそうでもないな。初めは大変だったけど、慣れればそうでもないし」

もう、今更どうこう言っても仕方ない。台詞は大竹が考えたものから大きく改善したつもりだし。

「私もね、初めは嫌だったんだ。人前に立って演技するのは大変だし、恥ずかしいし。でも、今になってみれば、みんなすごく協力してくれるし、私も新しいことに挑戦してみるのも良くなった」

「不安じゃないのか？ やっぱり失敗はできないよな」

実言うと、俺は当日のことがやっぱり不安だ。台詞を忘れちまいそうさ。

「うん、すごい不安。皆が支えてくれてるけど、逆にそれがプレッシャーにもなりそう。失敗したらみんなの努力が無駄になるんじゃないかって。でもね、それ以上に心強いんだよ」

「ん？ 何が？」

尋ねる俺に、ちょっと恥ずかしそうに顔を背けながら

「京平君と一緒になら出来そうな気がするんだよ」

「お、おう……」

なんだか恥ずかしくなり、俺達は足を速めた。

件の店は、結構おしゃれな店構えだった。金属工芸品と銘打って、剣のほかに、照明器具やインテリアなどもそろえた何でもありな店だった。店主のようなオヤジが、すごい厳ついのがすごくギャップがある。

「ねえ、これなんて良くない？」

桜井が指差すのは、銀に輝くナイフのような短剣だ。柄には刺繍のような細やかな細工が為されていて、とても綺麗だった。

「いいんじゃないか？ …… 値段は、まあ」

普通では絶対に買わない値段だが、学校祭だ。どうせ俺が払うわけじゃない。

結局、銀のナイフを買って、店を出た。

店主いわく、これは店主の手作りではなく、どこからか貰い受けた品らしい。

学校に戻り、大竹に領収書を見せたら、半狂乱で大騒ぎになったが、それは余談だ。

第五十八話 「銀のナイフ」(後書き)

ずいぶん間が空いてしまいました。
これからも頑張ります。

第五十九話 「ゴーストスクール」

本日の学校祭準備も終了した。練習は滞りなく進み、このまま行けば、本番の前日のリハーサル前までには完璧に出来そうだ。

完全下校時間になれば、あたりは既に夕暮れ、日も沈みかけ、もう夜が近い。

俺と藍那は校門をくぐろうとした時、急に後ろから声を掛けられた。

「あれ、金城君。今帰るの？」

「えっ？ ああ……まあな」

桜井は俺の顔と藍那の顔を交互に見比べて、固まってしまった。

「どうしたの？ 早く帰ろうよ」

藍那が急かすように俺の腕を引っ張った。俺はよろけながら藍那についていく。

「あ、あの……」

桜井が何か言いたげな表情をしていたが、俺は藍那に引かれ、立ち止まることが出来なかった。

「二人は付き合ってるんですか！？」

「ぶっ！？」

思わず噴出してしまった俺に向かって、桜井は尋ねる。

「べ、別にそういうわけじゃないわよ！ ただ、ちよつと事情があるって言うか……」

藍那が取り乱したように、何事か呟いていたが、その隙を桜井は見逃さずに、畳み掛ける。

「じゃあ、私も一緒に帰っても良いですよね？」

「え、ああ、もちろん」

俺は了承しかけたが、藍那が腕を強く引っ張って耳元で囁いた。

「（悪夢が襲って来たらどうするの！？）」

「（その時は、一緒に守れば良いだろ？　一応ヴァリエもいるんだから安心だ）」

それを聞くと、藍那も渋々「わかったわよ……」と了承してくれた。

だが、俺はこの判断を後から後悔することになる。

「あの……二人とも、歩きにくいんだけど……」

帰り道、成り行きで藍那と桜井と一緒に帰ることになったが、藍那は掴んだ腕を放そうとしないし、それに負けじと桜井も俺の腕を掴んで、両側から引つ張られるように歩くことになった。

後ろで、真が鼻で笑ったような気がした。

「ハッキリしないあんたが悪いのよ」

藍那が言う事に、いまいちピンと来ないが、俺はこの体勢のまま歩き続けた。道行く人に笑われている気がするのは、気のせいだと思いたい……。

「ふう、なんか疲れちゃった……」

家に帰り、部屋に戻ると、練習の疲れが出て、すぐに眠くなってしまった。夕食を食べ、風呂から上がると、そのままベッドに入り、眠りに落ちてしまった。

・ 暗い、冷たい、ランドウのような空間。一人、膝を抱えてこの灰色の壁の中に座り込んでいた。寒さは肌を刺す。痛みはしかし、感覚がもう麻痺してしまったのか、何も感じない。

何も感じない。

寂しさも、麻痺してなくなれば良いのに。

ふと、風を感じた。

壁の隙間から、外が見える。外は大嵐の真ん中のように、風が荒れ狂う音が響く。

その風の中に、悪夢を見た。

目が合う、その顔は……。

「　　ッハア、ハア。……なんなんだ、いったい……」
その日の夜も、俺は悪夢を見た。
ベッドの中のた打ち回ったのか、シーツが乱れ、汗でシャツが張り付いて気持ちが悪い。

夜風をあびようと思って、窓を開け、ベランダに出た。
汗ばんだ身体に、秋の夜風は気持ち良かった。だが、流石にもう寒くなる季節だ。夜にあまり外に出るのは、身体によくない。

「寒い、か……」
今でも、夢の内容をしつかり覚えている。夢の中で感じた、孤独と不安。そして痛み。とても幻だとは思えない。

「誰か……。誰かの感情が流れ込んできているのか……？」
俺の体に起こりつつある異変に、身体を震わせ、ベランダから部屋に戻った。

ベッドに入りなおし、目を閉じる。
もうすぐ、リハーサルだ。それまでにしっかりと練習しておかないと。

「それで、平気なの？」
朝、学校に向かう通学路で、藍那は俺の顔を心配そうに眺める。
昨晚見た夢のことを、うっかり藍那に話してしまったのだ。真も心配なのか、俺の背中に引っ付いている。俺は大丈夫だからと手を振って、二人を安心させ、学校へ向かった。

校門をくぐったところで、違和感を感じる。何も変なところは無

いのだが、何かが引つかかる。藍那もそう感じたのか、なにやら難しそうな顔だ。

「なあ、なんか変じゃねえか？」

校門もいつもどおり、若干さび付きながらも立派に開いている。

校舎も、一晩で窓ガラスが全部割られているなんて事も無く、いつも通りだ。

「いない……」

「ん？」

「誰もいないじゃない、この時間は登校する学生が一番多い時間帯でしょ？」

言われて、見回してみる。確かに、俺と藍那を除く、登校する学生の姿が一人も見えない。いつもは特に気にしていなかったが、グラウンドの方にも朝練をする部活動も無い。

「教室にいつてみよう、誰かいるかもしれない」

俺はこのとき、胸の奥で小さな不安が疼くのを感じた。

孤独。

俺の思い過ぎなら良い。実は今日は日曜日でした、なんてオチでも、むしろその方が良いと思う。とにかく、俺の不安を何とかして払拭してしまいたかった。

藍那とともに、校舎に飛び込み、階段を駆け上がる。廊下にも誰もいない。ゴーストスクールと化した校舎に、俺達の足音だけが響く。一番近くの教室のドアを押し開けた時、俺は失神して、その場に倒れこむかと思った。それくらい驚いた。

目という目が、すべて教室に入ってきた俺を見ていた。

教室にある机の全部に、きっちり生徒が座っている。だが、彼らの目はうつろで、表情は固まっている。首を傾けて、正面から俺を睨んでいた。

「あ、あの……お前ら、どうしたんだよ」

異常な光景に戸惑いながらも、声を絞り出す。

その時、真が鋭い声で「危ない！」と警告を放った。

途端、俺は顔面を何者かに殴られた。

よろけながら、殴ったものの顔を見た。

「先生っ、なんで!？」

他クラスの、名前がわからないが、先生が、俺を憎しげに睨みながら、こぶしを振り回す。俺は距離を取り、教室から逃げ出して、廊下に出た。

すると、他のクラスを見てきた藍那も、同じような状況に遭ったのか、逃げるように走ってきた。

「どうなってるの!？ これ、まるで催眠術にかけられたみたいに

……」

「……話は後だ、まずは逃げるぞ!」

「えっ?」と面食らう藍那の肩越しに、教室からゾンビのようにぞろぞろ出てくる生徒達が見えた。全員が正気を失い、人形のようにフラフラ歩いてくる。

俺達の学校は、一夜にして、何者かに操られていた。

第五十九話 「ゴーストスクール」(後書き)

ずいぶん更新できていませんでした。大変申し訳ありません。今後の展開に色々不安を持っていましたが、とにかく頑張ります。どうぞこれからもよろしくお願いします。

第六十話 「ワンコール」

廊下に飛び出した俺達だが、追ってくるように、教室からゾンビのような生徒達が溢れてきた。

穏やかな朝日の差し込む廊下。その中に、現実離れたとり付かれたような生徒達。そのアンバランスさが、恐怖を一層かき立てた。「とにかく逃げるぞ！」

生徒達の溢れる反対側の廊下から逃げようとするが、既にそちら側からも生徒達があふれている。

「京平、あれ見て！」

真が指差す方向には、生徒達の守護霊だろう人影が見えた。だが、それも普通の様子ではない。悪性の何かが変異したような、もはや原形を留めていない。

「囲まれた、クソッ、どうする!?!」

そうしている間にも、ゾンビのような集団はジリジリ迫ってくる。

「仕方ない、壁をぶち破るわよ！」

藍那がリリスに指示を飛ばす。

「待て、ここは三階だぞ!?!」

俺の制止も聞かず、リリスは校舎の廊下に、人二人は優に抜けられる大穴を開けた。

「さあ、飛ぶわよ！ つかまって！」

藍那に腕を引かれ、俺の体は空中に飛び出した。その後、リリスが二人を抱きかかえるように抑え、ムチをロープのように扱い、校舎の壁をけりながら、外に逃げだす。

見上げれば、穴の周りで立ち往生するゾンビのような生徒の姿があった。

「校舎の外には出てこれないみたいだな」

俺達はとりあえず、体育館の横にある物置に姿を隠すことにした。学校の外の様子は至って普通で、それがまたこの事態の異常さをかき立てていた。

「とりあえず放っておくわけにも行かないわね。誰かが操っているなら、その術者を潰せばたぶん解けると思うけど」

藍那はマツトの土埃を払って、その上に座った。

「でも、術者がいるとして、どうやって捜すんだ？ 校舎に入れば、きっとゾンビたちに襲われるぞ。それに、ゾンビたちは元は生徒だから傷つけるわけにも行かない」

「分かってるわよ。だからどうしようか考えてるんじゃない」

藍那はイライラして頭をかき乱すが、良いアイデアは浮かんでこないようだ。

そもそも、犯人は何を考えて、こんな事したんだろう。まだ時間も早いから、普段は家にいるはずの生徒もいるはずだ。ならば、その生徒は、昨日の段階で既に操られて、今朝早くに家を出たことになるろう。

そうする意味は何だ。何を企んでる？

俺の考えも迷宮入り仕掛けた時、携帯電話のヴァイブレーションがなった。

「誰だ……？ こんな時に」

ディスプレイを見ると、桜井からだ。電話に出ると、小言で、まるで近くにいる誰かに気づかれないように囁いた。

『もしもし……？』

「桜井！ 無事か？ 今どこにいる？」

『今、講堂で衣装合わせしてたんだけど……急にみんなの様子がおかしくなって、それで、なんだかよくわからないけど、仮装したよ。うな格好の人が突然現れて、でも、守ってくれる人も……』

「落ち着け、今どんな状況だ？」

『講堂の奥にある物置に隠れてるの。なんだか騎士みたいな格好の人が守ってくれて。ねえ、この人、どこかで見たことある気がする』
の

「わかった、とにかく今から俺も行く。そこで待ってる」

『えっ、でも危険だよ。校舎内は危険だから逃げて！』

桜井の警告を無視して、俺は電話を切った。

悪いな、やっぱり俺は桜井を見捨てて一人で逃げるわけにも行かない。

「行くの？ 助けに」

藍那が俺に尋ねる。しかし、もう答えはわかっているはずだ。

「ああ、もちろん」

「でもどうするのよ。あのゾンビは元生徒だし、あの子がいる講堂は四階よ。上るのだから一苦労じゃない」

「おまけに、桜井をつれて逃げないとな。どうやらヴァリエの姿が見えちまつてるみたいだし、急がないとまずい」

しかし、効果的な打開策が思いついているわけでもない。

となれば、もうとるべき行動はひとつしかない。

「正面から行く。それしかない」

「アンタ、どれぐらい危険かわかってる？ 数でも差があるのに、

こっちは思うように攻撃できないのよ！？」

「それでも、ここでじっとしてても意味が無い」

「せめて術者を探しましょう。術が解ければ問題ないわけだし」

「それはお前に任せてもいいか？ 俺は桜井を助けに行く」

「でも一人じゃ危険よ。せめて二人で行動しないと……」

お互いに言いたいことはわかっていても、状況を理解していても、譲ることができなかった。ただ、こうしている間にも時間は経過する。

「それなら、私達も作戦に加える。それで問題あるまい」

体育館の物置のドアが開かれ、二人の大人が入ってきた。陰気な面をした数学教師、榎本と過去に敵対した藤崎だった。

「あんたら……」

「私達が術者を搜索するから、君達はその子を救出しなさい。國粹とセーレがいればこちらは大丈夫よ」

藤崎は、敵なのか味方なのかわからない笑みを浮かべ、俺達に行くように促した。

「わかった。感謝するよ。でも、どうして……?」

「ふん、これでも教師だからな。まだ子供にはわかる問題でもないさあ行け。時間が無いぞ」

榎本に促され、俺達は再び校舎へ向かった。

玄関はロックが解除されているのか、鍵がかかっておらず、入るのには苦勞しなかった。相変わらず、校舎内は静まり返り、くるべき時を待っているかのようだった。

「慎重に行くぞ。たぶん、あいつらは俺達に気づいていない」

足音を立てないように、廊下を慎重に歩く。階段までたどり着けば、そこから一気に四階まで上がることができる。気づかれなければ、戦う必要も無い。

「そう、上手くもいかないみたいね」

藍那が指差す向こうには、空中に浮遊する変異して変わり果てた姿に成り果てた誰かの守護霊がいた。彼はこちらに気づくと、警報のような叫び声を上げた。

「走るぞッ！ 一気に桜井の元まで行く！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9354f/>

ガーディアン～守護霊～

2011年8月3日01時33分発行